
飯 能 市

向 原 A / 芦 荻 場

株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

2020

株式会社 秀拓
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	5
(1) 発掘調査	5
(2) 整理・報告書の作成	5
3 発掘調査・報告書作成の組織	6
II 遺跡の立地と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	10
III 遺跡の概要	16
1 向原A遺跡	20
2 芦荻場遺跡	21
IV 向原A遺跡の調査	28
1 縄文時代の遺構と遺物	28
(1) 住居跡	28
(2) 集石土壌	61
(3) グリッド出土遺物	65
2 中・近世の遺構と遺物	70
(1) 地下式坑	70
(2) 土壌	70
(3) ピット	72
(4) グリッド出土遺物	72
V 芦荻場遺跡の調査	81
1 旧石器時代の遺構と遺物	81
2 縄文時代の遺構と遺物	83
(1) 住居跡	83
a) I区	83
b) II区	92

(第2分冊)

c) III区	437
d) IV区	675
(2) 集石土壌	704
a) II区	704
b) III区	741
c) IV区	777
(3) 土壌	779
a) II区	779
b) III区	788
c) IV区	798
(4) 特殊遺構	799
a) I区	799
b) II区	799
(5) グリッド出土遺物	804
a) 縄文土器	804
b) 土製品	807
c) 石器	811
d) 石製品	817
3 中・近世の遺構と遺物	821
(1) 地下式坑	821
a) II区	821
(2) 土壌	829
a) I区	829
b) II区	829
c) III区	836
(3) 井戸跡	836
a) II区	836

(4) 溝跡	836
a) II区	836
b) III区	837
(5) ピット	837
a) I区	845
b) II区	845
c) III区	845
(6) グリッド出土遺物	847
VI 自然科学分析	856
1 材同定	856
2 放射性炭素 (^{14}C)	
年代測定 (AMS法)	859

3 レプリカ・セム法による	
土器圧痕分析	861
VII 調査のまとめ	866
1 発掘調査の成果	866
2 縄文時代中期の環状集落変遷	866
3 縄文時代中期の土器群について	875
4 縄文時代中期の石器群について	886
5 芦荻場遺跡の集石土壙について	886
6 集石土壙の礫分析について	890

(第3分冊)

写真図版

插图目次

(第2分册)

第355图	第21号住居迹(1)·····	438	第383图	第51号住居迹(2)·····	473
第356图	第21号住居迹(2) ·出土遺物(1)·····	439	第384图	第51号住居迹出土遺物(1)·····	474
第357图	第21号住居迹出土遺物(2)·····	440	第385图	第51号住居迹出土遺物(2)·····	475
第358图	第22号住居迹(1)·····	442	第386图	第51号住居迹出土遺物(3)·····	476
第359图	第22号住居迹(2)·····	443	第387图	第52号住居迹(1)·····	478
第360图	第22号住居迹 遺物出土狀況(1)·····	446	第388图	第52号住居迹(2)·····	479
第361图	第22号住居迹 遺物出土狀況(2)·····	447	第389图	第52号住居迹 遺物出土狀況(1)·····	480
第362图	第22号住居迹出土遺物(1)·····	448	第390图	第52号住居迹 遺物出土狀況(2)·····	481
第363图	第22号住居迹出土遺物(2)·····	449	第391图	第52号住居迹出土遺物(1)·····	482
第364图	第22号住居迹出土遺物(3)·····	450	第392图	第52号住居迹出土遺物(2)·····	483
第365图	第22号住居迹出土遺物(4)·····	451	第393图	第52号住居迹出土遺物(3)·····	484
第366图	第22号住居迹出土遺物(5)·····	452	第394图	第52号住居迹出土遺物(4)·····	485
第367图	第22号住居迹出土遺物(6)·····	453	第395图	第52号住居迹出土遺物(5)·····	486
第368图	第22号住居迹出土遺物(7)·····	454	第396图	第52号住居迹出土遺物(6)·····	487
第369图	第22号住居迹出土遺物(8)·····	455	第397图	第52号住居迹出土遺物(7)·····	488
第370图	第22号住居迹出土遺物(9)·····	456	第398图	第52号住居迹出土遺物(8)·····	489
第371图	第23号住居迹·····	458	第399图	第53号住居迹(1)·····	492
第372图	第23号住居迹 遺物出土狀況(1)·····	459	第400图	第53号住居迹(2)·····	493
第373图	第23号住居迹 遺物出土狀況(2)·····	460	第401图	第53号住居迹 遺物出土狀況(1)·····	494
第374图	第23号住居迹出土遺物(1)·····	462	第402图	第53号住居迹 遺物出土狀況(2)·····	495
第375图	第23号住居迹出土遺物(2)·····	463	第403图	第53号住居迹 遺物出土狀況(3)·····	496
第376图	第23号住居迹出土遺物(3)·····	464	第404图	第53号住居迹 遺物出土狀況(4)·····	497
第377图	第23号住居迹出土遺物(4)·····	465	第405图	第53号住居迹 遺物出土狀況(5)·····	498
第378图	第23号住居迹出土遺物(5)·····	466	第406图	第53号住居迹出土遺物(1)·····	499
第379图	第23号住居迹出土遺物(6)·····	467	第407图	第53号住居迹出土遺物(2)·····	500
第380图	第23号住居迹出土遺物(7)·····	468	第408图	第53号住居迹出土遺物(3)·····	501
第381图	第23号住居迹出土遺物(8)·····	469			
第382图	第51号住居迹(1)·····	472			

第409回	第53号住居跡出土遺物 (4)·····	502	第444回	第58号住居跡	
第410回	第53号住居跡出土遺物 (5)·····	503		遺物出土狀況 (1)·····	549
第411回	第53号住居跡出土遺物 (6)·····	504	第445回	第58号住居跡	
第412回	第53号住居跡出土遺物 (7)·····	505		遺物出土狀況 (2)·····	550
第413回	第53号住居跡出土遺物 (8)·····	506	第446回	第58号住居跡	
第414回	第53号住居跡出土遺物 (9)·····	507		遺物出土狀況 (3)·····	551
第415回	第53号住居跡出土遺物 (10)·····	508	第447回	第58号住居跡	
第416回	第53号住居跡出土遺物 (11)·····	509		遺物出土狀況 (4)·····	552
第417回	第53号住居跡出土遺物 (12)·····	510	第448回	第58号住居跡出土遺物 (1)·····	553
第418回	第53号住居跡出土遺物 (13)·····	511	第449回	第58号住居跡出土遺物 (2)·····	554
第419回	第53号住居跡出土遺物 (14)·····	512	第450回	第58号住居跡出土遺物 (3)·····	555
第420回	第54号住居跡 ·····	518	第451回	第58号住居跡出土遺物 (4)·····	556
第421回	第54号住居跡出土遺物 (1)·····	519	第452回	第58号住居跡出土遺物 (5)·····	557
第422回	第54号住居跡出土遺物 (2)·····	520	第453回	第58号住居跡出土遺物 (6)·····	558
第423回	第54号住居跡出土遺物 (3)·····	521	第454回	第58号住居跡出土遺物 (7)·····	559
第424回	第54号住居跡出土遺物 (4)·····	522	第455回	第58号住居跡出土遺物 (8)·····	560
第425回	第55号住居跡 ·····	525	第456回	第58号住居跡出土遺物 (9)·····	561
第426回	第55号住居跡出土遺物 (1)·····	526	第457回	第58号住居跡出土遺物 (10)·····	562
第427回	第55号住居跡出土遺物 (2)·····	527	第458回	第58号住居跡出土遺物 (11)·····	563
第428回	第56号住居跡 (1)·····	528	第459回	第58号住居跡出土遺物 (12)·····	564
第429回	第56号住居跡 (2)·····	529	第460回	第58号住居跡出土遺物 (13)·····	565
第430回	第56号住居跡		第461回	第58号住居跡出土遺物 (14)·····	566
	遺物出土狀況 (1)·····	531	第462回	第58号住居跡出土遺物 (15)·····	567
第431回	第56号住居跡		第463回	第58号住居跡出土遺物 (16)·····	568
	遺物出土狀況 (2)·····	532	第464回	第59号住居跡 (1)·····	574
第432回	第56号住居跡出土遺物 (1)·····	533	第465回	第59号住居跡 (2)·····	575
第433回	第56号住居跡出土遺物 (2)·····	534	第466回	第59号住居跡遺物出土狀況 ·····	576
第434回	第56号住居跡出土遺物 (3)·····	535	第467回	第59号住居跡出土遺物 (1)·····	577
第435回	第56号住居跡出土遺物 (4)·····	536	第468回	第59号住居跡出土遺物 (2)·····	578
第436回	第56号住居跡出土遺物 (5)·····	537	第469回	第59号住居跡出土遺物 (3)·····	579
第437回	第57号住居跡 (1)·····	540	第470回	第59号住居跡出土遺物 (4)·····	580
第438回	第57号住居跡 (2)·····	541	第471回	第59号住居跡出土遺物 (5)·····	581
第439回	第57号住居跡出土遺物 (1)·····	542	第472回	第59号住居跡出土遺物 (6)·····	582
第440回	第57号住居跡出土遺物 (2)·····	543	第473回	第60号住居跡 (1)·····	586
第441回	第57号住居跡出土遺物 (3)·····	544	第474回	第60号住居跡 (2)	
第442回	第57号住居跡出土遺物 (4)·····	545		・遺物出土狀況 ·····	587
第443回	第58号住居跡 ·····	548	第475回	第60号住居跡出土遺物 (1)·····	588

第476回	第60号住居跡出土遺物 (2)·····	589	第510回	第64号住居跡出土遺物 (2)·····	631
第477回	第60号住居跡出土遺物 (3)·····	590	第511回	第64号住居跡出土遺物 (3)·····	632
第478回	第60号住居跡出土遺物 (4)·····	591	第512回	第64号住居跡出土遺物 (4)·····	633
第479回	第61号住居跡 (1)·····	594	第513回	第64号住居跡出土遺物 (5)·····	634
第480回	第61号住居跡 (2) · 出土遺物 (1)·····	595	第514回	第64号住居跡出土遺物 (6)·····	635
第481回	第61号住居跡遺物出土状況·····	596	第515回	第64号住居跡出土遺物 (7)·····	636
第482回	第61号住居跡出土遺物 (2)·····	597	第516回	第64号住居跡出土遺物 (8)·····	637
第483回	第61号住居跡出土遺物 (3)·····	598	第517回	第64号住居跡出土遺物 (9)·····	638
第484回	第61号住居跡出土遺物 (4)·····	599	第518回	第64号住居跡出土遺物 (10)·····	639
第485回	第61号住居跡出土遺物 (5)·····	600	第519回	第64号住居跡出土遺物 (11)·····	640
第486回	第62号住居跡 (1)·····	602	第520回	第64号住居跡出土遺物 (12)·····	641
第487回	第62号住居跡 (2)·····	603	第521回	第65号住居跡出土遺物 (1)·····	644
第488回	第62号住居跡 (3)·····	604	第522回	第65号住居跡出土遺物 (2)·····	645
第489回	第62号住居跡出土遺物 (1)·····	605	第523回	第65号住居跡出土遺物 (3)·····	646
第490回	第62号住居跡出土遺物 (2)·····	606	第524回	第66号住居跡・出土遺物 (1)·····	648
第491回	第62号住居跡出土遺物 (3)·····	607	第525回	第66号住居跡出土遺物 (2)·····	649
第492回	第62号住居跡出土遺物 (4)·····	608	第526回	第67号住居跡 (1)·····	651
第493回	第62号住居跡出土遺物 (5)·····	609	第527回	第67号住居跡 (2)·····	652
第494回	第63号住居跡 (1)·····	612	第528回	第67号住居跡出土遺物 (1)·····	653
第495回	第63号住居跡 (2)·····	613	第529回	第67号住居跡出土遺物 (2)·····	654
第496回	第63号住居跡遺物出土状況·····	614	第530回	第67号住居跡出土遺物 (3)·····	655
第497回	第63号住居跡出土遺物 (1)·····	615	第531回	第67号住居跡出土遺物 (4)·····	656
第498回	第63号住居跡出土遺物 (2)·····	616	第532回	第68号住居跡 (1)·····	659
第499回	第63号住居跡出土遺物 (3)·····	617	第533回	第68号住居跡 (2)·····	660
第500回	第63号住居跡出土遺物 (4)·····	618	第534回	第68号住居跡 遺物出土状況 (1)·····	661
第501回	第63号住居跡出土遺物 (5)·····	619	第535回	第68号住居跡 遺物出土状況 (2)·····	662
第502回	第63号住居跡出土遺物 (6)·····	620	第536回	第68号住居跡出土遺物 (1)·····	663
第503回	第63号住居跡出土遺物 (7)·····	621	第537回	第68号住居跡出土遺物 (2)·····	664
第504回	第63号住居跡出土遺物 (8)·····	622	第538回	第68号住居跡出土遺物 (3)·····	665
第505回	第64・65号住居跡 (1)·····	626	第539回	第68号住居跡出土遺物 (4)·····	666
第506回	第64・65号住居跡 (2)·····	627	第540回	第68号住居跡出土遺物 (5)·····	667
第507回	第64・65号住居跡 遺物出土状況 (1)·····	628	第541回	第68号住居跡出土遺物 (6)·····	668
第508回	第64・65号住居跡 遺物出土状況 (2)·····	629	第542回	第68号住居跡出土遺物 (7)·····	669
第509回	第64号住居跡出土遺物 (1)·····	630	第543回	第68号住居跡出土遺物 (8)·····	670
			第544回	第68号住居跡出土遺物 (9)·····	671

第545图	第68号住居跡出土遺物 (10)·····	672	第582图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (7)·····	728
第546图	第68号住居跡出土遺物 (11)·····	673	第583图	Ⅱ区集石土壙 (11)·····	732
第547图	第77号住居跡 ·····	676	第584图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (8)·····	733
第548图	第77号住居跡出土遺物 (1)·····	677	第585图	Ⅱ区集石土壙 (12)·····	734
第549图	第77号住居跡出土遺物 (2)·····	678	第586图	Ⅱ区集石土壙分析图 (1)·····	735
第550图	第77号住居跡出土遺物 (3)·····	679	第587图	Ⅱ区集石土壙分析图 (2)·····	736
第551图	第77号住居跡出土遺物 (4)·····	680	第588图	Ⅱ区集石土壙分析图 (3)·····	737
第552图	第77号住居跡出土遺物 (5)·····	681	第589图	Ⅱ区集石土壙分析图 (4)·····	738
第553图	第77号住居跡出土遺物 (6)·····	682	第590图	Ⅱ区集石土壙分析图 (5)·····	739
第554图	第77号住居跡出土遺物 (7)·····	683	第591图	Ⅱ区集石土壙分析图 (6)·····	740
第555图	第77号住居跡出土遺物 (8)·····	684	第592图	Ⅲ区集石土壙 (1)·····	742
第556图	第77号住居跡出土遺物 (9)·····	685	第593图	Ⅲ区集石土壙 (2)·····	743
第557图	第77号住居跡出土遺物 (10)·····	686	第594图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (1)·····	744
第558图	第78号住居跡 ·····	694	第595图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (2)·····	745
第559图	第78号住居跡出土遺物 (1)·····	695	第596图	Ⅲ区集石土壙 (3)·····	746
第560图	第78号住居跡出土遺物 (2)·····	696	第597图	Ⅲ区集石土壙 (4)·····	747
第561图	第79号住居跡 ·····	698	第598图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (3)·····	748
第562图	第79号住居跡出土遺物·····	699	第599图	Ⅲ区集石土壙 (5)·····	752
第563图	第80号住居跡 ·····	700	第600图	Ⅲ区集石土壙 (6)·····	753
第564图	第80号住居跡出土遺物 (1)·····	701	第601图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (4)·····	756
第565图	第80号住居跡出土遺物 (2)·····	702	第602图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (5)·····	757
第566图	Ⅱ区集石土壙 (1)·····	706	第603图	Ⅲ区集石土壙 (7)·····	760
第567图	Ⅱ区集石土壙 (2)·····	707	第604图	Ⅲ区集石土壙 (8)·····	762
第568图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (1)·····	708	第605图	Ⅲ区集石土壙 (9)·····	764
第569图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (2)·····	709	第606图	Ⅲ区集石土壙 (10)·····	766
第570图	Ⅱ区集石土壙 (3)·····	710	第607图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (6)·····	767
第571图	Ⅱ区集石土壙 (4)·····	711	第608图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (7)·····	769
第572图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (3)·····	712	第609图	Ⅲ区集石土壙 (11)·····	770
第573图	Ⅱ区集石土壙 (5)·····	714	第610图	Ⅲ区集石土壙出土遺物 (8)·····	771
第574图	Ⅱ区集石土壙 (6)·····	715	第611图	Ⅲ区集石土壙分析图 (1)·····	772
第575图	Ⅱ区集石土壙 (7)·····	716	第612图	Ⅲ区集石土壙分析图 (2)·····	773
第576图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (4)·····	717	第613图	Ⅲ区集石土壙分析图 (3)·····	774
第577图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (5)·····	718	第614图	Ⅲ区集石土壙分析图 (4)·····	775
第578图	Ⅱ区集石土壙 (8)·····	720	第615图	Ⅲ区集石土壙分析图 (5)·····	776
第579图	Ⅱ区集石土壙 (9)·····	725	第616图	Ⅲ区集石土壙分析图 (6)·····	777
第580图	Ⅱ区集石土壙出土遺物 (6)·····	726	第617图	Ⅱ区土壙出土遺物 (1)·····	780
第581图	Ⅱ区集石土壙 (10)·····	727	第618图	Ⅱ区土壙 (1)·····	781

第619図	Ⅱ区土壌(2)……………	782	第655図	中・近世Ⅱ区土壌(3)……………	834
第620図	Ⅱ区土壌出土遺物(2)……………	783	第656図	中・近世Ⅲ区土壌……………	834
第621図	Ⅱ区土壌出土遺物(3)……………	784	第657図	中・近世Ⅱ区土壌出土遺物……………	835
第622図	Ⅱ区土壌(3)……………	786	第658図	第1号井戸跡・出土遺物……………	837
第623図	Ⅱ区土壌出土遺物(4)……………	787	第659図	第1・2号溝跡……………	838
第624図	Ⅲ区土壌出土遺物(1)……………	790	第660図	第3号溝跡……………	839
第625図	Ⅲ区土壌(1)……………	791	第661図	ピット(1)……………	841
第626図	Ⅲ区土壌出土遺物(2)……………	792	第662図	ピット(2)……………	842
第627図	Ⅲ区土壌(2)……………	793	第663図	ピット(3)……………	843
第628図	Ⅲ区土壌(3)……………	794	第664図	ピット(4)……………	844
第629図	Ⅲ区土壌出土遺物(3)……………	795	第665図	ピット出土遺物……………	845
第630図	Ⅲ区土壌出土遺物(4) ・Ⅳ区土壌出土遺物……………	796	第666図	中・近世グリッド出土遺物(1)……………	848
第631図	第1号特殊遺構・遺物出土状況……………	800	第667図	中・近世グリッド出土遺物(2)……………	849
第632図	第2号特殊遺構・遺物出土状況……………	801	第668図	芦荻場遺跡出土炭化材の 走査型電子顕微鏡写真……………	858
第633図	第2号特殊遺構出土遺物(1)……………	802	第669図	暦年較正結果……………	860
第634図	第2号特殊遺構出土遺物(2)……………	803	第670図	芦荻場遺跡出土土器の圧痕レプリカ の走査型電子顕微鏡写真(1)……………	864
第635図	グリッド出土遺物(1)……………	805	第671図	芦荻場遺跡出土土器の圧痕レプリカ の走査型電子顕微鏡写真(2)……………	865
第636図	グリッド出土遺物(2)……………	806	第672図	芦荻場遺跡集落変遷図(1)……………	867
第637図	グリッド出土遺物(3)……………	808	第673図	芦荻場遺跡集落変遷図(2)……………	868
第638図	グリッド出土遺物(4)……………	809	第674図	芦荻場遺跡集落変遷図(3)……………	869
第639図	グリッド出土遺物(5)……………	810	第675図	芦荻場遺跡住居跡変遷図(1)……………	872
第640図	グリッド出土遺物(6)……………	812	第676図	芦荻場遺跡住居跡変遷図(2)……………	873
第641図	グリッド出土遺物(7)……………	813	第677図	芦荻場遺跡土器変遷図(1)……………	876
第642図	グリッド出土遺物(8)……………	814	第678図	芦荻場遺跡土器変遷図(2)……………	877
第643図	グリッド出土遺物(9)……………	815	第679図	芦荻場遺跡土器変遷図(3)……………	878
第644図	グリッド出土遺物(10)……………	816	第680図	芦荻場遺跡土器変遷図(4)……………	879
第645図	地下式坑(1)……………	822	第681図	芦荻場遺跡土器変遷図(5)……………	880
第646図	地下式坑(2)……………	823	第682図	芦荻場遺跡土器変遷図(6)……………	881
第647図	地下式坑出土遺物(1)……………	824	第683図	集石土壌変遷図……………	889
第648図	地下式坑出土遺物(2)……………	825	第684図	向原A遺跡における形状別 重量散布図……………	891
第649図	地下式坑(3)……………	826	第685図	芦荻場遺跡における形状別 重量散布図……………	891
第650図	地下式坑出土遺物(3)……………	827	第686図	向原A遺跡における各集石土壌の形状	
第651図	地下式坑出土遺物(4)……………	828			
第652図	中・近世Ⅰ区土壌……………	830			
第653図	中・近世Ⅱ区土壌(1)……………	832			
第654図	中・近世Ⅱ区土壌(2)……………	833			

	別重量散布図	893
第687図	芦荻場遺跡における各集石土壌の形状別重量散布図(1)	893
第688図	芦荻場遺跡における各集石土壌の形状別重量散布図(2)	894

第689図	芦荻場遺跡における各集石土壌の形状別重量散布図(3)	894
第690図	芦荻場遺跡における各集石土壌の形状別重量散布図(4)	895

目 次

(第2分冊)

第152表	第21号住居跡柱穴計測表	441	出土復元土器観察表	519	
第153表	第21号住居跡 出土復元土器観察表	441	第172表	第54号住居跡出土石器観察表	523
第154表	第21号住居跡出土石器観察表	441	第173表	第55号住居跡 出土復元土器観察表	526
第155表	第22号住居跡柱穴計測表	444	第174表	第55号住居跡出土石器観察表	526
第156表	第22号住居跡 出土復元土器観察表	451	第175表	第56号住居跡柱穴計測表	530
第157表	第22号住居跡出土石器観察表	457	第176表	第56号住居跡 出土復元土器観察表	534
第158表	第23号住居跡柱穴計測表	466	第177表	第56号住居跡出土石器観察表	538
第159表	第23号住居跡 出土復元土器観察表	466	第178表	第57号住居跡柱穴計測表	541
第160表	第23号住居跡出土石器観察表	469	第179表	第57号住居跡 出土復元土器観察表	546
第161表	第51号住居跡柱穴計測表	471	第180表	第57号住居跡出土石器観察表	546
第162表	第51号住居跡 出土復元土器観察表	476	第181表	第58号住居跡柱穴計測表	569
第163表	第51号住居跡出土石器観察表	476	第182表	第58号住居跡 出土復元土器観察表	569
第164表	第52号住居跡柱穴計測表	479	第183表	第58号住居跡出土石器観察表	569
第165表	第52号住居跡 出土復元土器観察表	485	第184表	第59号住居跡柱穴計測表	575
第166表	第52号住居跡出土石器観察表	490	第185表	第59号住居跡 出土復元土器観察表	583
第167表	第53号住居跡柱穴計測表	513	第186表	第59号住居跡出土石器観察表	583
第168表	第53号住居跡 出土復元土器観察表	513	第187表	第60号住居跡柱穴計測表	589
第169表	第53号住居跡出土石器観察表	515	第188表	第60号住居跡 出土復元土器観察表	589
第170表	第54号住居跡柱穴計測表	519	第189表	第60号住居跡出土石器観察表	592
第171表	第54号住居跡		第190表	第61号住居跡柱穴計測表	597

第191表	第61号住居跡 出土復元土器観察表……………	597	第218表	第78号住居跡出土石器観察表……	696
第192表	第61号住居跡出土石器観察表……	601	第219表	第79号住居跡柱穴計測表……………	699
第193表	第62号住居跡柱穴計測表……………	603	第220表	第80号住居跡柱穴計測表……………	702
第194表	第62号住居跡 出土復元土器観察表……………	605	第221表	第80号住居跡出土石器観察表……	703
第195表	第62号住居跡出土石器観察表……	610	第222表	Ⅱ区集石土壇 出土復元土器観察表……………	708
第196表	第63号住居跡柱穴計測表……………	613	第223表	Ⅲ区集石土壇 出土復元土器観察表……………	748
第197表	第63号住居跡 出土復元土器観察表……………	613	第224表	Ⅱ区集石土壇出土石器観察表……	778
第198表	第63号住居跡出土石器観察表……	622	第225表	Ⅲ区集石土壇出土石器観察表……	778
第199表	第64・65号住居跡柱穴計測表……	639	第226表	Ⅱ区土壇 出土復元土器観察表……………	799
第200表	第64号住居跡 出土復元土器観察表……………	639	第227表	Ⅱ区土壇出土石器観察表……………	799
第201表	第64号住居跡出土石器観察表……	641	第228表	Ⅲ区土壇 出土復元土器観察表……………	799
第202表	第65号住居跡 出土復元土器観察表……………	646	第229表	Ⅲ区土壇出土石器観察表……………	799
第203表	第65号住居跡出土石器観察表……	646	第230表	第2号特殊遺構 出土復元土器観察表……………	801
第204表	第66号住居跡柱穴計測表……………	650	第231表	第2号特殊遺構出土石器観察表…	801
第205表	第66号住居跡 出土復元土器観察表……………	650	第232表	グリッド出土 復元土器観察表……………	806
第206表	第66号住居跡出土石器観察表……	650	第233表	芦荻場遺跡出土 ミニチュア土器計測表……………	817
第207表	第67号住居跡柱穴計測表……………	652	第234表	芦荻場遺跡出土耳飾り計測表……	817
第208表	第67号住居跡 出土復元土器観察表……………	652	第235表	芦荻場遺跡出土土錐計測表……	817
第209表	第67号住居跡出土石器観察表……	657	第236表	芦荻場遺跡出土土偶計測表……	817
第210表	第68号住居跡柱穴計測表……………	660	第237表	芦荻場遺跡出土土製円盤計測表…	818
第211表	第68号住居跡 出土復元土器観察表……………	671	第238表	向原遺跡出土耳飾り計測表……	820
第212表	第68号住居跡出土石器観察表……	673	第239表	向原遺跡出土土製円盤計測表……	820
第213表	第77号住居跡柱穴計測表……………	687	第240表	芦荻場遺跡グリッド 出土石器観察表……………	820
第214表	第77号住居跡 出土復元土器観察表……………	687	第241表	第11～13号地下式坑 出土遺物観察表……………	840
第215表	第77号住居跡出土石器観察表……	687	第242表	中・近世Ⅱ区 土壇出土遺物観察表……………	840
第216表	第78号住居跡柱穴計測表……………	696	第243表	井戸跡出土遺物観察表……………	840
第217表	第78号住居跡 出土復元土器観察表……………	696	第244表	ピット一覧表……………	846

第245表	中・近世グリッド 出土遺物観察表……………	849	第255表	遺跡出土石器一覧表……………	886
第246表	縄文時代の住居一覧表……………	850	第256表	芦荻場遺跡住居跡出土石器一覧表…	887
第247表	集石土壙一覧表……………	852	第257表	芦荻場遺跡集石土壙分類表……………	888
第248表	縄文時代の土壙一覧表……………	854	第258表	向原A遺跡の「分析対象範囲」内重量 平均値……………	891
第249表	中・近世の土壙一覧表……………	855	第259表	芦荻場遺跡の「分析対象範囲」内重量 平均値……………	891
第250表	樹種同定結果……………	856	第260表	芦荻場遺跡における集石土壙データ 一覧表……………	892
第251表	測定試料及び処理……………	859	第261表	グループAにおける集石土壙データ 一覧表……………	892
第252表	測定試料結果……………	859	第262表	グループBにおける集石土壙データ 一覧表……………	892
第253表	芦荻場遺跡出土 土器の圧痕の同定結果（1）……………	862			
第254表	芦荻場遺跡出土 土器の圧痕の同定結果（2）……………	863			

c) III区

III区からは21軒の住居跡が検出されている。

第21号住居跡（第355図～第357図）

H・I-23区に位置する。平面形は長径3.96m、短径3.96m、深さ0.35mの不整円形を呈する。

壁溝は検出されなかった。壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。

柱穴は8基検出され、覆土、重複状況、深さ及び配置から新旧の2時期に分けられるようである。新規の主柱穴はP1、2、4、8の4基の4本柱で、古い段階ではP1、8が兼ねていると仮定して、P3、5と組んで4本主柱の住居跡になると想定できる。

主柱穴の深さは、P1=64cm、P2=52cm、P3=65cm、P4=62cm、P5=75cm、P8=77cmである。

炉跡は、地床炉で住居跡のほぼ中央部に検出された。北西方向に細長い楕円形で、長径59cm、短径45cm、深さ12cmを測る。炉の直上に大きな礫が4点、炉跡を覆うように設置されていた。石囲炉の炉石が動いたものとして調査を進めたが、炉の廃絶に伴って、炉を閉塞するように石組を行ったものと判断した。また、炉床は2段の掘り込み状を呈しており、深い方の掘り込みは埋設土器を抜き取った可能性があり、その上に石組が行われていたような状況である。したがって、住居跡は炉の2回の構築や主柱穴の建て替え等を合わせると、1回建て替えられた可能性が高い。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は、形状や覆土出土土器からおよそ勝坂式中段階の所産と判断される。

遺物は第356図1～第357図40の土器類、石器類が出土した。

土器は1～33である。1は口縁が内湾して開くキャリパー形の深鉢で、口縁部に捻りの加わった非対称の「α」状把手を付け、足長の縦位沈線を伴う蓮華状文を施文する。

2は頸部で括れ、胴部が膨らむ器形で、胴部に隆帯で区画文を施し、隆帯脇に幅広の押引爪形文を施文し、小波状沈線文を沿わせている。

破片では、3～12は阿玉台式系土器と思われる。3は口縁部に襞状整形痕を残し、口縁部から隆帯文を垂下している。貼付した低隆帯を潰して作り出すような襞状文であり、シャープさが無い。

4、5は隆帯でモチーフを描くが、5は雲母を含んでいる。

6は扇状把手部と思われ、口縁部に垂下する隆帯には輪積み状の整形を施しており、口縁部の区画内には蛇行の結節沈線や並行結節沈線を充填施文する。阿玉台I b式～II式に比定されよう。雲母を含む。

7は断面三角形の隆帯で区画し、隆帯脇に小継状の波状沈線を施文する。雲母を含み、阿玉台II式に比定されよう。

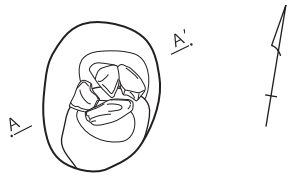
8は条線文を施文する阿玉台式系の土器であるが、雲母は含まれない。阿玉台II～III式並行期と思われる。

9～12は角押文状の結節沈線文を施文する土器群で、9は口縁部区画に下からの刺突文、頸部区画隆帯脇に横位の結節沈線文を施文する。10は2本並列で波状文を描き、11は区画隆帯脇に施文する。12は肥厚する幅狭な口縁部の区画文の縁を刻むように施文している。およそ阿玉台II式並行期に位置付けられようか。

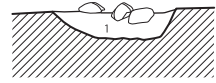
13、14は勝坂式古段階の土器群で、三角押文や円形刺突文を施文する新道式段階の土器群である。13は外反する口唇部下に、区画としてやや大振りの三角押文を施文する。14は外傾する口唇部が角頭状を呈し、口唇上にも結節沈線を巡らせる。口縁部には結節沈線を伴う隆帯で鋸歯状の区画を施し、区画内に円形刺突文を充填している。

15～21は隆帯の区画文に沿って幅広の細かな爪形文を施文する土器群で、爪形文の脇にはペン先状刺突の結節沈線や鋸歯状文を沿わせている。

炉跡



A 78.30m A'

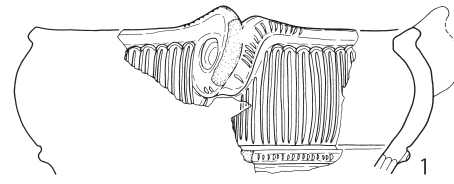


A 78.30m A'



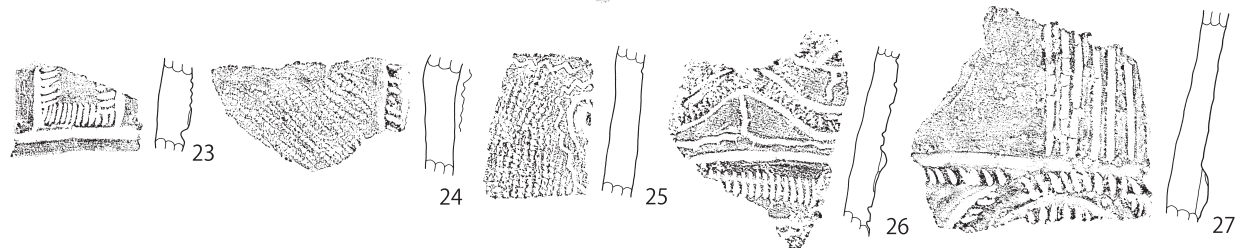
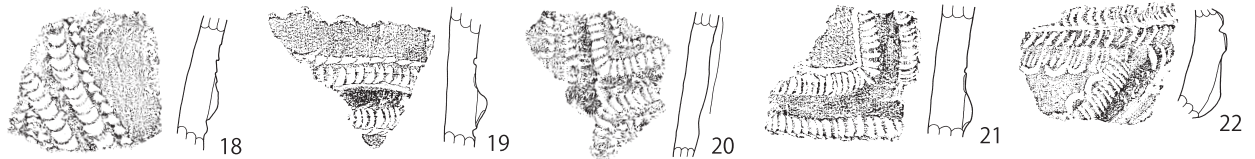
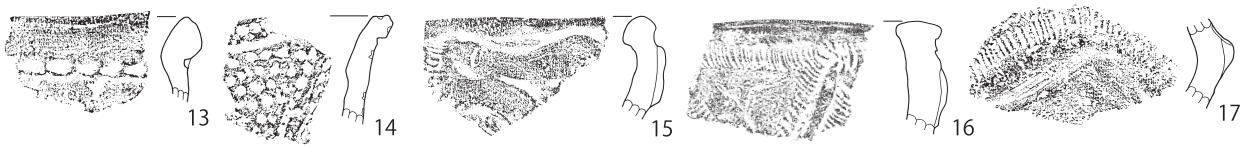
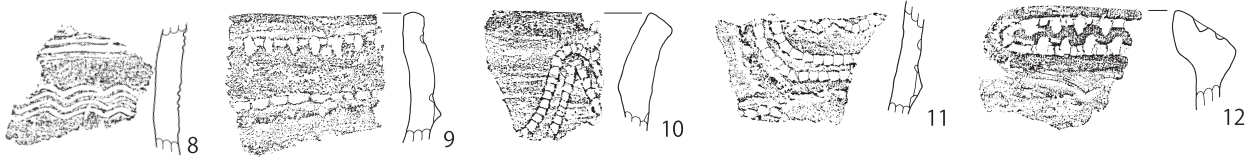
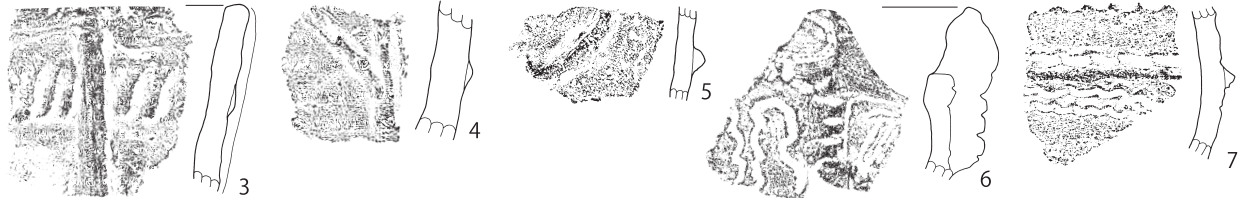
S J 21 炉跡

1 暗黒褐色土 焼土粒子・ブロック多量
炭化物粒子少量 しまり良い



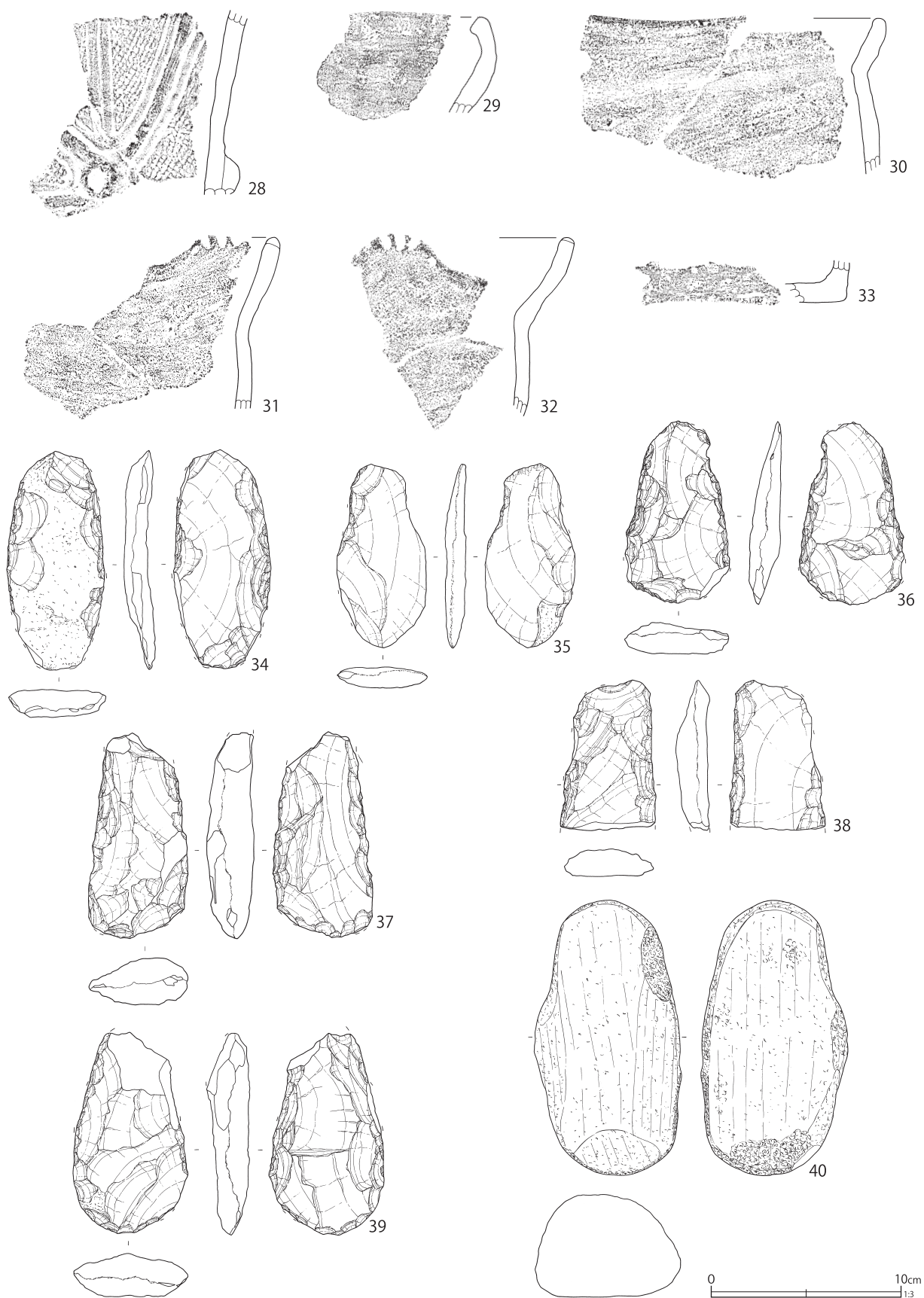
0 1m 1:30

0 10cm 1:4



0 10cm 1:3

第356図 第21号住居跡(2)・出土遺物(1)



第357图 第21号住居跡出土遺物(2)

第152表 第21号住居跡柱穴計測表 (第355図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	31.0	64.0	P 2	32.0	52.0	P 3	35.0	65.0	P 4	29.0	62.0	P 5	29.0	75.0
P 6	27.0	51.0	P 7	27.0	47.0	P 8	37.0	77.0						

第153表 第21号住居跡出土復元土器観察表 (第356図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
356-1	[8.8]	(19.6)	(22.0)	-	10%	356-2	[16.0]	-	[22.0]	-	10%

第154表 第21号住居跡出土石器観察表 (第357図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
357 - 34	打製石斧	I ①ア	頁岩	11.5	[5.2]	1.6	97.3	
35	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	9.7	4.7	1.1	58.2	
36	打製石斧	III 2①イ	頁岩	9.7	[5.5]	1.7	83.6	
37	打製石斧	III 2②ア	ホルンフェルス	[10.8]	5.2	2.5	160.3	
38	打製石斧	V ②イ	ホルンフェルス	[7.9]	[5.1]	1.8	83.5	
39	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[10.7]	6.0	2.3	155.4	
40	磨石	II 1-3①イ	砂岩	14.5	7.8	5.8	849.3	

18～21は爪形文がやや大きい、ペン先状の結節沈線を施文し、また、隆帯上に刻みはない。新道式の新しい段階であろうか。

22は隆帯脇に同様な爪形文を施文しているが、蓮華状文となり、隆帯上には刻みを施している。藤内式段階となろう。

23、28は半截竹管状工具の平行沈線でパネル状区画文を施す藤内式土器で、25～27も同時期のものであろう。27は若干新しくなる可能性もある。

29～32は頸部で括れ口縁部が開く無文の深鉢形土器で、30～32は波状口縁である。31、32は同一個体である。

33は底部破片である。

石器は34～40が出土した。

34～39は打製石斧である。34が楕円形を、35～37が撥形を呈する。このうち、34のみが片刃で、その他は両刃である。38が基部片、39は片刃の打製石斧である。

40は自然礫を用いた磨石である。

第22号住居跡 (第358図～第370図)

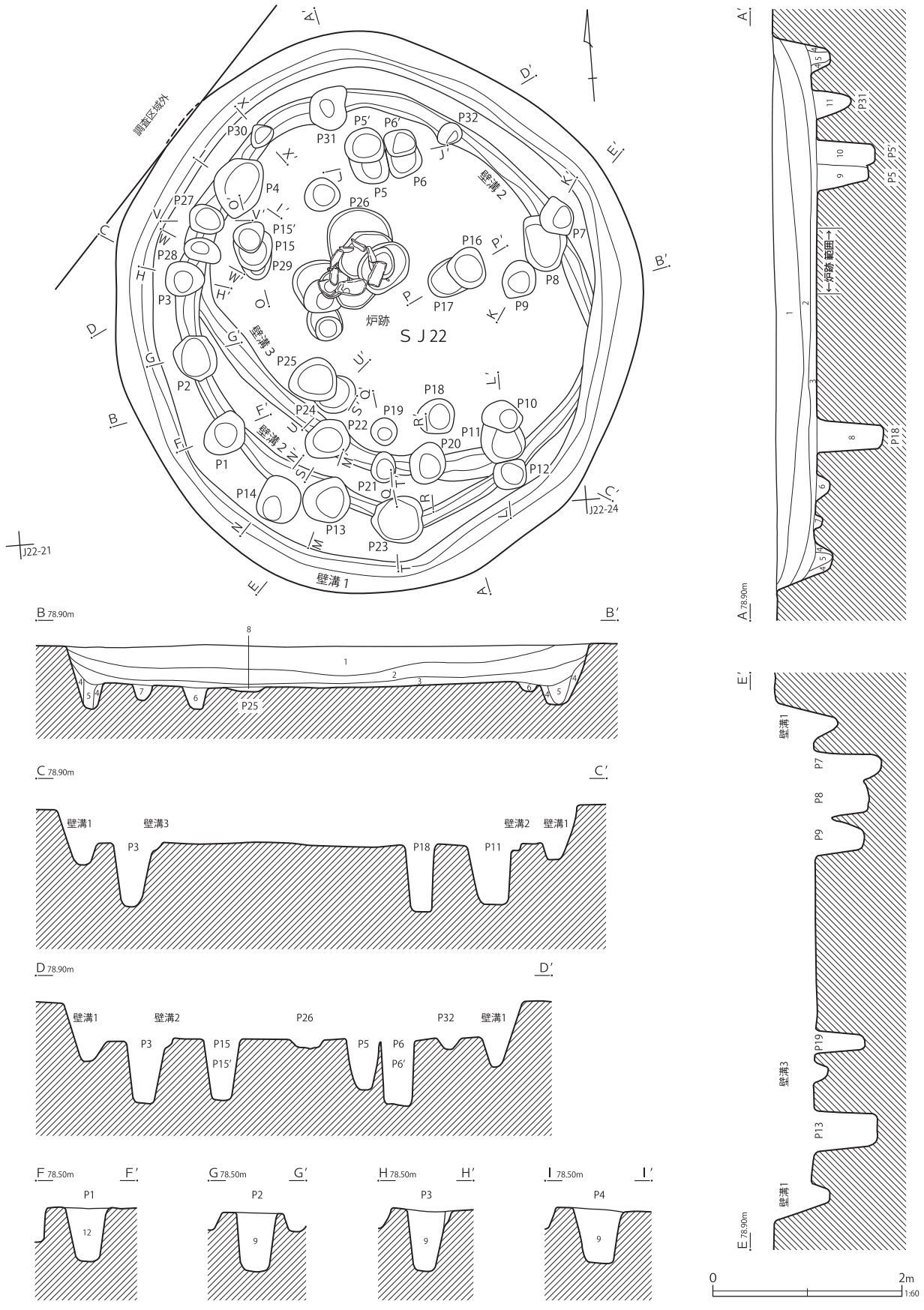
J-22区に位置する。平面形は北東方向に若干細長い隅丸方形に近い不整形円で、長径5.94m、短径5.55m、深さ0.45mを測る。

壁溝は、重複しながら3本検出された。壁溝1は一番外側で、最終段階の住居跡の壁溝である。壁溝2は壁溝1の内側にあり、北東壁で壁溝1と一部重複する。壁溝3は大部分が壁溝2と重複しており、南西側の壁溝のみ独立している。

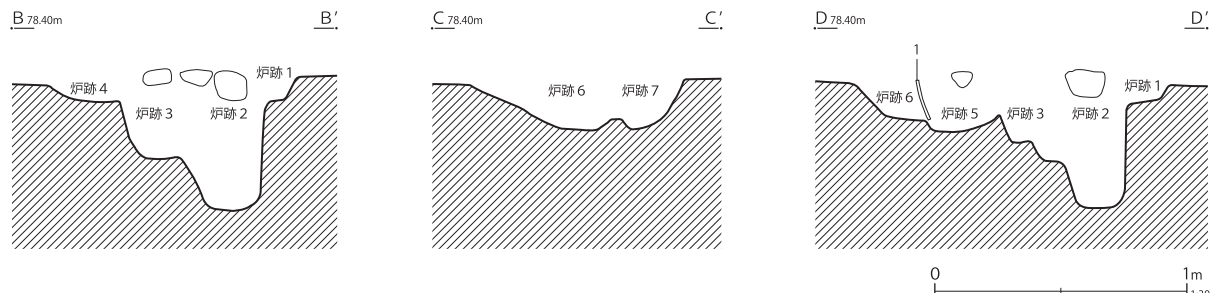
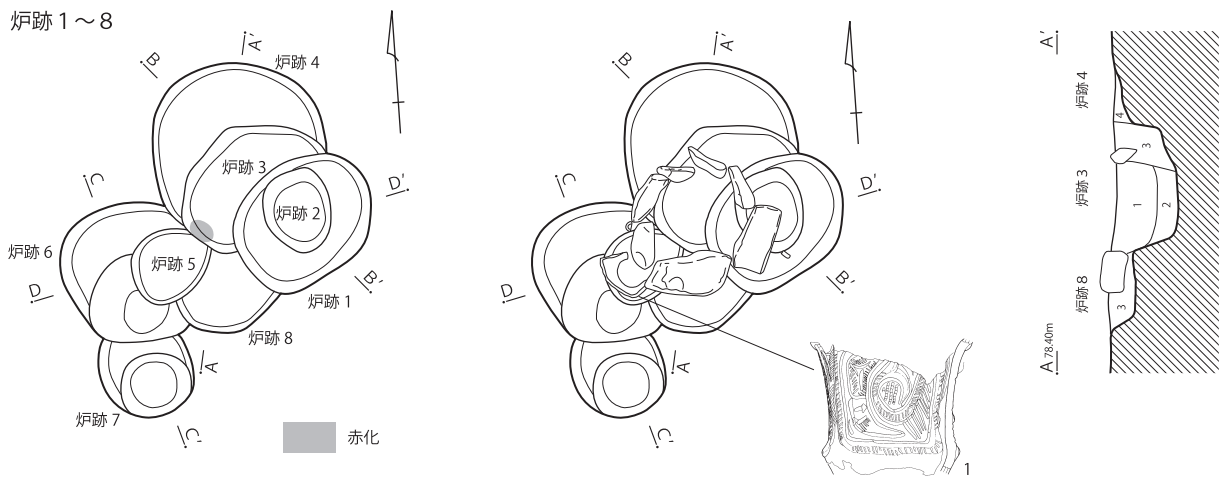
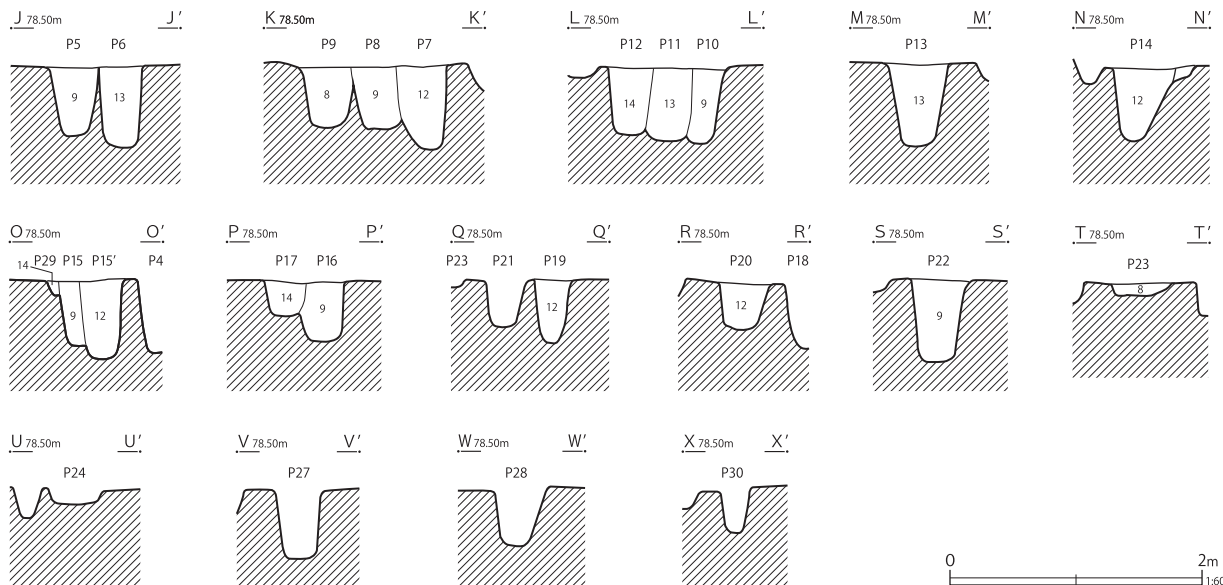
柱穴は合計32基が検出された。重複しているものが多く、それぞれの壁溝に伴うものを限定するのは大変困難であるが、覆土、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものを想定した。

壁溝が3本あることから、少なくとも2回の建て替えがあり、それぞれの建て替えの段階に1、2回の柱の移動が観察される。

最終段階の住居跡の柱は、壁溝2を壊して掘られており、その位置関係で柱穴を探すとP1、2、3、4、31、6、7、8、11、12、13、14が候補となる。ピットの切り合い関係はほとんどないが、P7、8が重複し、P7の方が新しいことが判明している。したがって、同様な覆土と配置関係から、最新段階の住居跡の柱穴は、P1、3、31、7、12、13の6基と推定した。その前の段階としては、P2、4、6、8、11、14の6基が想定される。したがって、壁溝1に伴うであろう主柱は6本柱で、1回の建て替えを含む、2回の建築が行われたと判断される。



第358图 第22号住居迹 (1)



- | | | | |
|------------|--|-----------|------------------------------------|
| S J 22 | | 10 暗褐色土 | 9層よりローム粒子・ブロックの混入多い |
| 1 暗黒褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子多量 | 11 暗褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック少量 |
| 2 暗黄褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子多量 遺物が多く出土 | 12 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 3 暗黄褐色土 | 2層に近似するが、ローム粒子・炭化物粒子少量
しまり非常に良い | 13 暗褐色土 | ロームブロック殆ど含まずローム粒子も少ない |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック少量 粘性強い(壁溝1) | 14 暗黄褐色土 | ローム粒子・ブロック多量 しまり非常に良い |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒子・ブロック少量(壁溝1) | | |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック少量 しまり非常に良い | S J 22 炉跡 | |
| 7 暗褐色土 | 箱掘状を呈する最も古い壁溝(壁溝3)
ローム粒子・炭化物粒子少量(壁溝2) | 1 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量 |
| | | 2 暗黄褐色土 | 焼土ブロック・炭化物粒子・ローム粒子多量
しまり良い 粘性弱い |
| S J 22 ピット | | 3 暗黄褐色土 | 焼土ブロック少量 炭化物粒子微量 |
| 8 暗黒褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子 | 4 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック少量 | | |

第359図 第22号住居跡(2)

壁溝2に伴う柱穴は、壁溝の内側に存在するものであることから、P22、15'、6'、9、10、20の6基が抽出される。P10とP20の間隔が狭いことや、配置を考慮すると、P20を除くP22、15'、6'、9、10の5本主柱が想定される。

壁溝3に伴う柱穴は、壁溝3の内側にある柱穴で、P18、24、25、15、29、5、5'、16、17が抽出される。P18以外は、深浅はあるが2穴で重複するものが多く、建て替えを行っている可能性が高い。これらの柱穴を整理して、P24、15、5、16を中心とする4本主柱を壁溝3の住居跡と想定し、少なくとも1回の建て替えを含む、2回以上の建築が行われたと判断しておきたい。

主柱穴の深さは、P1=56cm、P2=62cm、P3=65cm、P4=49cm、P5=54cm、P5'=61cm、P6=63cm、P6'=67cm、P7=66cm、P8=49cm、P9=47cm、P10=60cm、P11=58cm、P12=56cm、P13=66cm、P14=58cm、P15=51cm、P15'=63cm、P16=47cm、P22=67cm、P24=13cm、P31=41cmである。

炉は中央部やや北寄りに位置し、長径1.46m、短径0.92m、深さ0.52mを測る北東方向に細長い不整楕円形を呈した、石囲炉である。炉は7個の礫で囲まれており、南東側の入り口方向に面する位置に柱状で平らな面を上にした礫が設置されていた。明らかに方向性を示すものと思われる。

石囲炉は最終住居跡の炉であり、精査の結果、8箇所炉床を確認した。その内、炉跡5からは壊されているが埋設土器である勝坂式土器が出土した。

埋甕は検出されなかった。

以上、住居跡は炉が8回作り替えられており、壁溝と柱穴の関係から少なくとも5回以上の住み替えが把握された。炉内から勝坂式土器の埋甕が出土し、覆土から加曾利E I式土器までが出土することを考慮すると、勝坂式新段階から終末期、または加曾利E I式後半期にかけて、継続性は証明されないが、同じ場所で何回にもわたって建て替えを行い、住み続けていたことが理解される。

遺物は第362図1～第370図101の土器類、石器類が出土した。住居跡中央部の炉の直上あたりに多くの土器が出土しており、第363図9は底部を欠くが、炉の上に倒置の状態出土した。

土器は1～67である。

23、24は炉から、25はP2、26、27はP3、28はP4、29はP4、30はP14、31、32はP22、33はP23からの出土である。

1は炉体土器である。胴部の約半分が現存する。刻み隆帯で胴部を区画し、区画内に隆帯の渦巻文を施文する構成で、余白に集合沈線や三叉文を施文する。勝坂式新段階のものと思われる。

2は口縁部が括れて強く外反する器形であり、屈曲する口縁部に口唇部から「U」字状の貼付文を垂下する。胴部地文は撚糸文Lである。

3はやや器形の把握が難しいが、口縁部の屈曲する多喜窪タイプの土器と思われる、口縁部に幅広低隆帯で渦巻文や三角形区画文を施文し、頸部との屈曲部には蛙口状の区画文を連結するモチーフ構成をとる。頸部と垂下する隆帯には「ハ」字状刻みを施す。地文には撚糸文Lを施文する。

第155表 第22号住居跡柱穴計測表 (第358・359図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	49.0	56.0	P2	49.0	62.0	P3	41.0	65.0	P4	64.0	49.0	P5	(23.0)	54.0
P5'	42.0	61.0	P6	(22.0)	63.0	P6'	32.0	67.0	P7	44.0	66.0	P8	59.0	49.0
P9	42.0	47.0	P10	41.0	60.0	P11	(32.0)	58.0	P12	38.0	56.0	P13	49.0	66.0
P14	48.0	58.0	P15	(19.0)	51.0	P15'	34.0	63.0	P16	42.0	47.0	P17	(27.0)	29.0
P18	40.0	69.0	P19	29.0	50.0	P20	43.0	38.0	P21	33.0	37.0	P22	47.0	67.0
P23	55.0	10.0	P24	43.0	13.0	P25	52.0	5.0	P26	38.0	10.0	P27	36.0	55.0
P28	40.0	48.0	P29	(9.0)	12.0	P30	27.0	35.0	P31	49.0	41.0	P32	28.0	12.0

4は頸部を押圧隆帯で区画し、胴部に垂下する沈線文を施文する。非常に器壁が薄く、曽利系の土器であろうか。

5は加曽利E I式キャリパー形深鉢で、箱状把手の付く口縁部である。把手には円窓が空く。

6～11は加曽利E I式キャリパー形深鉢形土器である。6は口縁部が大きく開く器形の大型の土器である。隆帯で細かな渦巻文を連結するモチーフを描き、頸部に4本沈線の小波状文を施文する。地文には撚糸文Lを施文する。

7は無文で幅広の口唇部が開きながら立ち、内湾する口縁部に2本隆帯の先端が渦を巻く渦巻文を横位連結するモチーフを描いている。地文は撚糸文Lの横走施文である。

8は内湾して開く口縁部に、2本隆帯の渦巻文を横位連結するモチーフを施文する。頸部を幅広い無文帯とし、口縁部の地文に撚糸文Lを施文する。

9は先端が渦を巻く2本隆帯の渦巻文を、弧状及び横「S」字状に連結し、一部剣先状となる部分がある。地文は単節RLを、口縁部で横位施文、胴部で縦位施文する。

10は4単位の突起を有する平口縁で、突起下から派生する2本隆帯の渦巻文を弧状に繋げている。繋弧文となる前段階の構成と思われる。地文は撚糸文Lである。

11、12は深鉢の胴部で、11は頸部区画隆帯から垂下する渦巻文と、垂下する隆帯懸垂文を連結するモチーフを描いている。地文は撚糸文Lである。12は地文の上に蛇行する隆帯のみ垂下するものである。地文は撚糸文Lである。

13は胴下半部を欠損するが、頸部に幅広い無文帯を設定するキャリパー形深鉢である。口唇部に双頭状の突起を付け、口縁部に隆帯で渦巻文を含む重弧文を施文する、曽利式系の土器である。頸部は地文の撚糸文Lを磨り消して、無文部を作り出している。

14～19は底部で、14は単節RL縄文の縦位施

文、他は撚糸文Lを施文する。

20～22は浅鉢である。20は頸部に眼鏡状把手を付け、胴部文様帯に楕円区画文を配し、沈線を充填する。21は頸部で括れて短い無文の口縁部が外反する、浅鉢である。22は口縁部が内湾して開く器形で、波状部にハート形の沈線文を施文する。

破片では、34～37は角押文や三角押文、キャタピラ文を施文する勝坂式古段階の土器群である。38は幅広の爪形文を施文する勝坂式中段階の藤内式段階であろう。

39～49は勝坂式新段階のもので、39、42、46などは終末期段階のものであろう。

50～61は加曽利E式キャリパー形深鉢形土器の口縁部破片で、加曽利E I式前半段階の土器群である。50は横「S」字状文が左右に連結しておらず、古い様相を有する。51～55は「S」字状文が大きな渦を巻くようになり、左右の連結が明らかになるもので、やや新しい様相が見られる。58は2本隆帯の先端部が渦を巻くもので、弧状に連結されることかさらに新しい様相と言えよう。いずれも地文に撚糸文を施文している。

62、63は幅狭の口縁部の下端が突出し頸部で括れる土器であり、中峠式系の要素であろうか。

64は平行沈線で胴部を区画して、波状沈線を施文し、地文に単節RL縄文を横位施文することから、勝坂式土器と思われる。

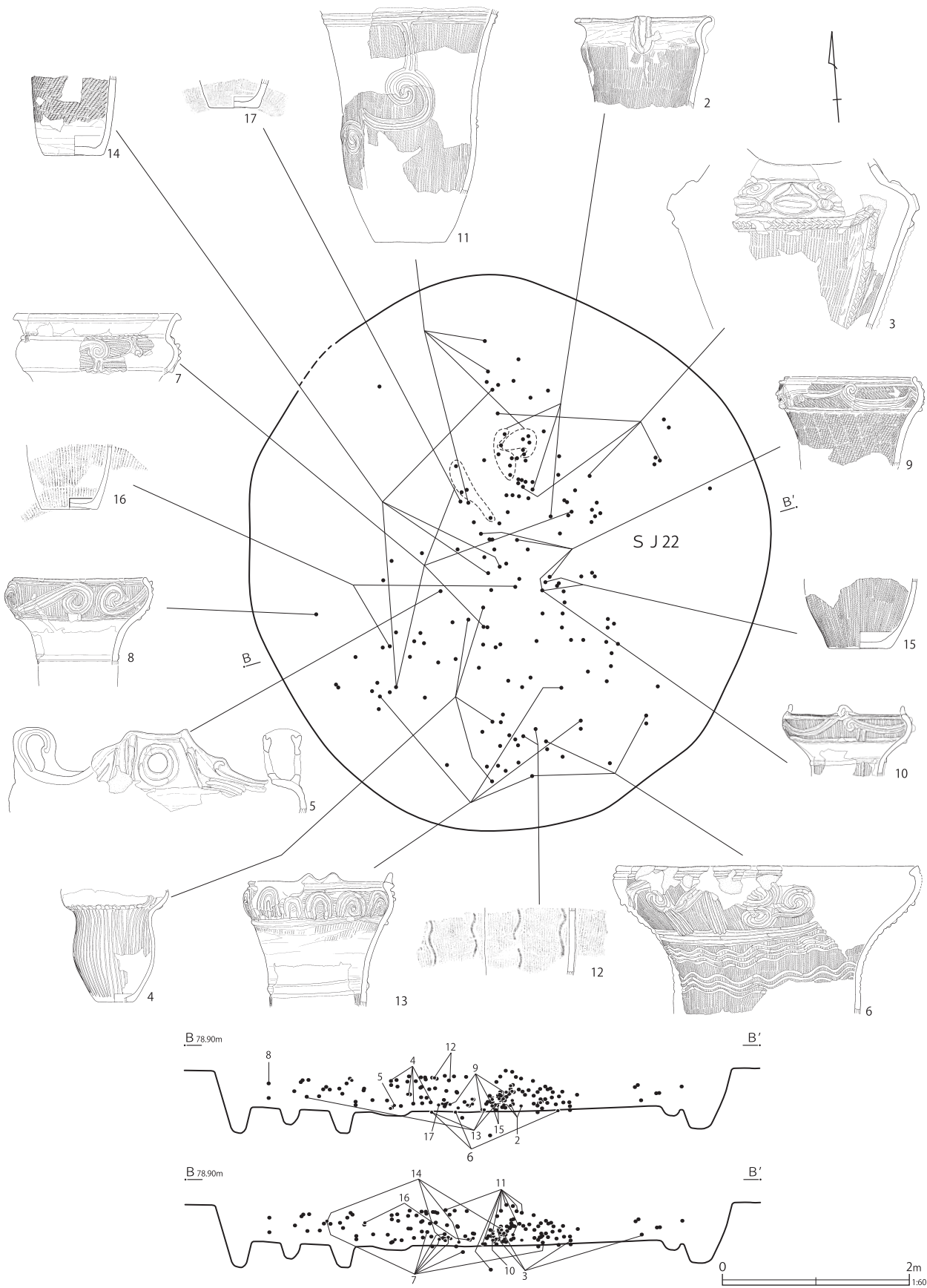
65は垂下沈線を全面に施文し、半隆帯状を呈する。曽利式系の要素と思われる。

66、67は幅広の低隆帯でモチーフを描く浅鉢である。

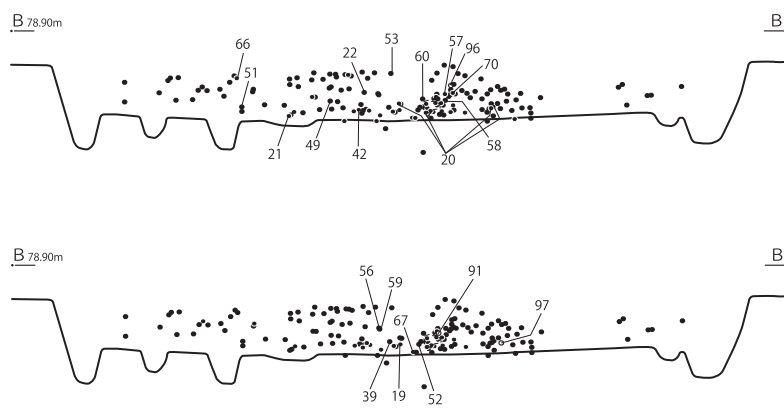
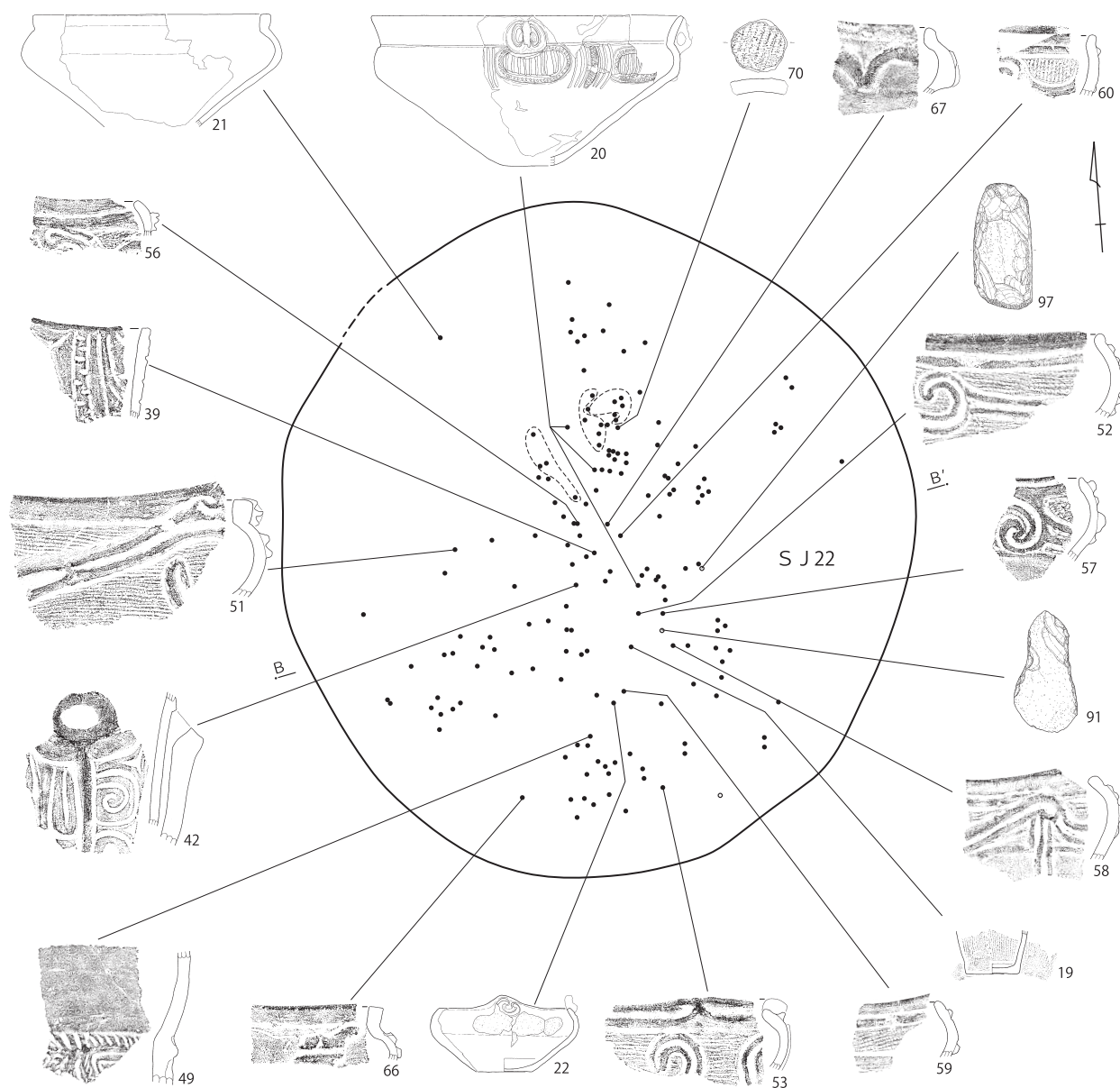
土製品は、ミニチュア、耳飾り、土製円盤が出土した。68はミニチュア土器の口縁部で、小さな壺形を呈する。

69は耳飾りで、完形品である。鼓形を呈する。

70～74は土器片を利用した、土製円盤である。石器は75～101が出土した。

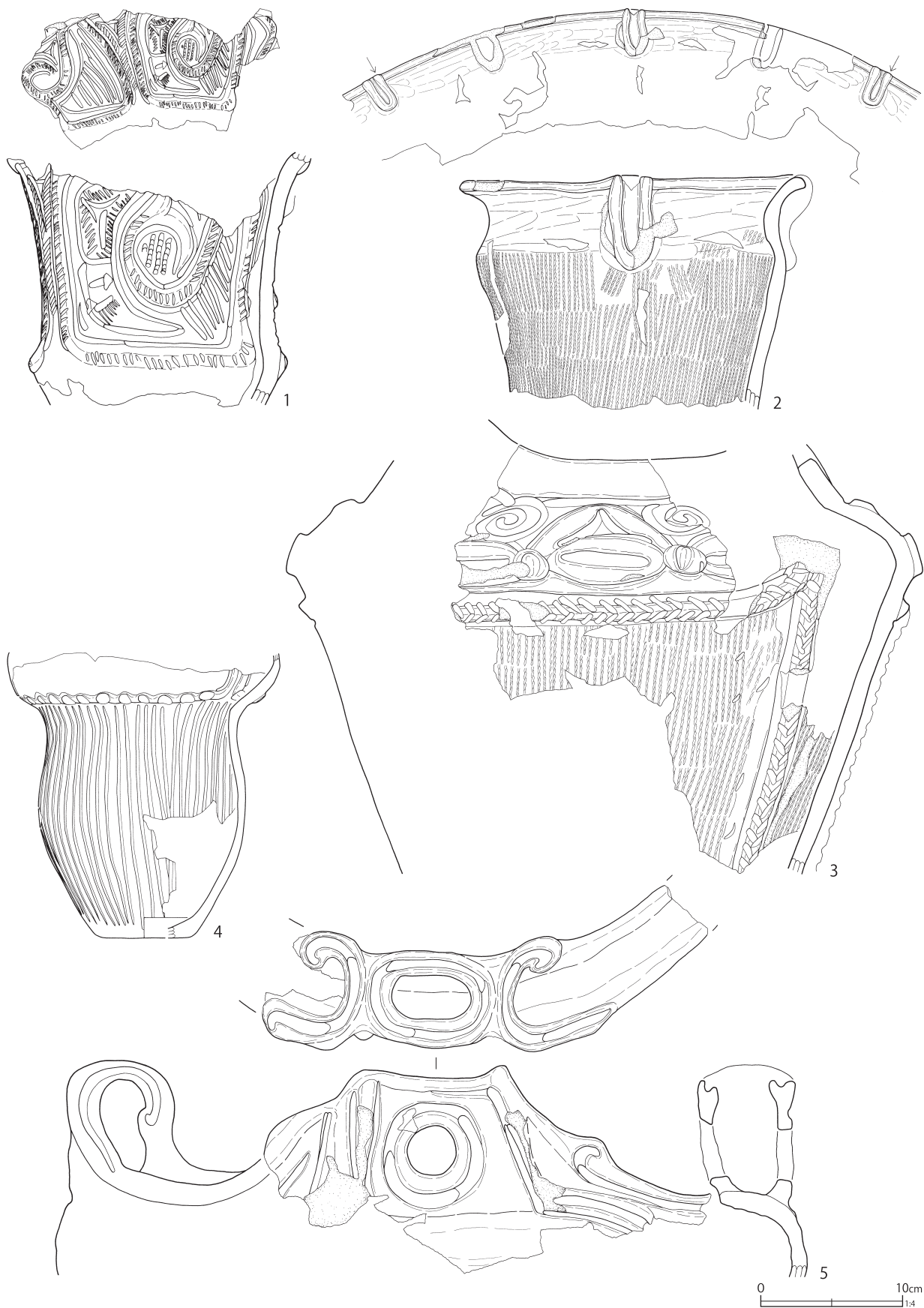


第360图 第22号住居跡遺物出土状況(1)

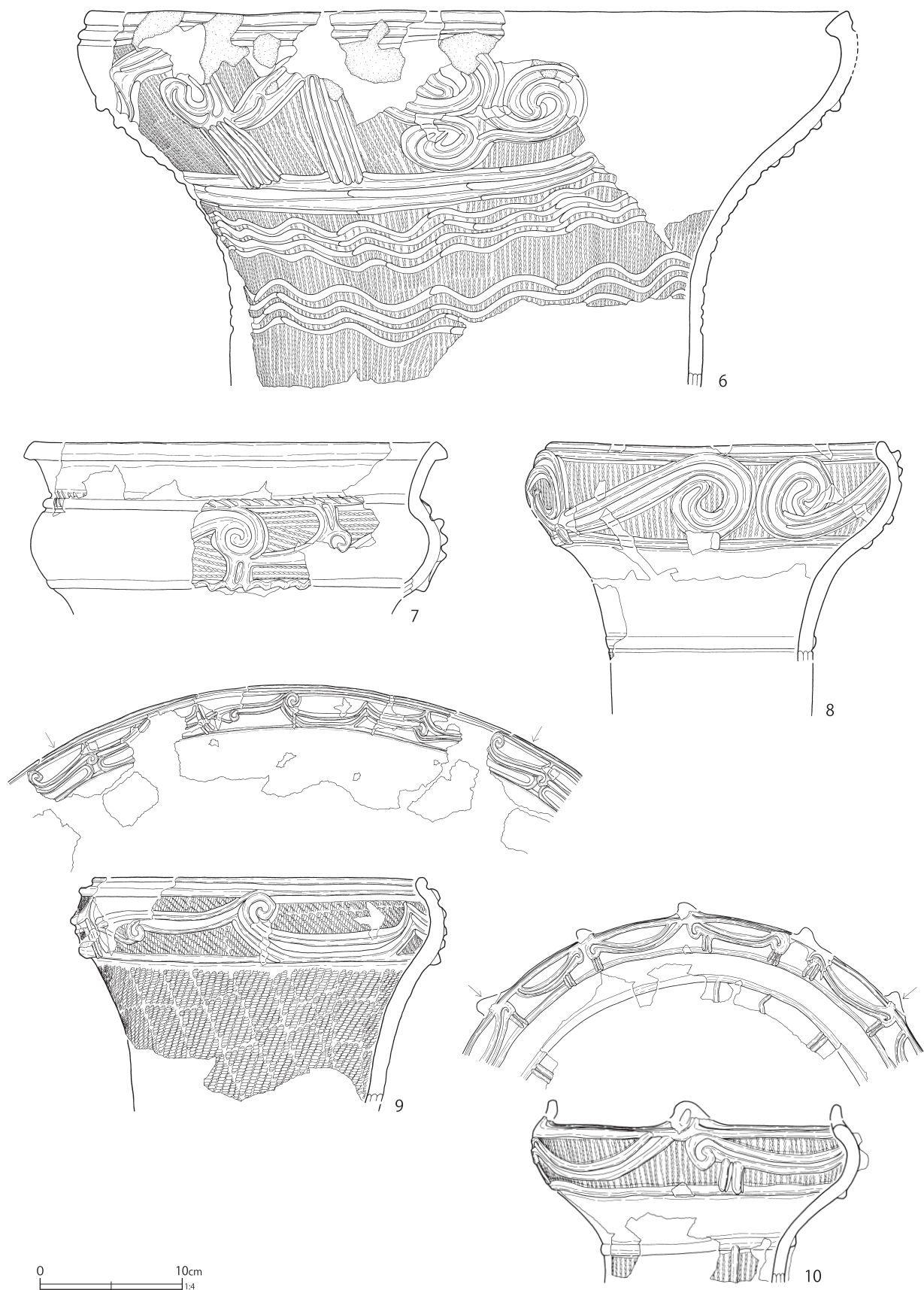


第361図 第22号住居跡遺物出土状況 (2)

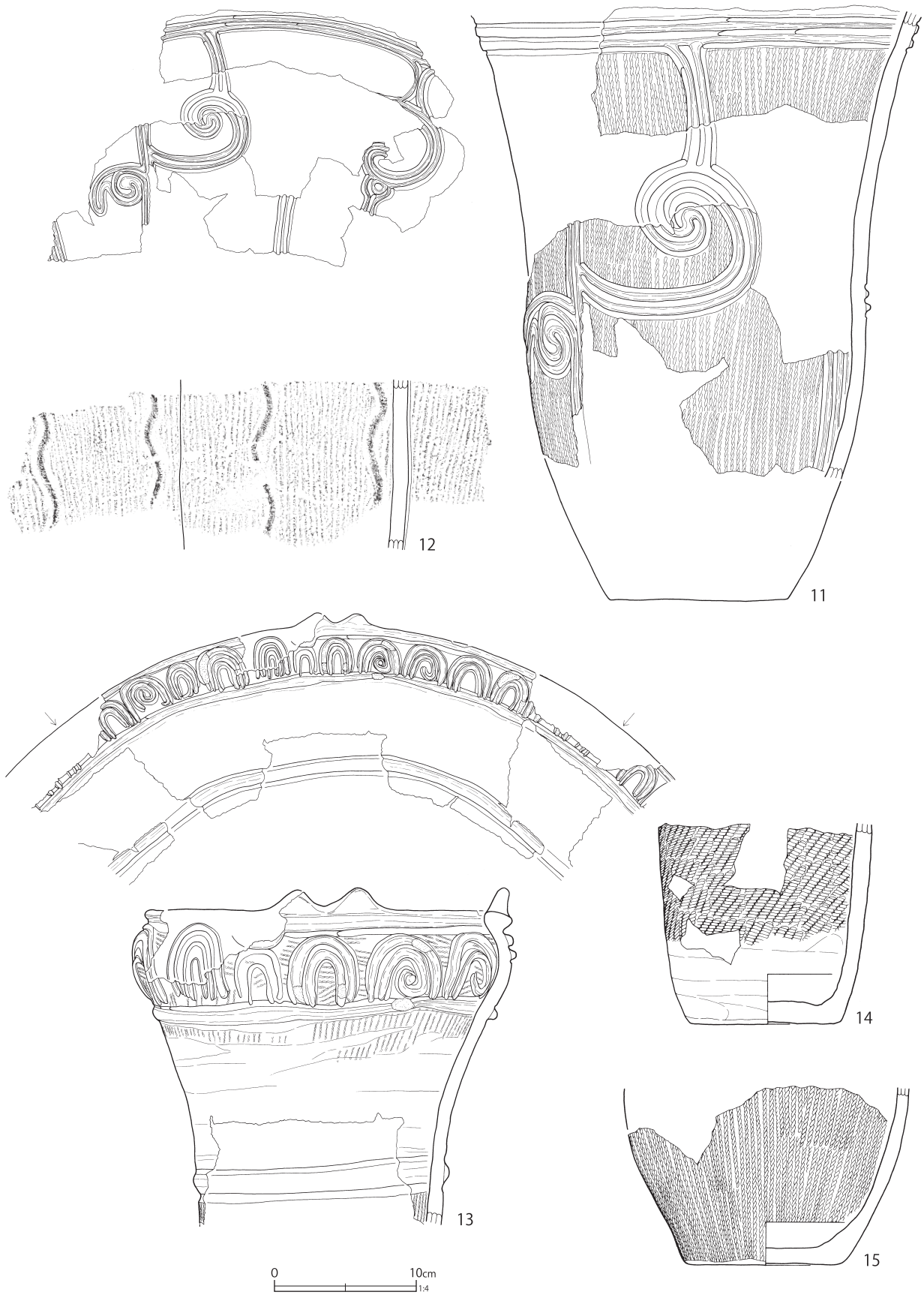
0 2m 1:60



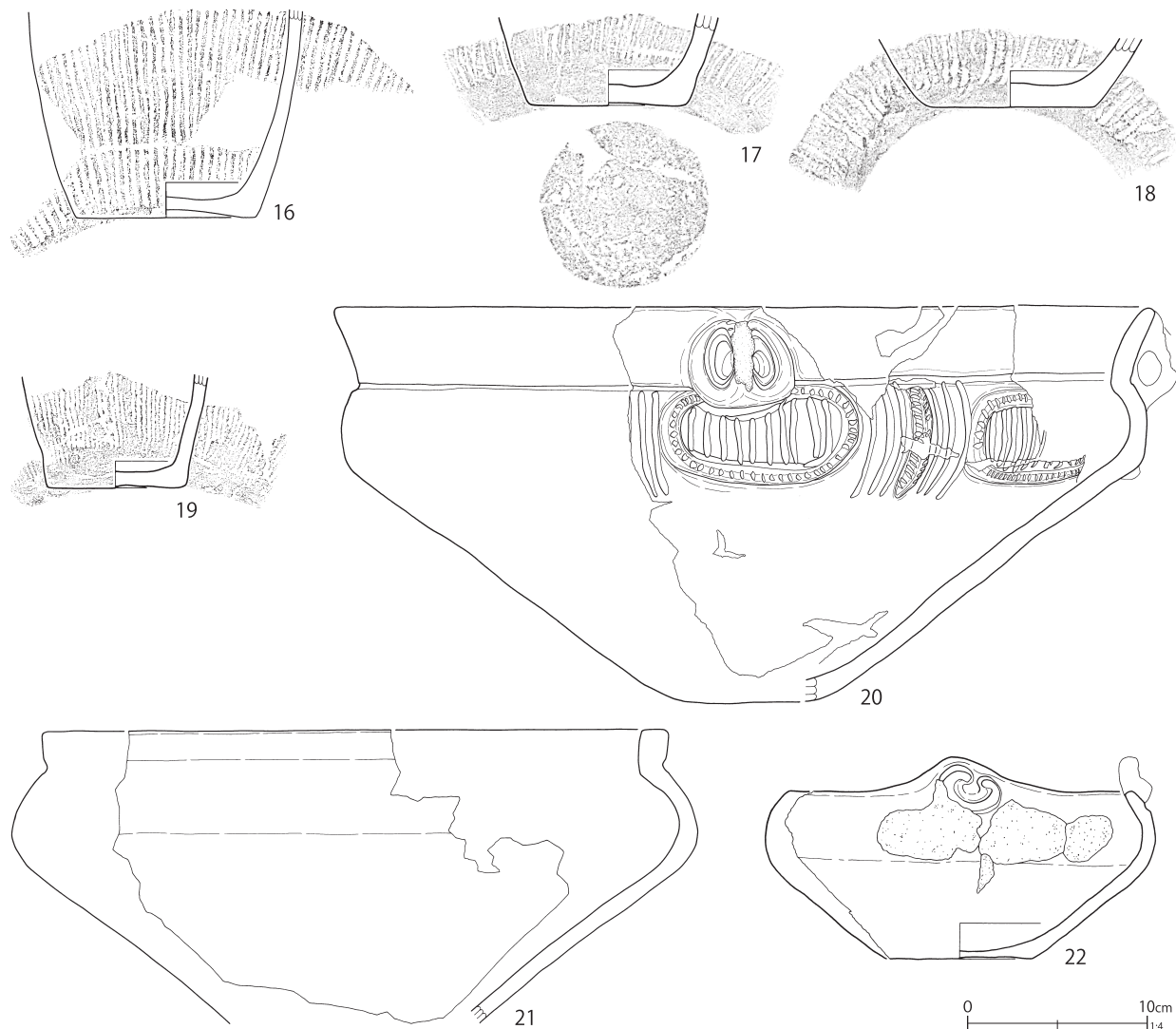
第362図 第22号住居跡出土遺物（1）



第363図 第22号住居跡出土遺物(2)



第364图 第22号住居跡出土遺物（3）



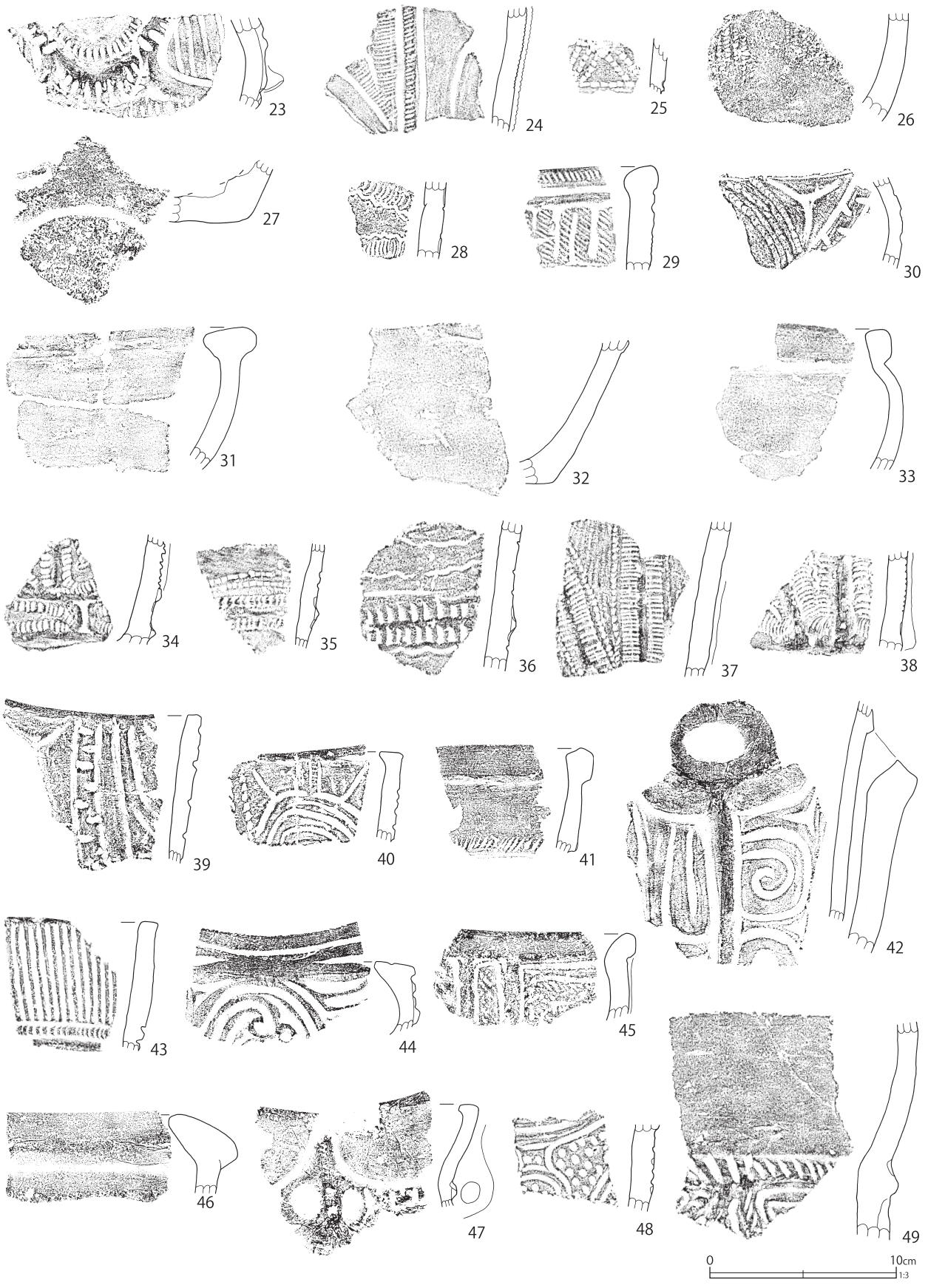
第365図 第22号住居跡出土遺物（4）

第156表 第22号住居跡出土復元土器観察表（第362～365図）

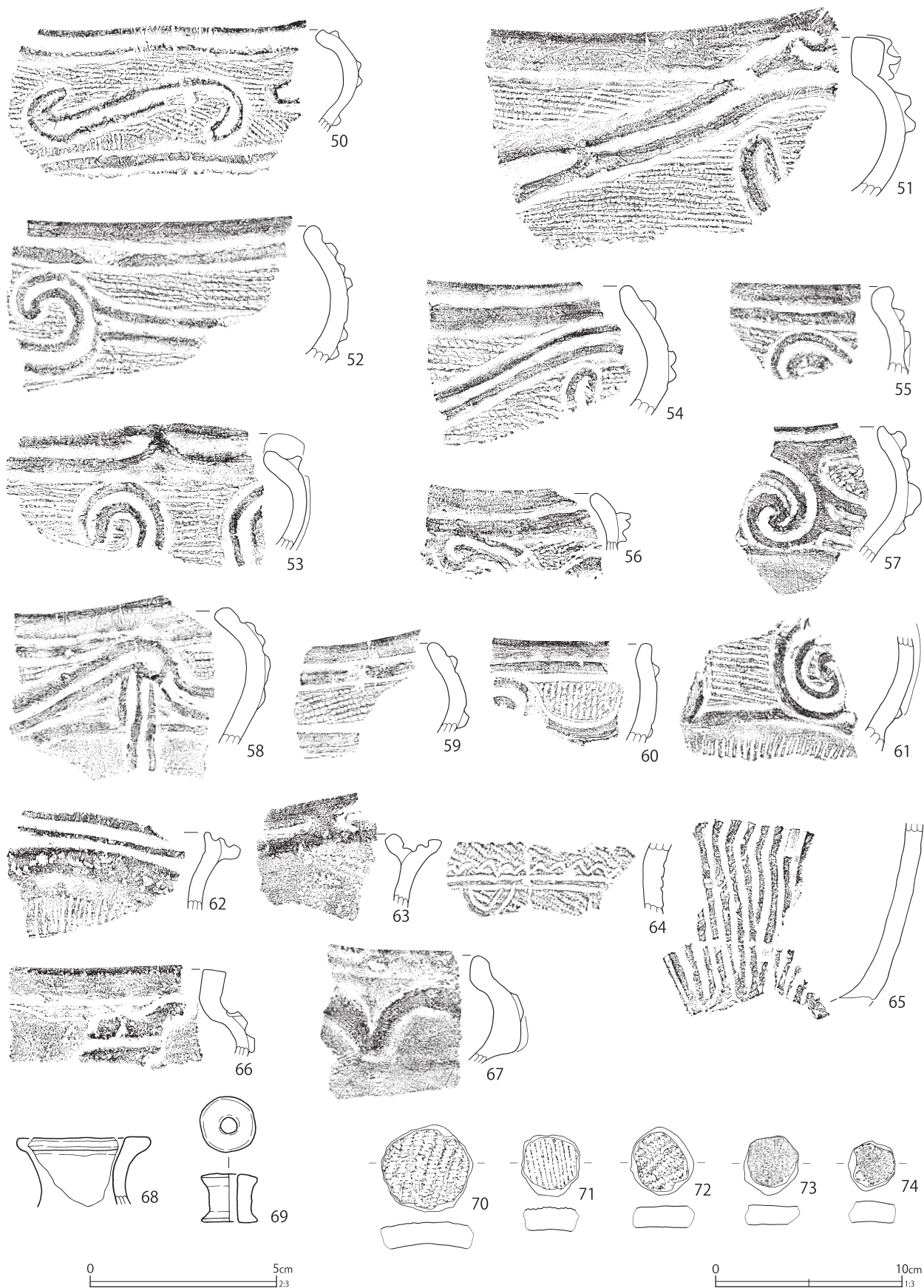
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
362-1	[17.8]	-	20.8	-	40%	364-12	[11.8]	-	16.0	-	30%
2	[16.5]	24.2	-	-	40%	13	[23.8]	25.8	-	-	60%
3	[30.2]	(29.2)	(44.6)	-	30%	14	[14.1]	-	-	10.5	40%
4	[20.0]	-	19.2	6.8	70%	15	[12.5]	-	-	10.7	20%
5	[14.6]	-	-	-	10%	365-16	[11.4]	-	15.2	10.0	20%
363-6	[26.5]	(52.8)	(54.4)	-	30%	17	[5.0]	-	12.4	8.9	10%
7	[10.7]	(28.2)	-	-	20%	18	[3.9]	-	-	9.4	10%
8	[15.3]	(23.4)	-	-	30%	19	[6.2]	-	10.4	7.8	10%
9	[15.6]	23.2	(25.8)	-	50%	20	[21.9]	(45.4)	-	-	30%
10	[11.5]	20.4	-	-	50%	21	[16.3]	(34.6)	-	-	20%
364-11	[32.7]	-	(31.8)	-	40%	22	11.2	19.1	-	8.2	60%

75～77は石鏃である。このうち、76が先端を、77が脚部を欠いている。77は正面左脚部が根元

から、右脚部は先端が欠損している。78は石鏃の未成品である。平面形が崩れた三角形を呈して



第366图 第22号住居跡出土遺物 (5)



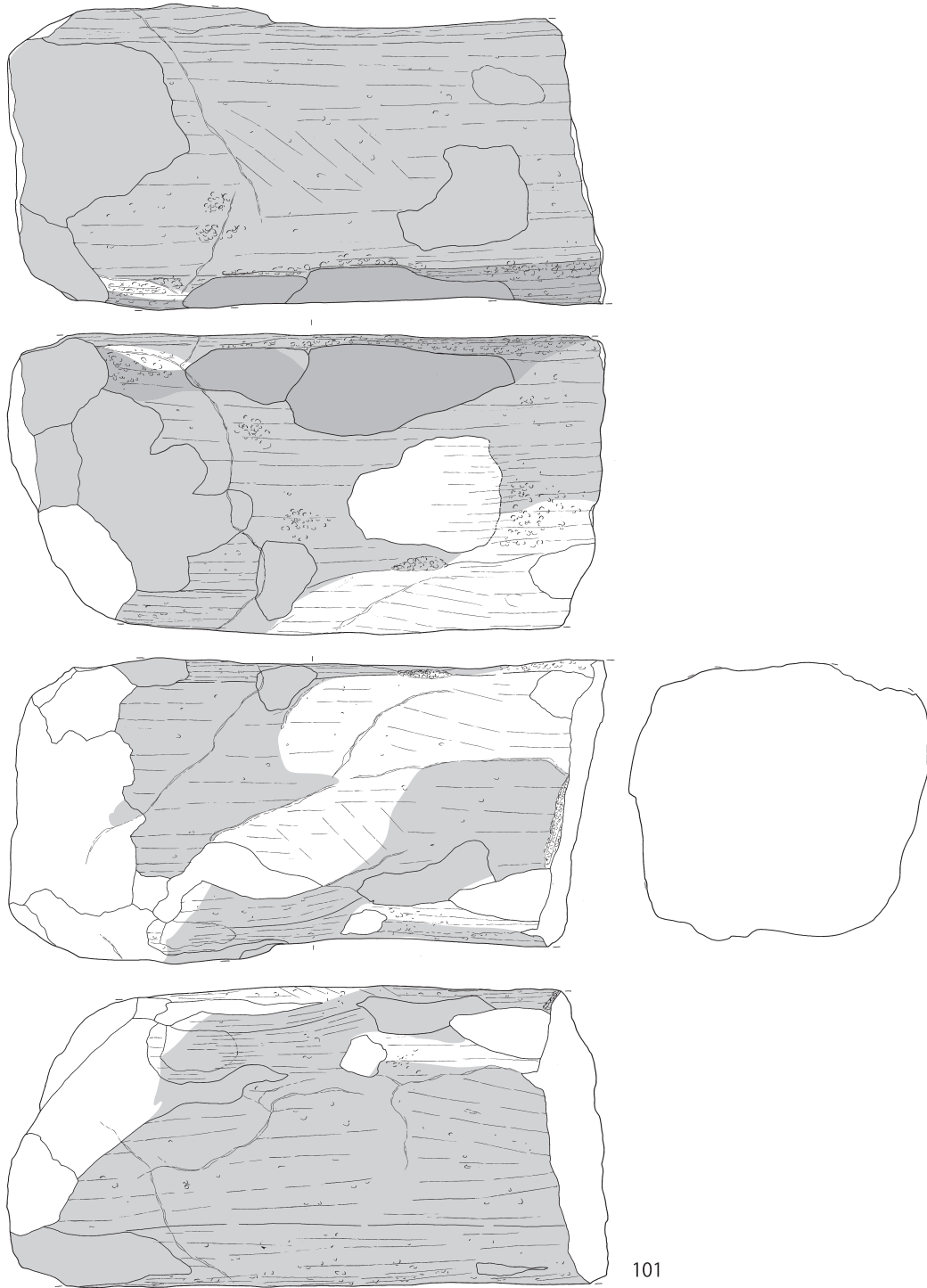
第367図 第22号住居跡出土遺物(6)



第368图 第22号住居跡出土遺物 (7)



第369図 第22号住居跡出土遺物（8）



101

第370図 第22号住居跡出土遺物(9)

第157表 第22号住居跡出土石器観察表 (第368～370図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
368 - 75	石鏃	I 2①	チャート	1.7	1.6	0.4	0.7	
76	石鏃	I 2②	安山岩	[2.0]	1.4	0.3	0.8	
77	石鏃	I 2②	チャート	[2.5]	[1.7]	0.4	1.3	
78	石鏃	III①	チャート	2.9	2.4	0.7	4.3	
79	石匙	I 2①	黒曜石	4.5	1.9	1.3	6.3	
80	スクレイパー	II 2①	チャート	2.5	2.6	0.6	3.8	
81	大形粗製石匙	I 1①イ	ホルンフェルス	4.9	5.7	0.9	21.8	
82	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[10.2]	[4.9]	3.9	250.0	
83	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	[10.6]	5.3	3.7	300.2	
84	磨製石斧	V ②ア	砂岩	[4.0]	[4.6]	[2.1]	27.5	
85	磨製石斧	II 2①イ	結晶片岩	8.8	2.3	1.0	22.4	
86	打製石斧	II 2②イ	頁岩	[11.1]	4.6	1.1	69.4	
87	打製石斧	II 2①イ	砂岩	11.5	4.5	1.2	73.8	
88	打製石斧	II 2②イ	チャート	[10.1]	3.6	2.0	79.3	
89	打製石斧	II 2②イ	頁岩	12.0	4.7	1.2	73.0	
90	打製石斧	II 2②イ	頁岩	[10.9]	3.9	1.5	59.8	
91	打製石斧	III 2①イ	砂岩	10.7	5.5	1.3	73.8	
369 - 92	打製石斧	III 2②イ	砂岩	12.7	[5.7]	1.8	105.3	
93	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	[10.1]	[7.7]	2.0	136.4	
94	打製石斧	III 2②イ	砂岩	[9.3]	5.4	1.7	100.5	
95	打製石斧	III 2②イ	頁岩	[8.5]	4.7	2.0	70.7	
96	打製石斧	III 2②ア	頁岩	[8.9]	[4.3]	2.2	80.6	
97	敲石	II 3①イ	砂岩	11.0	5.2	4.2	340.5	
98	磨石	II 1②ア	砂岩	[7.9]	[3.1]	2.6	71.0	
99	磨石	II 1-3②イ	閃緑岩	[13.4]	[7.9]	[6.0]	653.9	敲石として再利用
100	石皿	IV ②ア	安山岩	[20.4]	[10.6]	9.2	2437.9	表裏面一部黒色化
370 - 101	石棒	②ア	安山岩	[26.7]	13.7	13.5	7500.0	表裏面一部赤色・黒色化

いる。両側縁及び基部に加工が施されており、先端と脚部の作出が認められることから、未成品と判断した。

79は縦型の石匙である。裏面に主要剥離面が残り、縦長剥片を素材としていると思われる。身部の両側縁には微細な剥離が見られる。

80は円形を呈するスクレイパーである。末端に両面交互剥離によって作出された刃部を有する。

81は石匙であるが、79とは異なり、粗粒の石材を素材に用いた大形粗製石匙である。

82、83は乳棒状磨製石斧の破片で、82が基部片、83が刃部片である。84は磨製石斧の刃部片である。85は小形磨製石斧の未成品である。全体的に研磨が粗く、製作時の剥離を観察できることか

ら未成品と判断した。

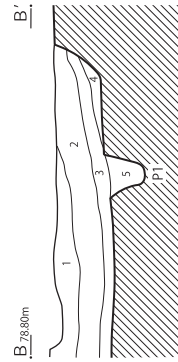
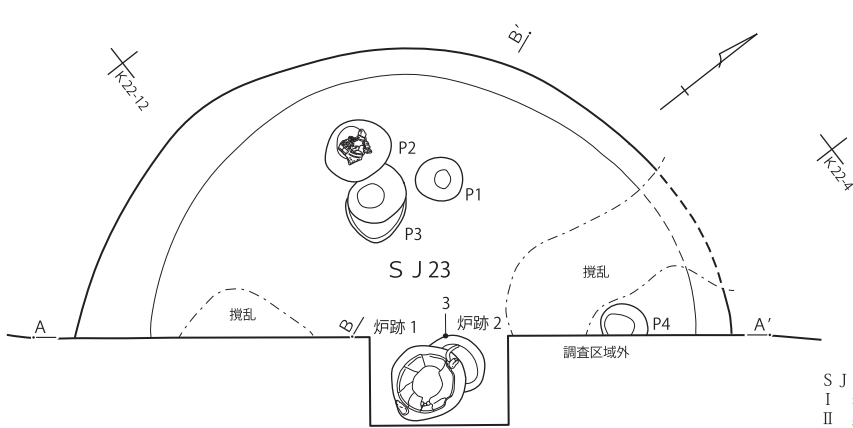
86～96は打製石斧である。86～90は短冊形を呈する。このうち、86が両刃、87が片刃である。91～96が撥形を呈し、刃部は91、92が片刃、93～95が両刃である。

97は敲石で、上下両端だけでなく、両側面も作業面として使用されている。

98、99はともに磨石の破片である。98は欠損後、縁辺を作業面として敲石に再利用している。

100は石皿の破片で、正面右側縁が丁寧に研磨されている。被熱により全体的に赤色化し、破損部を含む一部は黒色化している。

101は大形石棒の破片で、被熱の影響が顕著に認められる。



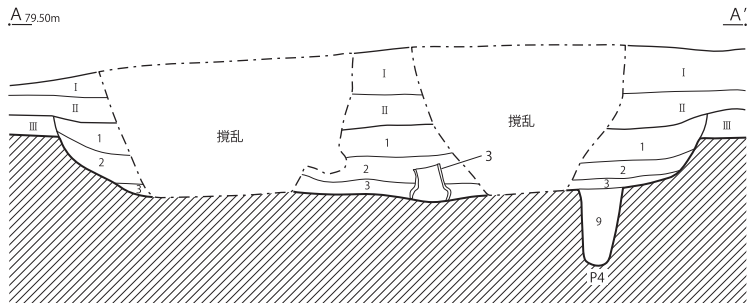
S J 23

- I 表土層
- II 黒褐色土層
- III 黄褐色土層

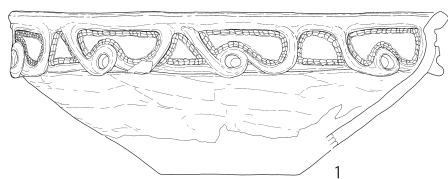
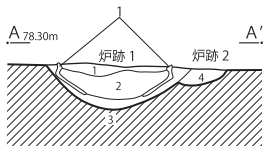
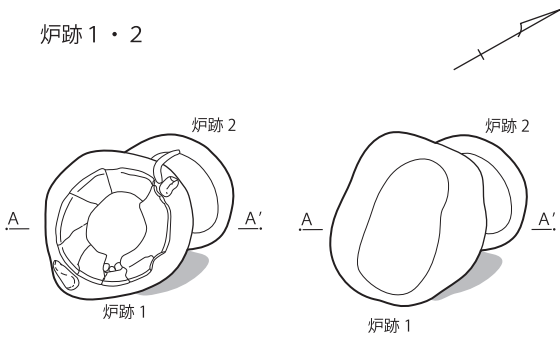
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・小ブロック多量
焼土粒子・炭化物粒子多量
多量の土器を出土
- 3 暗褐色土 2層より含有物少なくしまり良い
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量
しまり良く粘性強い
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子・ブロック多量 しまり良い
- 6 暗黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 7 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子
やや多量
- 8 暗褐色土 7層より含有物が少なく粘性が強い
下部に土器が埋設
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック多量
(樹根の攪乱著しい)

S J 23 炉跡

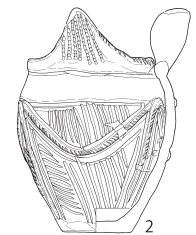
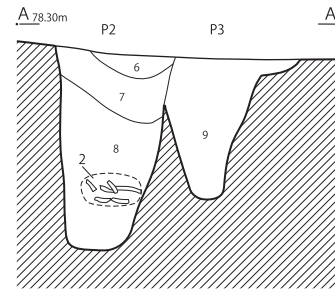
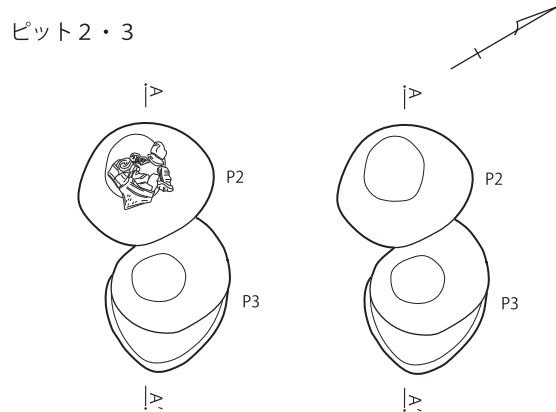
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
焼土粒子・焼土ブロック
(径1~2cm) 多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量
焼土小ブロック微量 (古い炉跡)



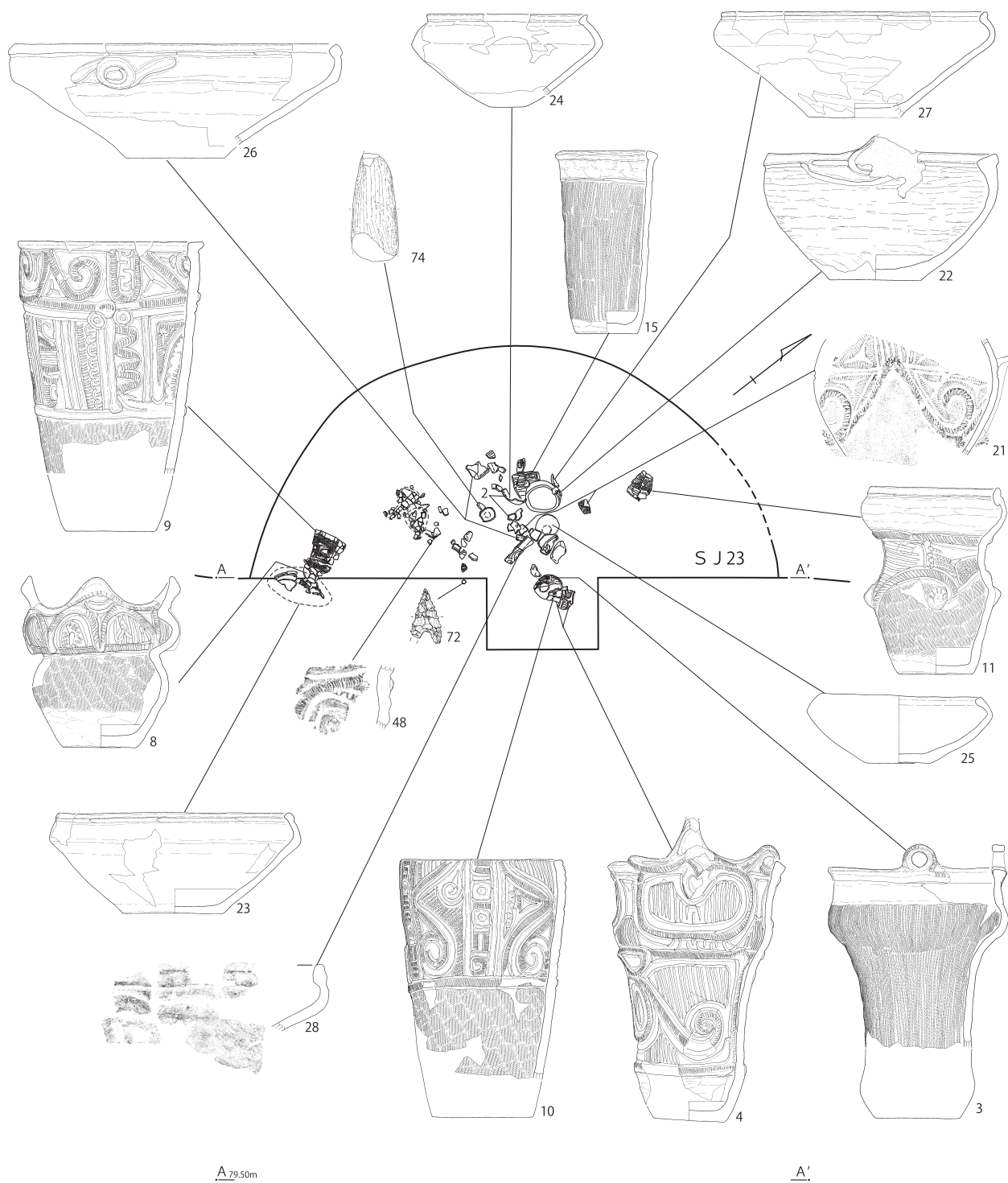
炉跡1・2



ピット2・3

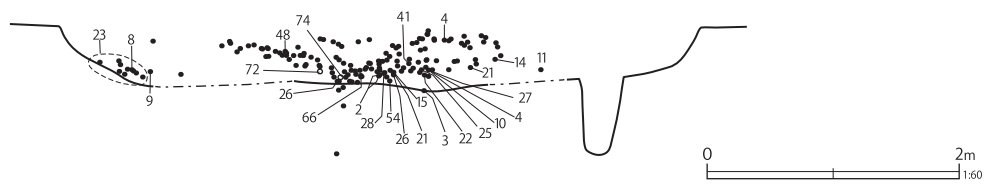


第371図 第23号住居跡

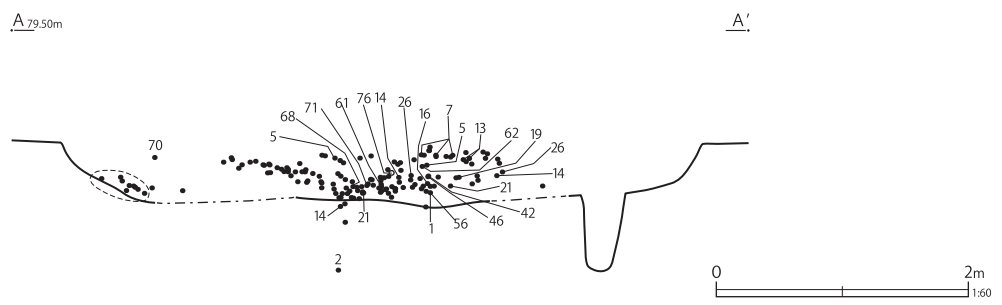
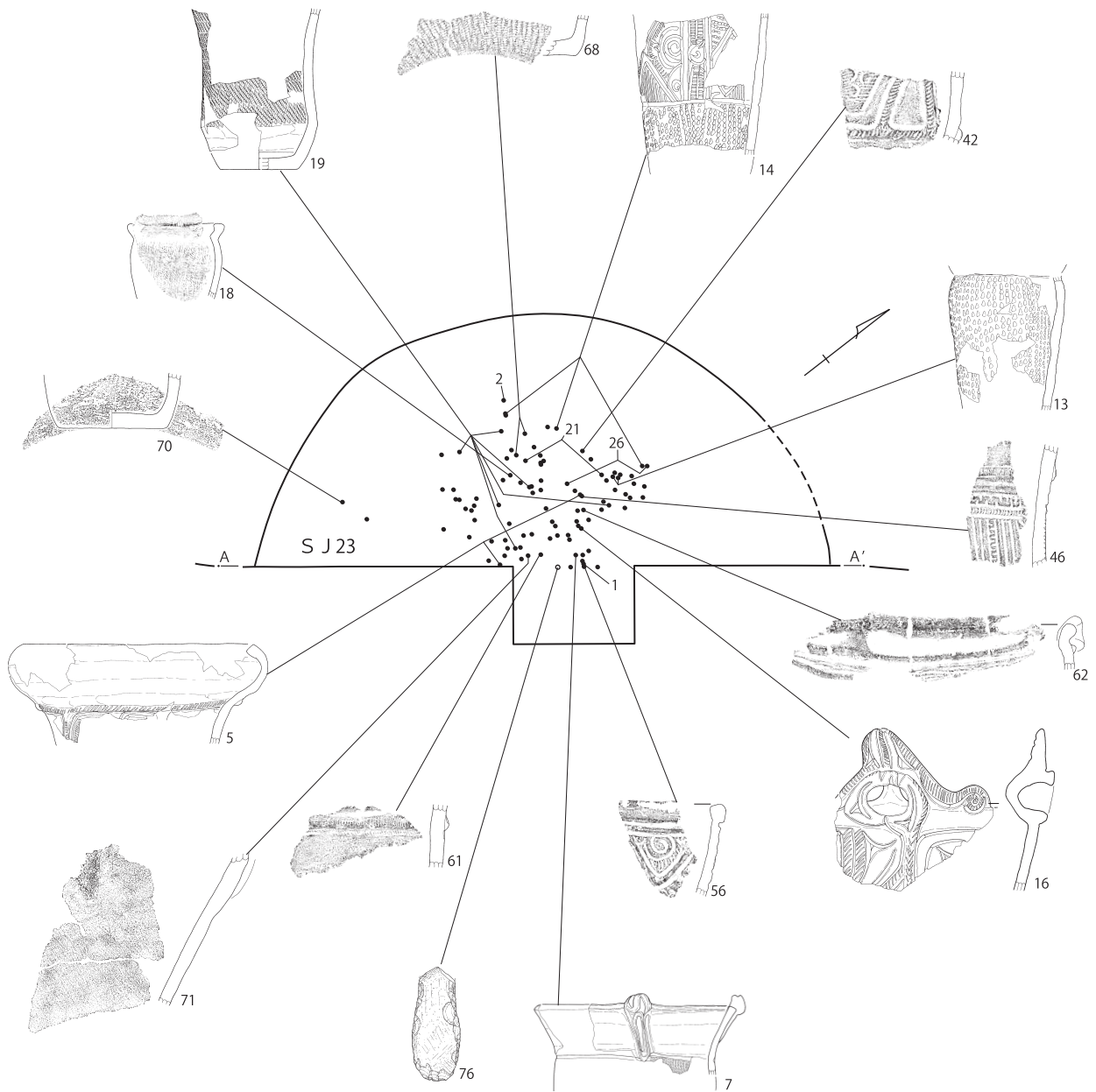


A 79.50m

A'



第372図 第23号住居跡遺物出土状況 (1)



第373图 第23号住居跡遺物出土状況 (2)

第23号住居跡（第371図～第381図）

K-22区に位置する。住居跡の南東側の約半分が調査区域外に当たる。北壁の一部から、住居跡の覆土内にかけて攪乱を受けている。攪乱は床面下までに及んでいる。

住居跡の規模は長径5.20m、短径3.00m以上、深さ0.50mで、南北にやや細長い円形を呈するものと思われる。床面は皿状に、緩やかに立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は4基検出された。P 2からは、底近くから第374図2が割れているもののほぼ完形で出土した。

P 2、3、4が主柱穴と思われ、4本もしくは5本主柱の住居跡と思われる。

主柱穴の深さは、P 1 = 30cm、P 2 = 78cm、P 3 = 55cm、P 4 = 60cmである。

炉跡はほぼ中央部で、2基検出された。浅鉢を埋設する新しい埋甕炉が、地床炉を壊して作られていた。炉体土器に使用された浅鉢は、底が抜かれている。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉が2回作られており、柱穴も重複することから、建て替えられていることは明らかである。新しい住居跡は炉体土器から、勝坂式中段階でもやや新しい段階から新段階にかけての所産と判断される。古い段階の住居跡はそれ以前の時期となる。

遺物は第374図1～第381図80の土器類、石器類が出土した。

遺物はいわゆる吹上パターン状態で、炉周辺の覆土の薄い部分から集中して出土した。また、ほぼ床面から出土したものもあり、第374図3は炉に接する位置で、床面に倒置された状況で出土した。通常の遺物の出土状態ではなく、意味のあるような非常に特殊な出土状況である。

29～32は炉の上部から、33はP 1、34～37

はP 2、38、39はP 4からの出土である。

1は炉体土器で、底部を抜いている。内湾して開く口縁部に、隆帯の「α」状の渦巻文を波状に連結するモチーフを描いている。渦巻文は8単位構成である。隆帯脇には2列の結節沈線を施文している。阿玉台Ⅲ式並行期に位置付けられよう。

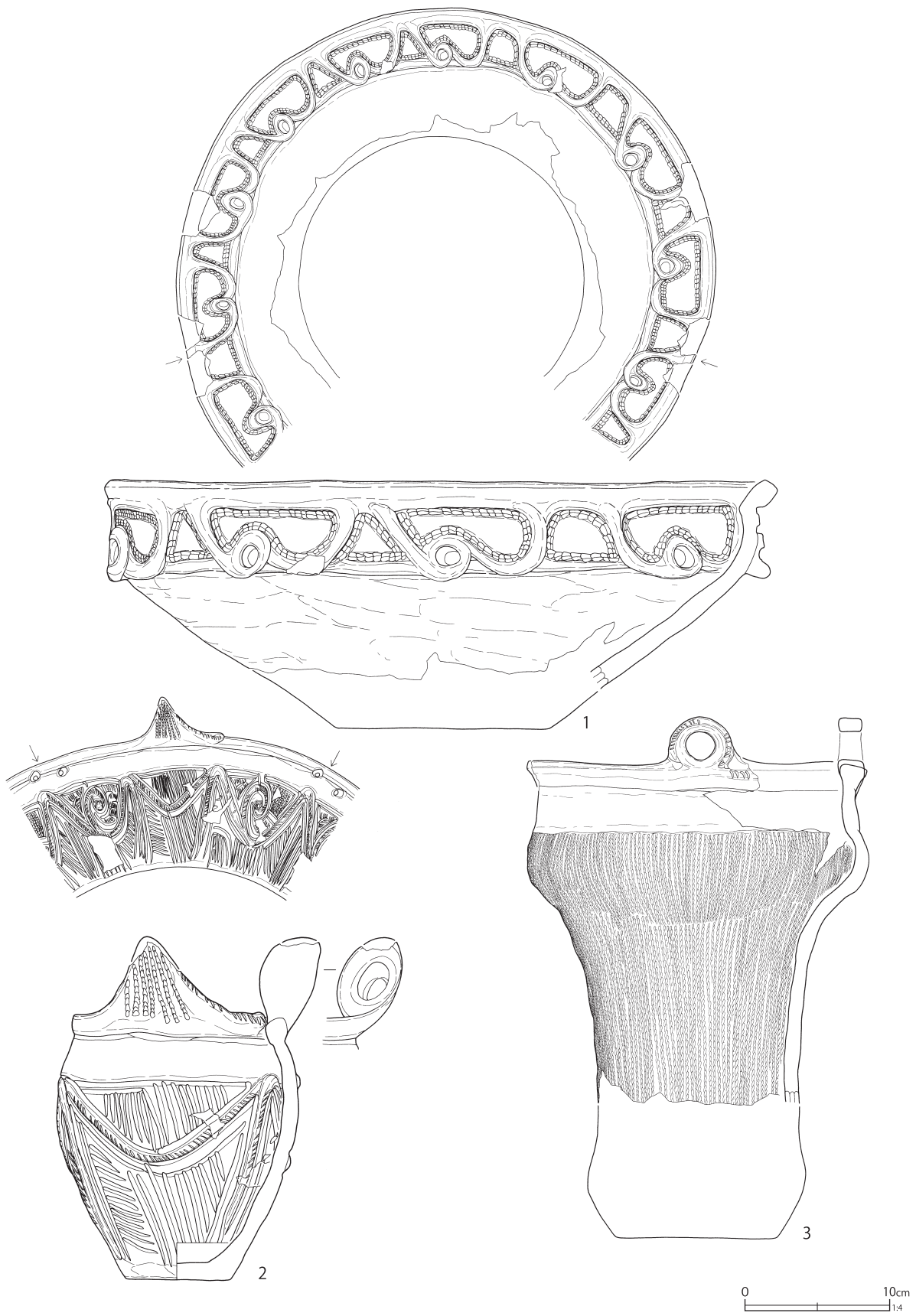
2はP 2出土で、大きな耳状の把手を1箇所につける樽形の土器である。耳状把手部にはペン先状の集合結節沈線を施文しており、隆帯の波状文で胴部を3単位に区画している。把手下の波状部には渦巻文を施文せず、他の2箇所の波底部に巻き上がる渦巻文を施文する。余白には沈線文や三叉文等を施文するが、1箇所のみ集合結節沈線を充填している。

3は炉脇に倒置されていた土器であるが、環状把手は現存していた。無文の幅広口唇部が立ち、口縁部が膨れる器形で、地文に撚糸文Lを施文する。底部を欠損する。

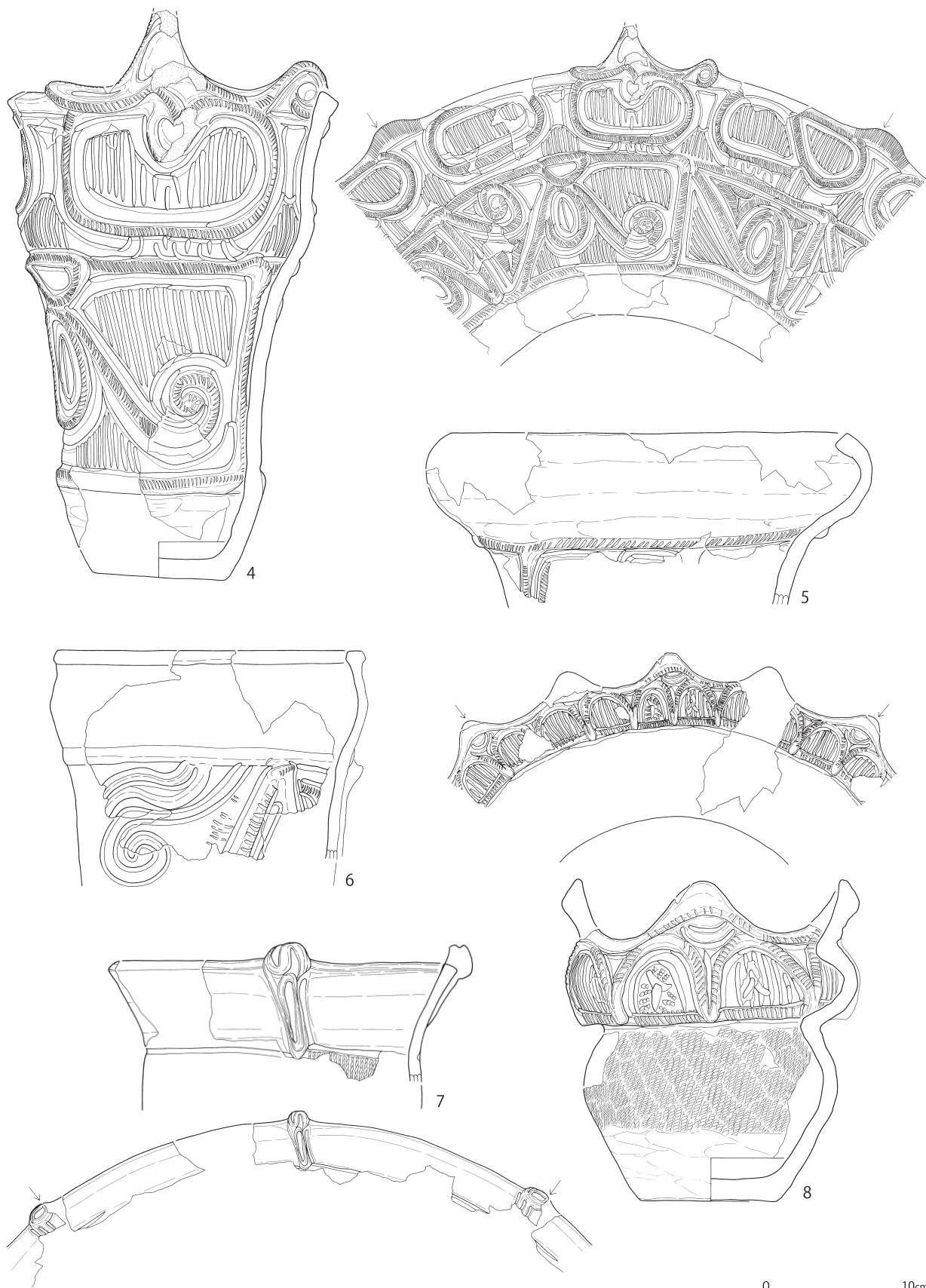
4は炉の直上から出土しており、底部と把手の一部を欠損する。口縁部と胴部で2段に括れる器形で、口唇部には大きな把手とそれに繋がる渦巻文が付き、反対側の口唇部には山形の低い突起が付く。胴上半部には隆帯の大形楕円文を3単位に施文するが、1箇所は「S」字状を呈し、これを2単位と見ると、4単位の単位文となる。しかし、独立した単位文は3単位であることから、ここにも対称性を崩す構成を看取できる。胴部は垂下する隆帯が2本であることから、大きくは2単位に分割されている。しかし、区画内の円形文を連結するモチーフは、大区画の中では2単位の構成を有するようであり、大小2単位区画内に、3単位のモチーフを構成させている。

5、6は内湾する無文の口縁部が開く深鉢で、胴部に刻み隆帯で文様を描くものである。

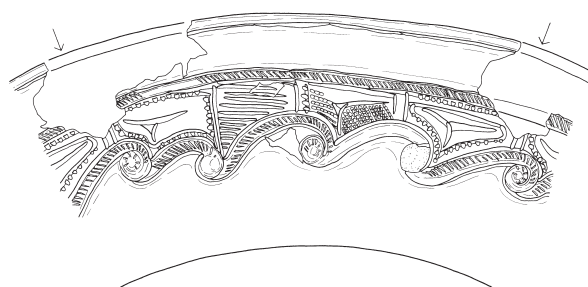
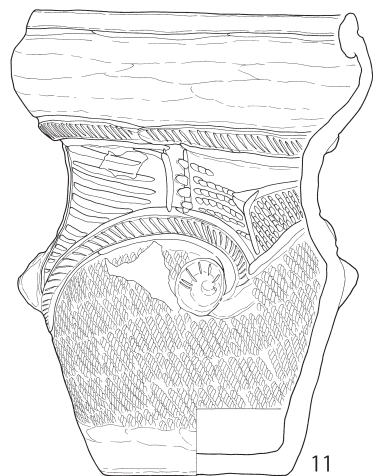
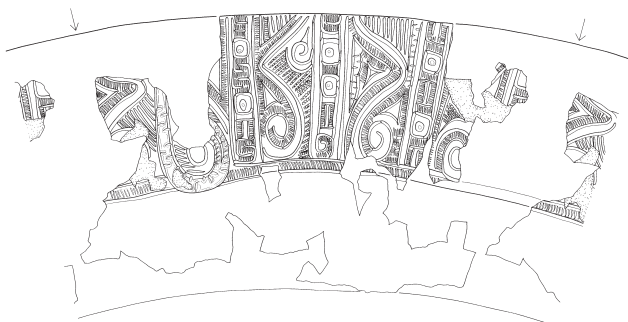
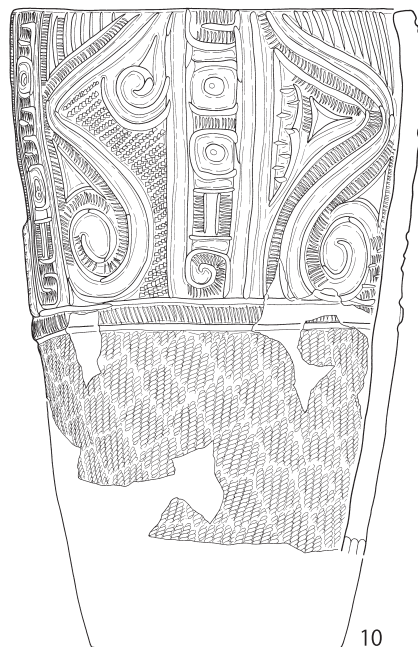
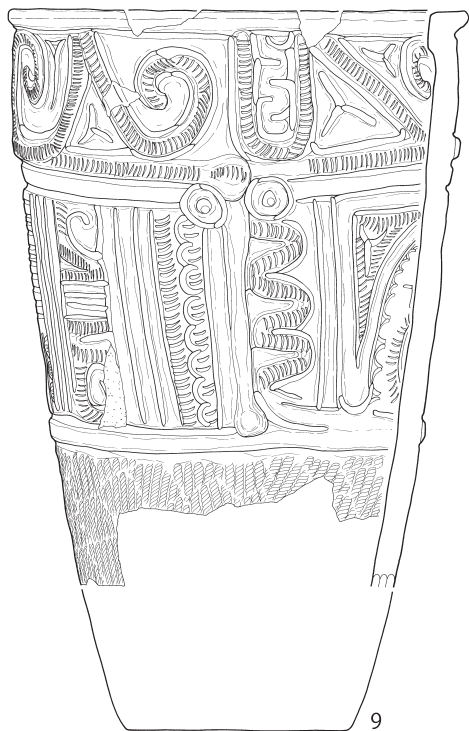
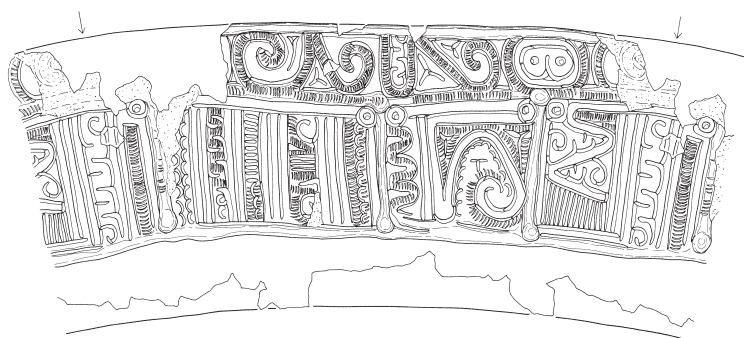
7は無文の口縁部が開く器形で、口唇部に蛇行する隆帯の把手を付け、隆帯を垂下させて2分割する。



第374图 第23号住居跡出土遺物（1）



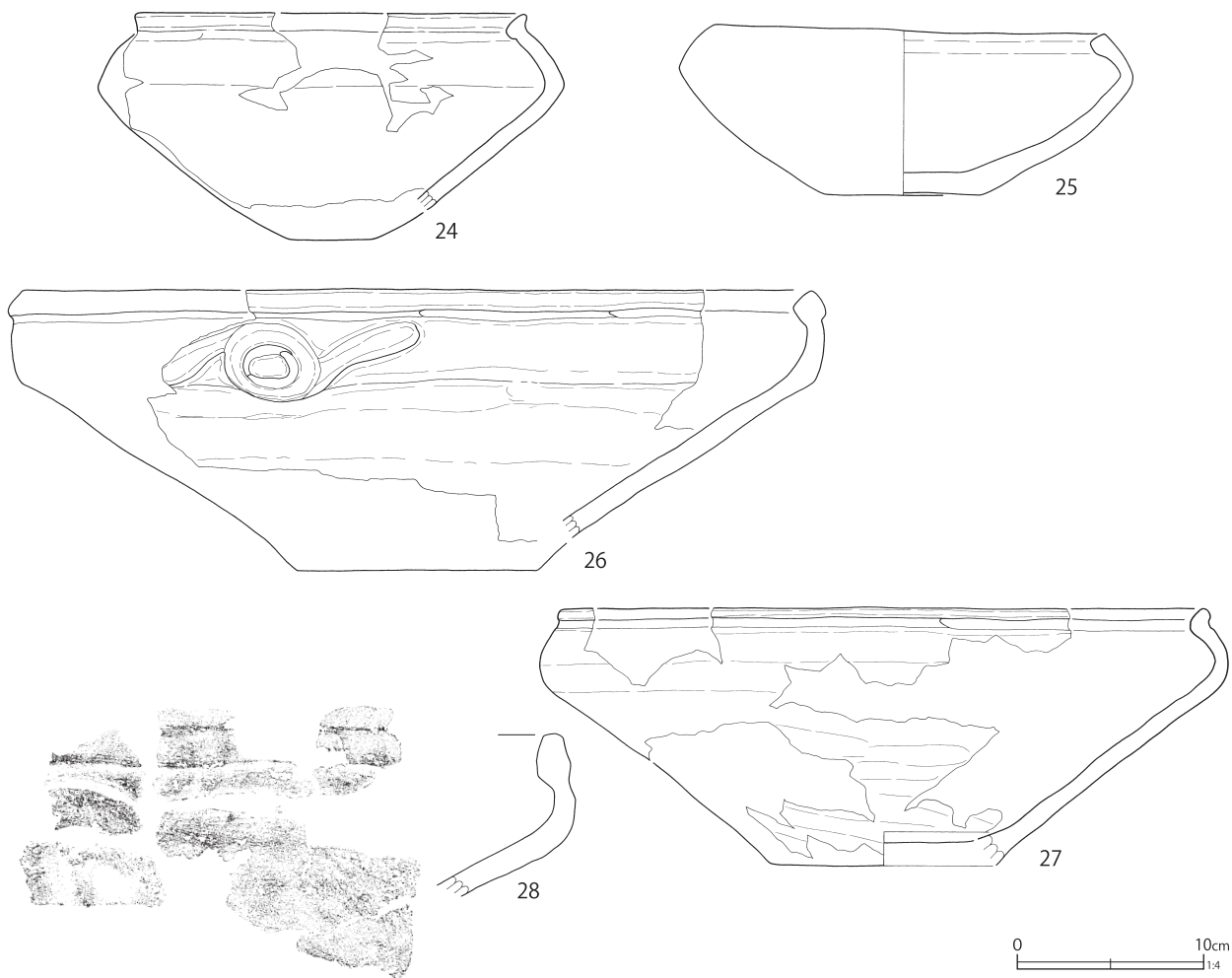
第375図 第23号住居跡出土遺物(2)



第376图 第23号住居跡出土遺物(3)



第377図 第23号住居跡出土遺物(4)



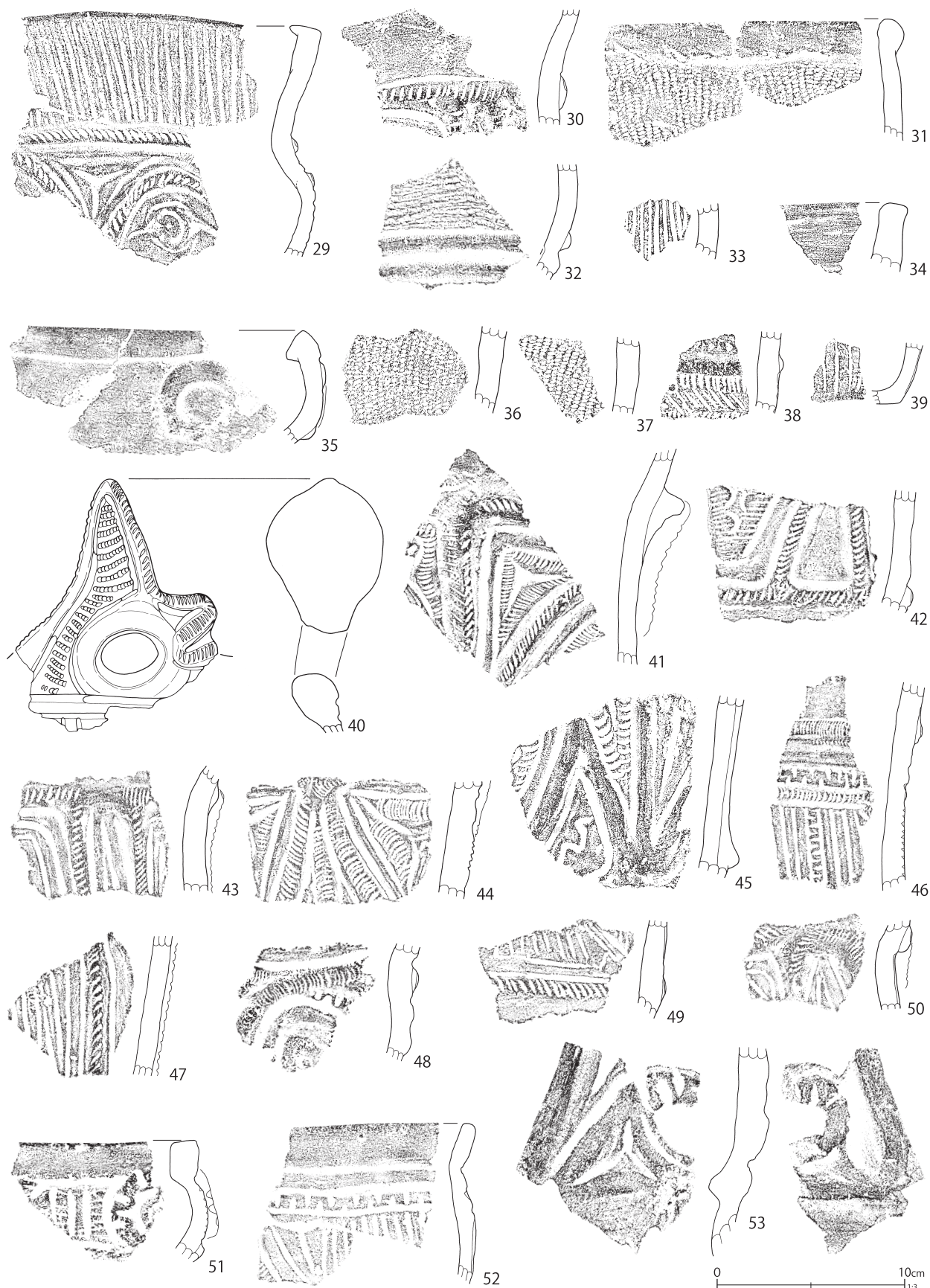
第378図 第23号住居跡出土遺物（5）

第158表 第23号住居跡柱穴計測表（第371図）

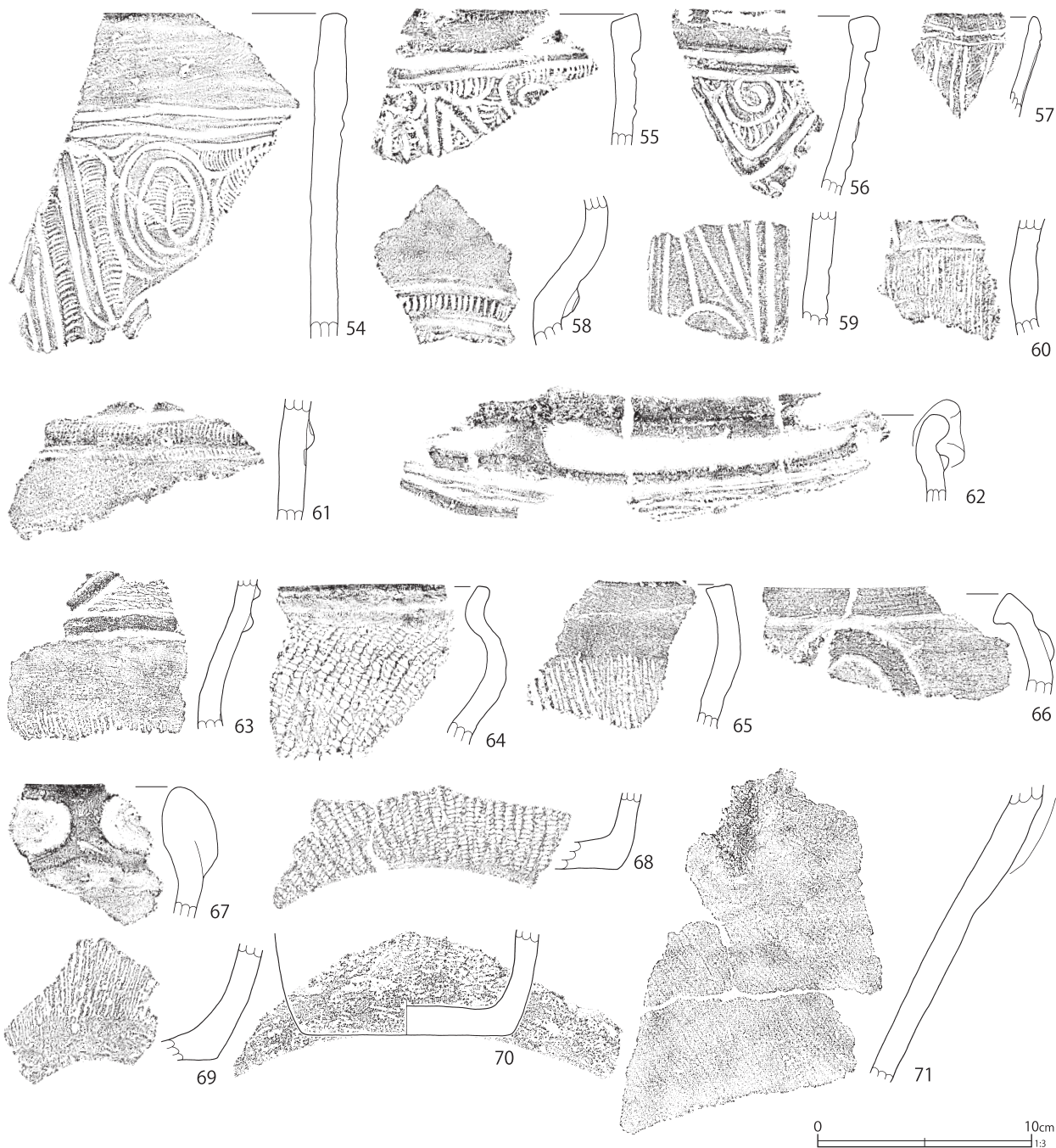
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	35.0	30.0	P 2	55.0	78.0	P 3	(60.0)	55.0	P 4	35.0	60.0			

第159表 第23号住居跡出土復元土器観察表（第374～378図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
374-1	[14.3]	46.2	-	-	80%	377-15	23.9	13.4	-	8.0	完形
2	[23.0]	14.3	-	7.2	完形	16	[19.5]	-	-	-	20%
3	[26.8]	(23.4)	-	-	70%	17	-	-	-	-	10%
375-4	39.5	23.2	-	9.4	80%	18	[9.1]	(11.6)	-	-	10%
5	[12.0]	(27.6)	-	-	40%	19	[19.4]	-	(15.6)	(9.3)	30%
6	[14.8]	(21.8)	-	-	20%	20	[9.0]	-	-	8.8	20%
7	[9.6]	24.6	-	-	20%	21	[15.6]	-	24.8	-	20%
8	22.4	18.5	-	9.6	70%	22	18.6	29.4	-	(11.6)	90%
376-9	[30.4]	24.2	-	-	70%	23	[13.2]	(30.2)	-	13.1	40%
10	[23.6]	(21.2)	-	-	70%	378-24	[10.4]	(20.9)	(24.9)	-	40%
11	24.5	16.8	-	9.8	80%	25	8.9	20.8	-	8.2	完形
377-12	[10.3]	(13.2)	-	-	30%	26	[13.5]	(41.8)	-	-	40%
13	[15.5]	-	[14.1]	-	30%	27	[13.8]	(34.6)	-	-	30%
14	[16.7]	-	[16.2]	-	20%	28	-	-	-	-	20%



第379図 第23号住居跡出土遺物(6)

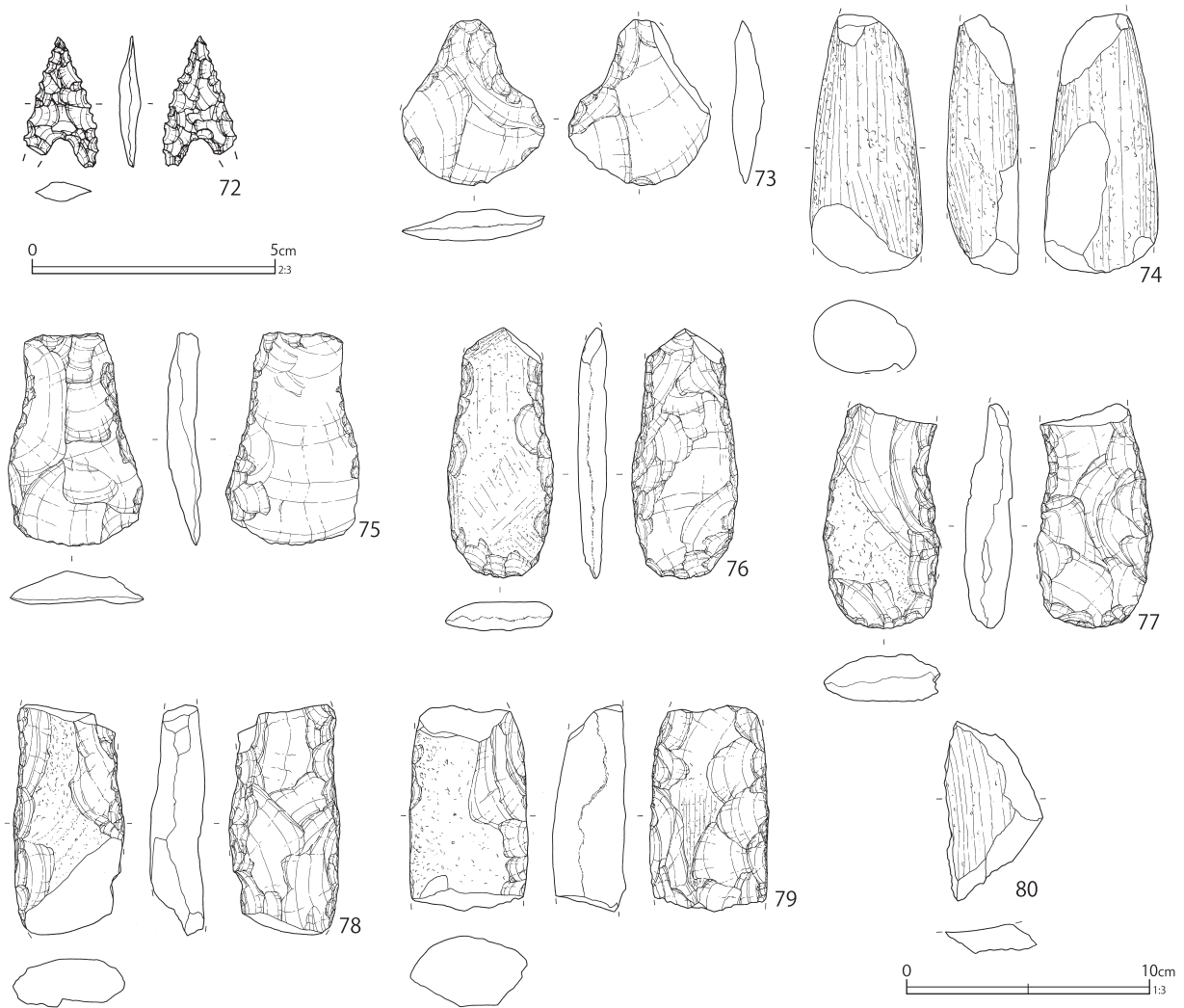


第380図 第23号住居跡出土遺物（7）

8は4単位の波状口縁を呈し、頸部で括れ、胴部が大きく張る器形を呈する。波頂部下の口縁部には波頂部を中心にして、上向き半円状の区画を8単位に連ねる構成をとる。区画内には縦位沈線文を施文するが、実測図正面のみ三叉文を施文し、左側区画内に結節沈線を爪形文の代わりに施文する。この三叉文が目の表現のように見られ、全体形からフクロウを表現しているように見える。フ

クロウ土器とも呼んでおきたい。地文には0段多条RLの縦走縄文を施文する。

9は円筒形土器で、口縁部と胴部の文様帯で構成される。口縁部には楕円区画、右下がりの渦巻文、縦形の楕円区画、左傾右傾して反対巻きに巻き上がる渦巻文が組み合わせるが、全体構成は不明である。胴部は一見細かく縦位区画するようであるが、垂下する縦位隆帯で区画する3単位構成



第381図 第23号住居跡出土遺物（8）

第160表 第23号住居跡出土石器観察表（第381図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
381 - 72	石鏃	I 2㉔	チャート	2.7	[1.6]	0.4	1.1	
73	大形粗製石匙	I 1㉔イ	ホルンフェルス	6.8	5.8	1.3	42.2	
74	磨製石斧	I ㉔イ	砂岩	[10.7]	4.7	[3.0]	227.4	
75	打製石斧	III 2㉔イ	頁岩	8.8	5.5	1.4	55.6	
76	打製石斧	III 2㉔ア	ホルンフェルス	[10.3]	4.4	1.2	71.7	
77	打製石斧	II 2㉔イ	ホルンフェルス	[9.2]	[4.8]	2.0	82.2	
78	打製石斧	II 2㉔イ	頁岩	[9.5]	4.5	2.3	123.6	
79	打製石斧	V ㉔イ	砂岩	[8.5]	4.9	3.0	170.4	
80	石皿	IV ㉔イ	緑泥片岩	[7.4]	[4.0]	[1.5]	33.6	

であることが分かる。垂下隆帯の上端部には対の円形貼付文を施文しており、単位性は明らかであろう。胴部は約半周位を占める広い大区画1単位と、小区画2単位で構成されており、小区画には異なるモチーフが、大区画には縦位区画線を中心にした集合文を描いている。胴部下半の地文には

0段多条RLの縦走縄文を施文する。

10も円筒形土器で、文様帯は1帯構成である。文様帯は幅狭な縦位区画文3帯で、大1、小2の区画を施している。小区画2単位と大区画1単位の幅はほぼ同等で、9の胴部構成と酷似している。10の小区画は左右対称形の渦巻文を構成し

ており、9の口縁部の左右対称形の渦巻文と同じモチーフとなっている。胴部の地文は、0段多条RLの縦走縄文と思われる。

11は頸部で強く括れ、無文の口縁部が開き、胴部が張り出す器形で、胴部に先端部が渦を巻く隆帯を入り組ませながら4単位を連結するモチーフを描いている。一見すると加曽利E式へと続く渦巻文のようであるが、背割隆帯や2本隆帯ではないこと、頸部と連携されていて独立していないことなどから、いわゆるサンショウオウ文などの抽象文からの変化と捉えることも可能であろう。頸部との区画文内には3箇所には三叉文、1箇所に集合沈線文を施文し、三叉文施文区画でも1箇所は結節沈線を施文するなどの変化を付けている。胴部の地文は0段多条RLの縦走縄文である。

12は無文の口縁部が立ち、胴部が張る器形を呈する。胴部には低平隆帯で上下対弧状のモチーフ、ゾウリムシ状文を並べるモチーフを施文している。対弧文には細かな刺突文を施しており、余白には非常に細かな爪形文を伴う三叉文を施文している。

13も頸部で括れ胴部が張る器形であるが、前面に押引状の三角刺突文を施文する。

14は円筒形土器であるが、胴部に13と同様な押引状の三角刺突文を施文している。上半部は幅狭な縦位区画帯で分割し、鋸歯状区画、渦巻文などを施文する。

15は無文の口縁部を区画し、地文に撚糸文Lを施文するのみの円筒形土器である。

16は外面円窓、内面眼鏡状を呈する把手が付き、向かって右側に垂下する蛇体を表現している。

17は口縁部の隆帯の三角形区画に爪形文を施文する。18は無文の短い口縁部が外反して、膨れる胴部に撚糸文Rを施文する。

19、20は張り出す底部で、19は単節RL縄文を横位施文する。20は刻み隆帯で底部を区画する。21は球形状を呈する胴部に左右対称に巻く隆帯渦巻文を施文する。余白には爪形文を伴う三

叉文を施文する。

22～28は浅鉢で、22は鉢状を呈し、口縁部に把手を有する。他はいずれも胴部が屈曲するもので、無文の口縁部が外反するものはない。26は胴部に低隆帯の渦巻文を施文する。

40～53は勝坂式中段階から新段階にかけてのキャリパー形深鉢の土器群である。40は円窓を有する山形把手の右側に蛇体を表現すると思われる蛇行垂下隆帯を配している。把手には集合結節沈線を施文する。

41～50、58は胴部破片で、刻み隆帯で区画文を施し、爪形文を伴う三叉文等を施文する。46は区画並行沈線や充填文要素に、交互刺突を施している。

51～53はより簡素化したモチーフを施文する新段階の土器である。51は隆帯の円形文に交互刺突を施しており、52は口縁部区画の並行沈線に交互刺突を施文している。

54～57、59～61は円筒形土器で、54は細かな爪形文を伴う三叉文を施文しており、61の区画隆帯にも細かな刻みを施している。59は簡素化した三叉文等を施文する終末段階の土器であろう。

62、63は加曽利E式土器で、地文に撚糸文を施文するE I式段階の深鉢である。

64、65は地文のみ施文する深鉢で、64は膨らむ口縁部に横位の単節LR縄文、65は無文の口縁部下に撚糸文Rを施文する。

66は口縁部が内湾する浅鉢、67は鉢形の浅鉢であろうか。71は低隆帯が垂下する浅鉢の胴部である。

68～70は底部で、68、70は0段多条RLの縦走縄文、69は撚糸文Lを施文する。

72～80は出土した石器である。

72は鋸歯状の石鏃で、正面左脚部を欠いている。

73は粗粒の石材を利用した大形粗製石匙である。

74は乳棒状の磨製石斧で、刃部と基部を欠く。

75～79は打製石斧である。77～79は撥形を

呈し、いずれも刃部が両刃である。75、76は短冊形の打製石斧で、基部と刃部を欠いている。

80は石皿の破片である。

第51号住居跡（第382図～第386図）

G・H-21・22区に位置する。今回の調査区の最北東端に位置する。芦荻場遺跡の外輪に位置する住居跡である。

住居跡の平面形は六角形を呈し、規模は長径6.70m、短径6.30m、深さ0.45mである。

壁溝は3本検出された。一番外側で最も新しいものを壁溝1、その内側に巡るものを壁溝2、さらに部分的ではあるが柱穴間を直線的に結ぶものを壁溝3とした。

柱穴は15基検出された。柱穴は住居跡の六角形の頂部付近に重複して存在しており、壁溝などとの関係から、住居跡の建て替えは明らかである。

P14だけ他と異なる覆土で、本遺構に伴わない可能性もある。

壁溝1に対応する最も新しい柱穴は、P1、4、6、7、8、10の6基と思われ、平面形にも合致した配置である。

壁溝2に対応する柱穴は、P2、5、15、7、9、11の6基であると考えられる。P7は重複関係が掴めなかったが、重複使用されたものと仮定する。壁溝2の内側に納まる配置である。

壁溝3は壁溝としたが、伴うと思われる柱穴を抽出できず、壁溝1に伴う柱穴を途切れながらも直線的に繋いでいることから、間仕切りの性格を有する溝と判断した。

主柱穴の深さは、P1=69cm、P2=57cm、P4=77cm、P5=75cm、P6=82cm、P7=82cm、P8=83cm、P9=70cm、P10=72cm、P11=

67cm、P15=63cmである。

炉は地床炉で、住居跡中央部の北寄りに位置し、長径90cm、短径78cm、深さ27cmを測る北西方向に長い隅丸長方形を呈する。炉には2箇所の窪みがあり、2回の使用が考えられる。また、中央部の窪みは径45cm、深さ20cm程であり、炉体土器が抜き取られた可能性も考えられる。

埋甕は検出されなかった。

壁溝及び炉から、本住居跡は1回の建て替えが行われており、2軒の住居跡が重なっていると判断される。また、大形の住居跡の割には出土遺物が少なく、構築時期を決定する遺物が出土していないため不詳であるが、新しい住居跡は平面形が六角形で6本主柱であることから、加曽利EⅠ式前半期の所産であると推定される。

遺物は第384図1～第386図49の土器類、石器類が出土した。

土器は1～37である。

2、3はP1、4はP2、5はP4、6はP5、7、8はP6、9、10はP7、11はP9、12はP10、13～15は炉内からの出土である。

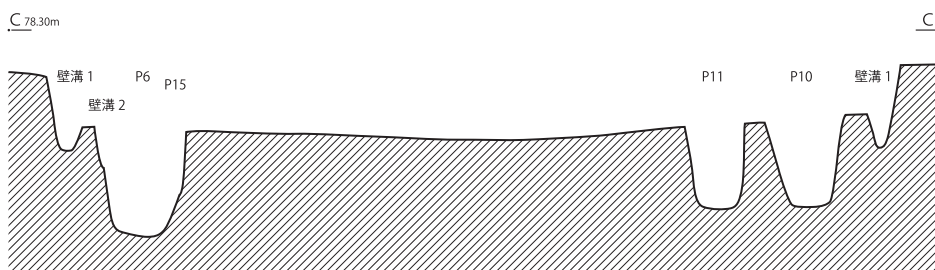
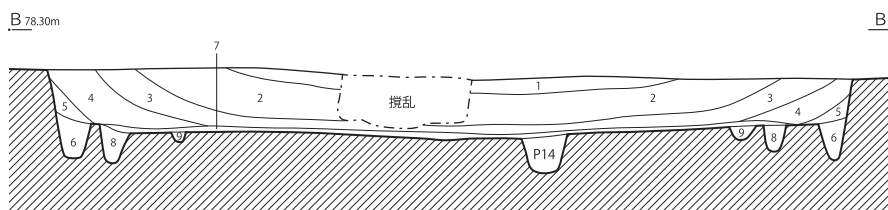
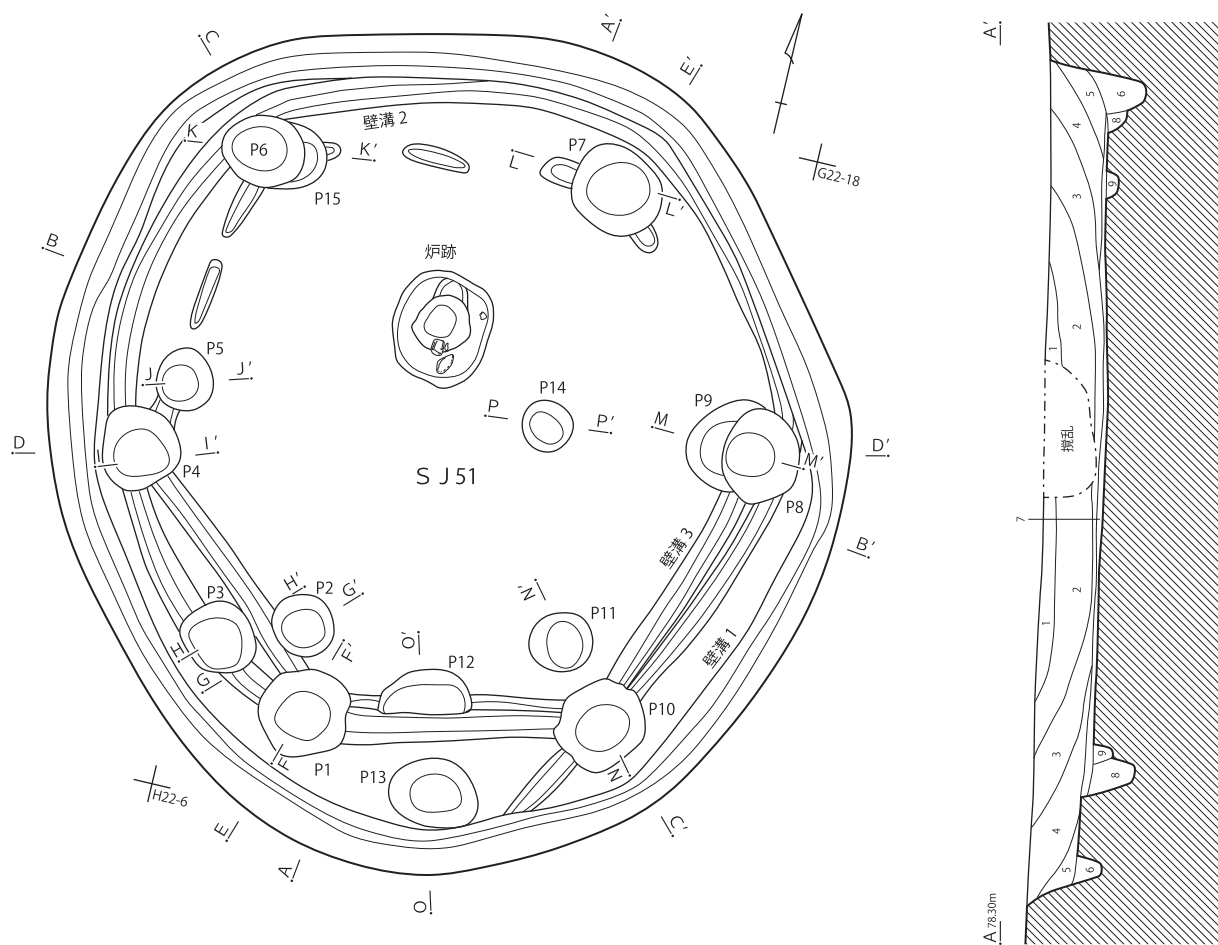
1は撚糸文Lを施文する胴下半部である。加曽利E式キャリパー形土器の底部と思われる。

16～19は角押文や三角押文を施文する勝坂式古段階の土器群である。20は区画沈線に沿って鋸歯状沈線文を沿わせており、26は隆帯脇に蓮華文を施文する勝坂式中段階の藤内式に比定されよう。

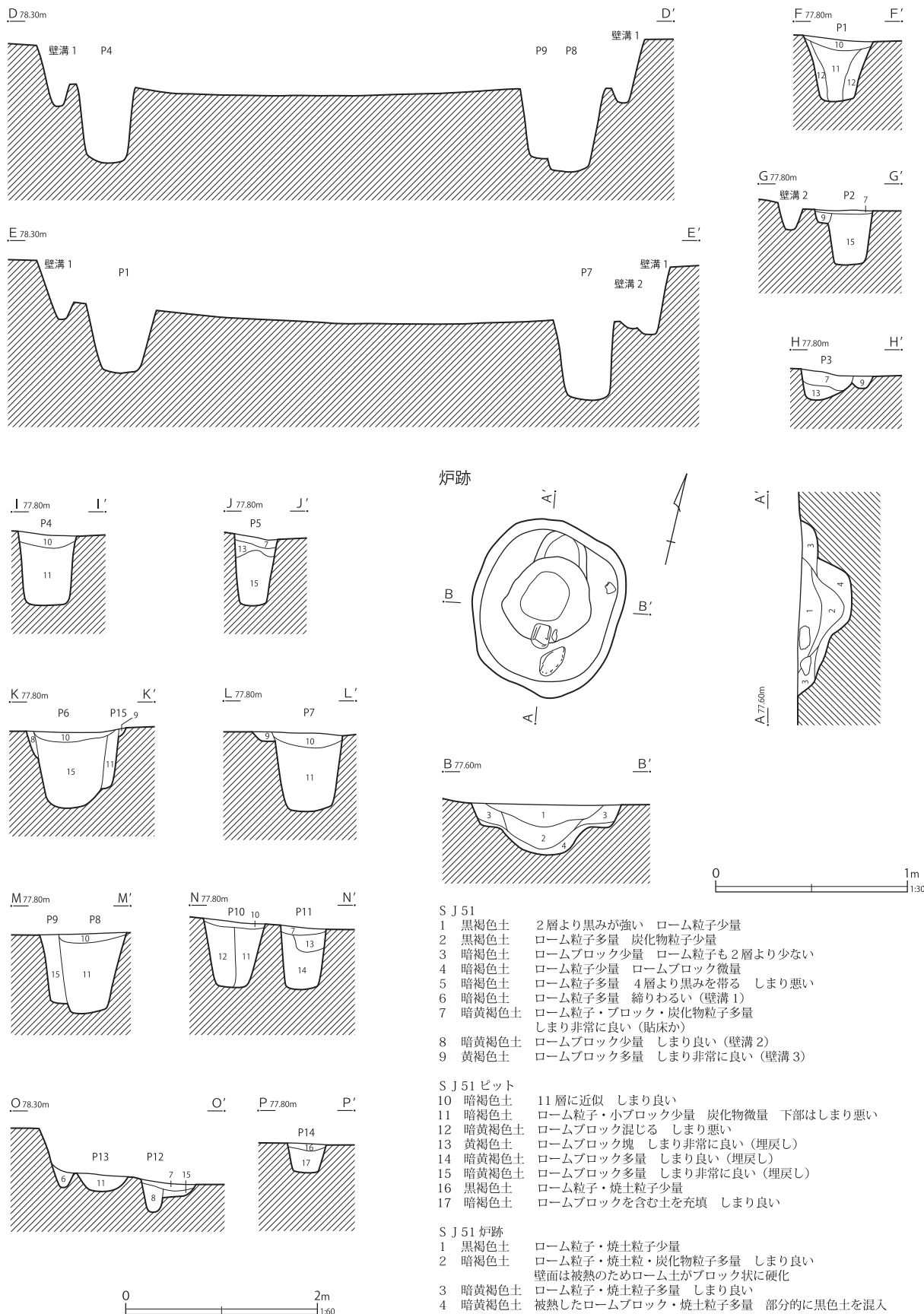
21～25、27～36は大半が勝坂式新段階の土器群と思われ、刻み隆帯と沈線を組み合わせてモチーフを描いている。21は外削状を呈する口唇部に沈線を巡らせて2分割し、異方向の刻みを施文する。

第161表 第51号住居跡柱穴計測表（第382・383図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	75.0	69.0	P2	50.0	57.0	P3	62.0	32.0	P4	66.0	77.0	P5	46.0	75.0
P6	65.0	82.0	P7	75.0	82.0	P8	73.0	83.0	P9	75.0	70.0	P10	70.0	72.0
P11	50.0	67.0	P12	75.0	33.0	P13	72.0	18.0	P14	40.0	30.0	P15	48.0	63.0



第382图 第51号住居迹 (1)



第383図 第51号住居跡(2)



第384图 第51号住居跡出土遺物（1）



第385図 第51号住居跡出土遺物(2)



第386図 第51号住居跡出土遺物(3)

第162表 第51号住居跡出土復元土器観察表(第384図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
384-1	[11.2]	-	10.6	7.2	30%

第163表 第51号住居跡出土石器観察表(第385・386図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
385 - 38	磨製石斧	Ⅲ①イ	砂岩	6.2	3.0	1.1	24.5	
39	打製石斧	I 2②イ	ホルンフェルス	[10.2]	4.0	2.6	123.5	
40	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	11.6	5.1	2.8	151.8	
41	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	10.1	5.4	2.3	133.1	
42	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	7.8	4.8	1.7	59.5	
43	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[8.5]	5.0	2.8	120.0	
44	打製石斧	V②イ	ホルンフェルス	[6.9]	5.9	1.8	86.6	
45	磨石	Ⅱ1-3①イ	安山岩	6.7	4.5	3.8	153.2	
46	磨石	V②イ	緑色岩	[15.3]	[3.7]	3.7	268.8	
47	磨石	Ⅱ1-3①ア	砂岩	13.2	9.1	5.6	917.8	表裏面全部赤色・黒色化
48	石皿	Ⅳ②イ	砂岩	9.7	11.2	5.0	432.2	
386 - 49	石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[26.6]	[21.4]	5.2	3873.6	

23は円筒形土器の口縁部破片で、結節押引文を縦位施文する。24、25は頸部で括れ、内湾する無文の口縁部が開く器形の深鉢である。29は半隆線を垂下施文する曾利式系の土器である。

30、36は口縁部が内湾する浅鉢で、31は浅鉢の

胴部破片と思われる。いずれも有文の浅鉢である。

32は太い撚糸文L上に隆帯を施文するもので、加曾利E式の可能性が高い。34は撚糸文L地文上に、半截竹管状工具の平行沈線でモチーフを描いている。35は条線文上に並行沈線を施文する

ものである。

37は勝坂式土器の底部と思われる。

石器は38～49が出土した。

38は小形の局部磨製石斧である。

39～44は打製石斧である。39は短冊形を呈する片刃の打製石斧である。40～42が撥形を呈し、刃部の残る40、42は両刃である。刃部片である43、44は、43が両刃、44が片刃である。

45～47が磨石で、45、47は周縁に整形が施されている。また、47は正面及び裏面の中央に凹痕を有する。

48、49は石皿の破片である。49は皿部の周縁と裏面に凹痕を有し、特に裏面には密集している。

第52号住居跡（第387図～第398図）

G・H-21区に位置する。第3号溝と重複するが、第3号溝の方が新しい。平面形は北東方向に細長い楕円形で、規模は長径6.0m、短径5.6m、深さ0.35mである。

壁溝はほぼ重なるように、壁に沿って2本検出された。外側の壁溝の方が新しいが、内側の壁溝を調査している際に、両者の区分が曖昧になってしまった。

柱穴は合計29基検出された。住居跡のコーナー6箇所柱穴が複数回の重複や隣接して集中しており、その6箇所の柱穴を主柱とする6本主柱の住居跡が想定される。柱穴は、規模、覆土、配置、切り合いなどから少なくとも古・中・新の3組の組み合わせが想定された。

新段階は最終段階の住居跡の柱穴配置であり、P 1、5、7、8、9、12の6基が想定される。ほぼ北方向に主軸をとる6本主柱の住居である。

中段階は、P 3、16、18、8、20、21の6基が想定されるが、P 8が新段階と兼ねており、P 3の位置が理想的な配置ではなく、やや歪んだ柱穴配置となっている。

古段階は、P 2、6、17、19、10、11の6基

が想定され、比較的整った6本主柱の配置となっている。

主柱穴の深さは、P 1=45cm、P 2=33cm、P 3=24cm、P 5=61cm、P 6=44cm、P 7=57cm、P 8=72cm、P 9=62cm、P 10=48cm、P 11=58cm、P 12=67cm、P 16=58cm、P 17=45cm、P 18=30 cm、P 19=45cm、P 20=52cm、P 21=46cmである。

炉跡は住居跡中央部北寄りに位置し、地床炉である。南北方向に細長い楕円形で、規模は長径115cm、短径79cm、深さ26cmである。底部には炉床の痕跡が5箇所に見られた。

埋甕は検出されなかった。

遺物は、覆土2層中に形のわかる土器や復元可能な土器の大破片がいわゆる吹上パターン状態で出土した。また、第391図1は住居跡の覆土調査中に正位の状態で出土した。その後、出土地点がP 8の直上であることが明らかとなり、偶然かは明らかにし得ないが、P 8が埋まりかけている時に埋設された可能性も否定しきれない。

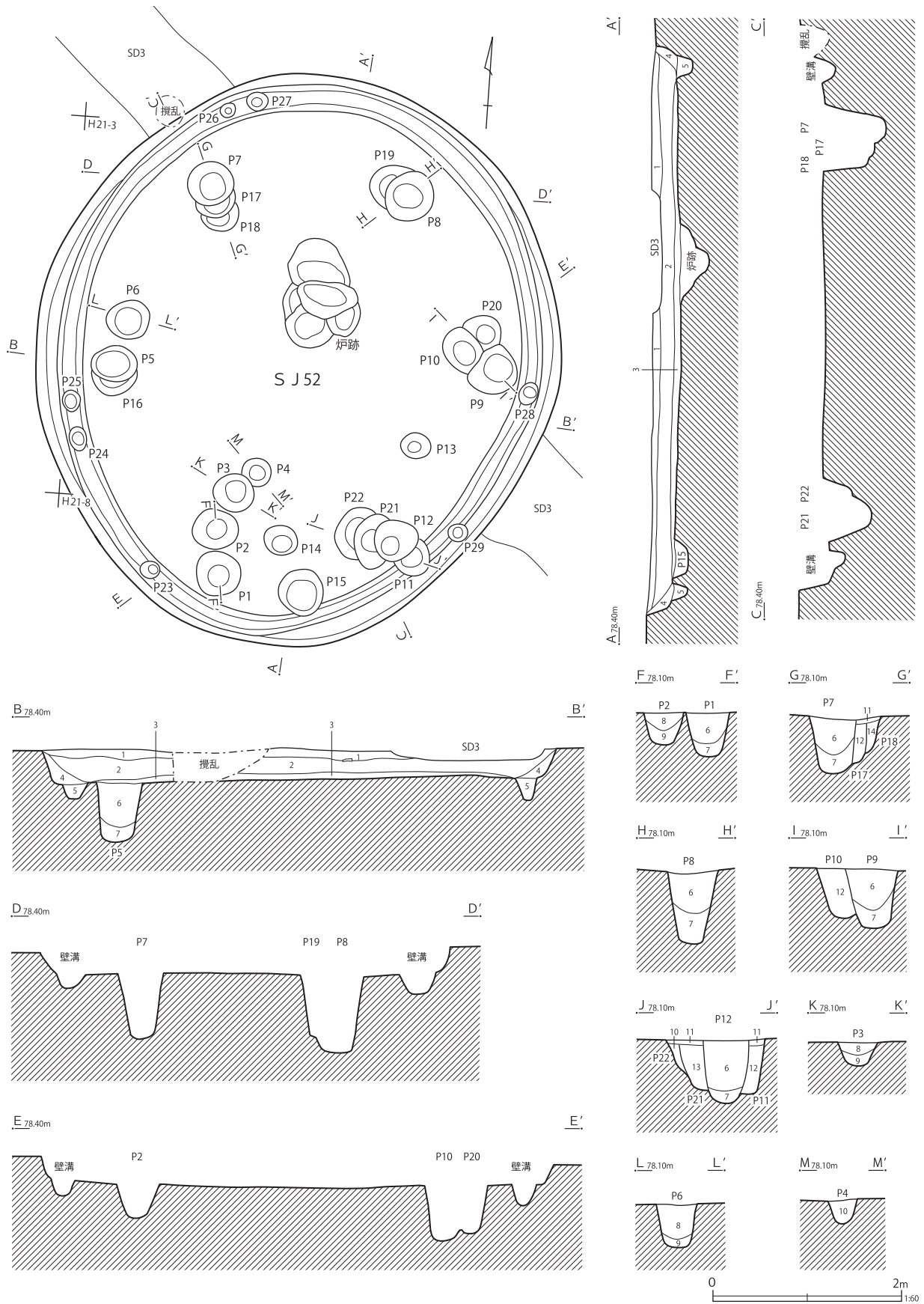
住居跡はピットの配置から少なくとも3回の住み替えが行われ、炉床の数からはさらに多くの作り替えが示唆されている。

最終住居跡の時期判定も、確実な共伴土器がないことから難しいが、壁溝を有し、6本主柱で、覆土から勝坂式新段階の土器群が一括出土していることから、その時期の所産と思われる。

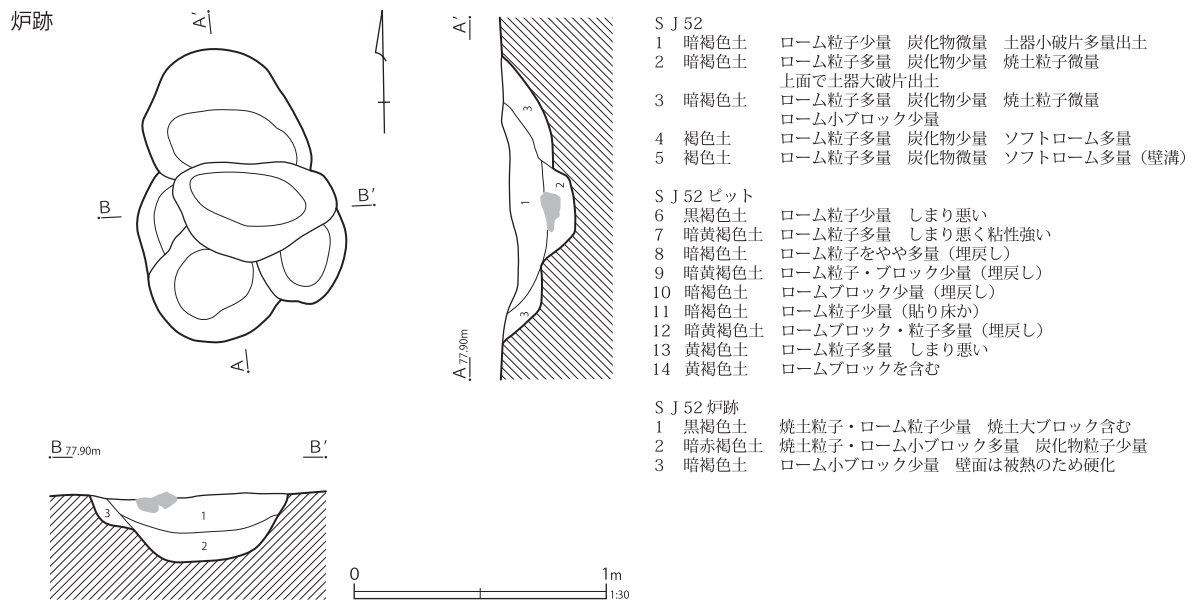
遺物は第391図1～第398図98の土器類、石器類が出土した。

第395図14はP 2、15はP 3、16はP 5、17、18はP 6、19、20はP 7、21、22はP 8、23、24はP 10、25～27はP 12、28はP 13、29～33は炉覆土内からの出土である。

1は正位の状態で出土した土器で、埋設の可能性を指摘した土器である。頸部で括れ、胴部の張る器形で、台が付く可能性もある。内湾する無文の口縁部の正面と背面に大小の把手を付け、頸部



第387图 第52号住居迹 (1)



第388図 第52号住居跡 (2)

第164表 第52号住居跡柱穴計測表 (第387図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)
P 1	46.0	45.0	P 2	48.0	33.0	P 3	42.0	24.0	P 4	31.0	25.0	P 5	49.0	61.0
P 6	43.0	44.0	P 7	48.0	57.0	P 8	55.0	72.0	P 9	55.0	62.0	P 10	(43.0)	48.0
P 11	40.0	58.0	P 12	48.0	67.0	P 13	32.0	11.0	P 14	37.0	1.0	P 15	50.0	14.0
P 16	48.0	58.0	P 17	43.0	45.0	P 18	40.0	30.0	P 19	51.0	45.0	P 20	(38.0)	52.0
P 21	59.0	46.0	P 22	57.0	29.0	P 23	19.0	1.0	P 24	26.0	1.0	P 25	20.0	1.0
P 26	17.0	1.0	P 27	21.0	1.0	P 28	24.0	1.0	P 29	20.0	1.0			

の眼鏡状把手と繋げている。大把手は眼鏡状となり、小把手は筒状を呈している。両把手下の胴部には、眼鏡状把手より2本隆帯の渦巻文が垂下して、横位連結するモチーフを描いているが、2本隆帯のそれぞれが反対の渦を巻き、一見横「S」字状文に見える。反対側も同様の渦巻文を施文するが、2本目の隆帯の先端が渦を巻かずに形骸化している。地文は無文である。

2も頸部で括れ胴部が張るが、底部まで存在する深鉢である。口縁部に中空状の大きな把手を付け、頸部の眼鏡状把手と繋げている。胴部には刻み隆帯を垂下させて区画し、垂下隆帯の起点から斜めに垂下して渦を巻く隆帯を派生させている。モチーフの余白には、三叉文を施文する。

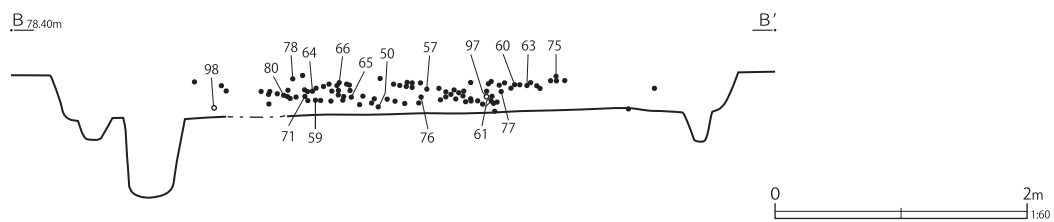
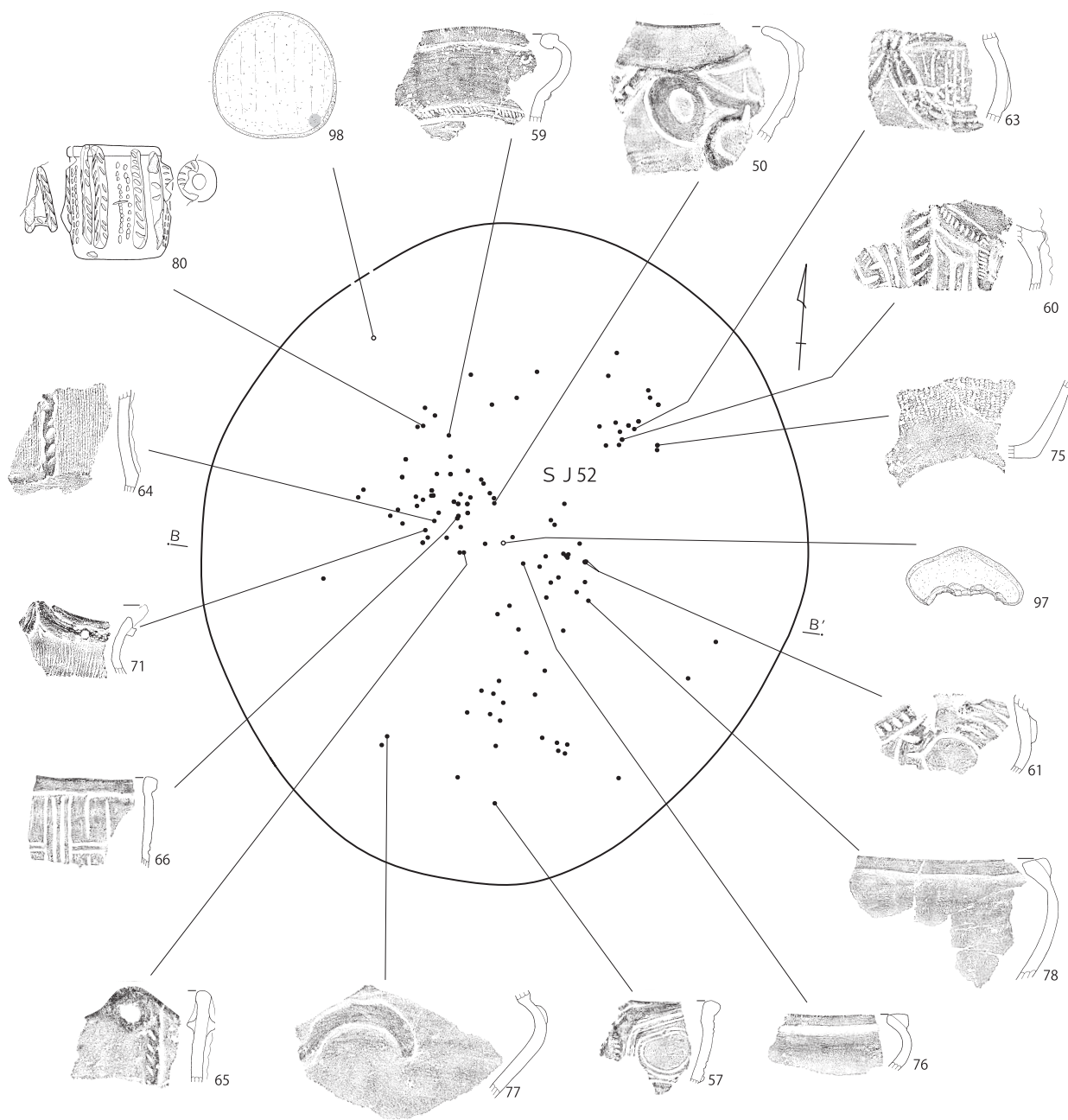
3～7は円筒形土器である。3は口唇上からとぐるを巻く蛇体隆帯が垂下し、渦巻き隆帯を派生

させるモチーフを描くものと思われる。胴部地文に0段多条RLを縦位施文する。

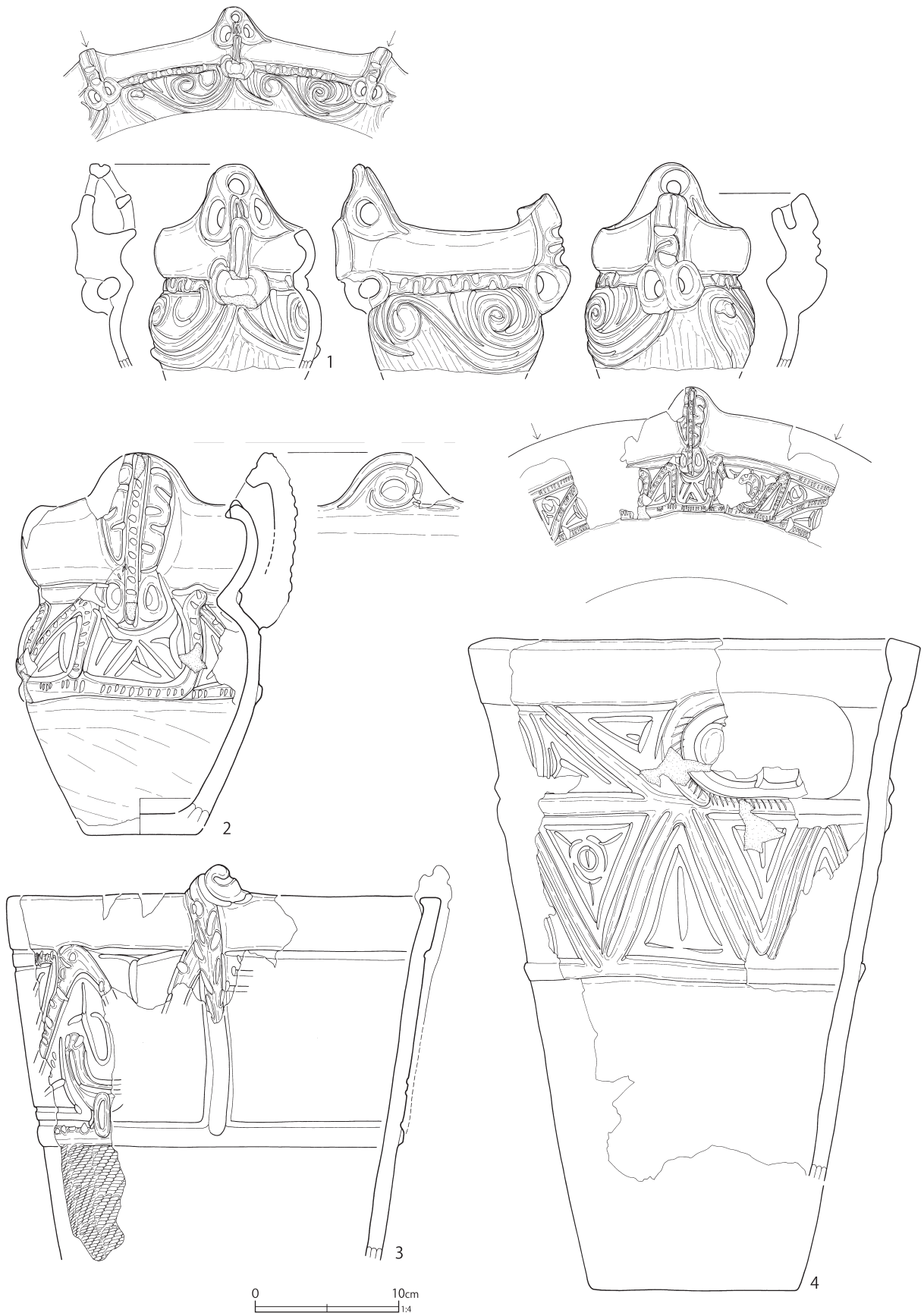
4は胴部文様帯を2帯に区画し、上段に楕円区画と斜行隆帯を組み合わせたモチーフ、下段に連続鋸歯状区画を施しており、区画内には三叉文や沈線などの単純な充填文を施文する。

5は非常に大形の深鉢で、幅広の口縁部無文帯を区画し、胴部文様帯と、無文帯を挟んで底部文様帯を構成している。胴部文様帯には低平な隆帯で渦巻文を連結するような大柄のモチーフを描いており、区画隆帯には交互刺突や「ハ」字状刻み等を施している。底部文様帯には楕円区画文を配するものと思われ、区画内には簡素な充填文を施文する。地文は0段多条RLの縦走縄文である。

6は口唇部から胴区画部にまで蛇体隆帯を垂下させ、文様帯内を波打たせて表現している。ま



第390図 第52号住居跡遺物出土状況(2)

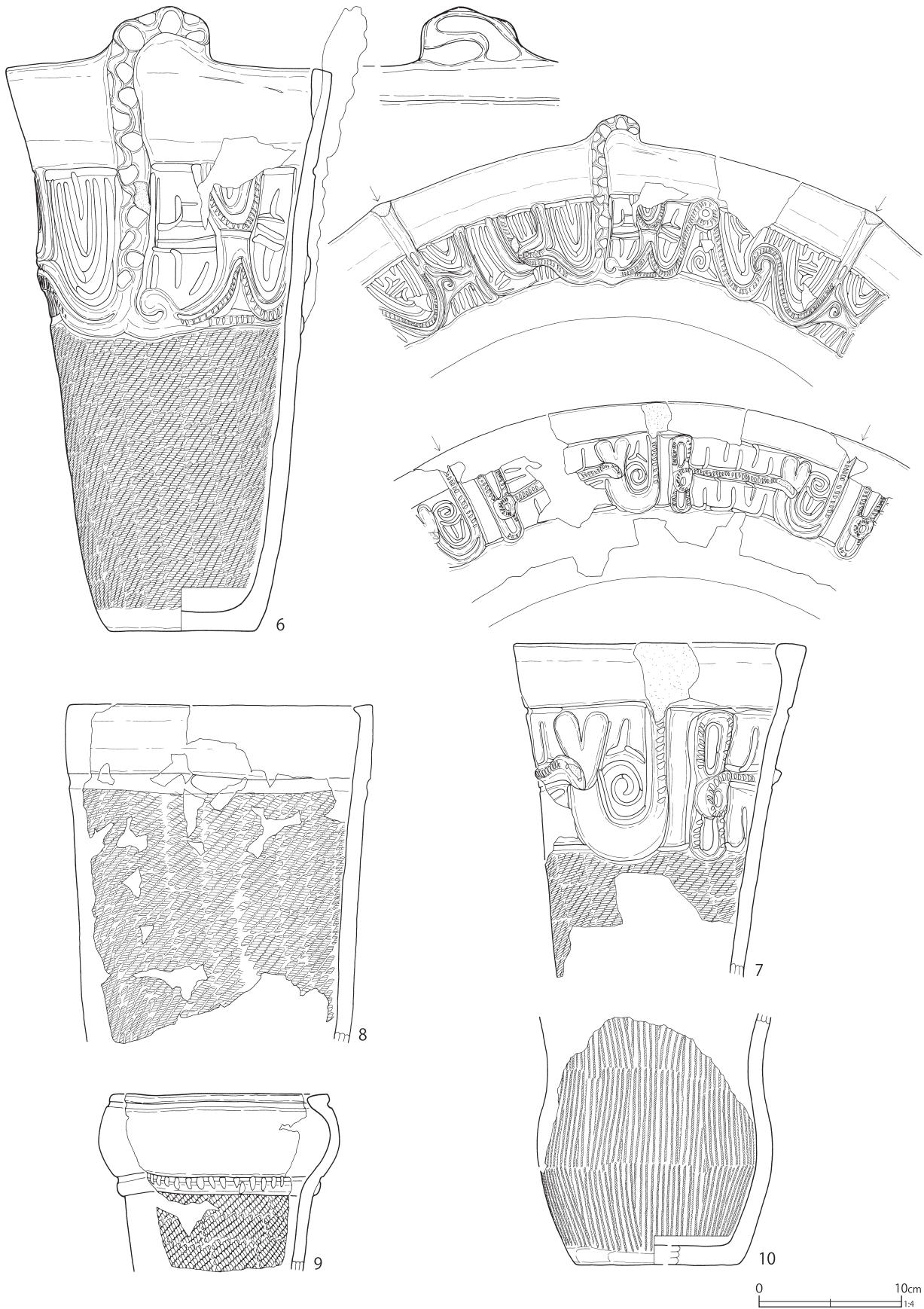


第391图 第52号住居跡出土遺物(1)

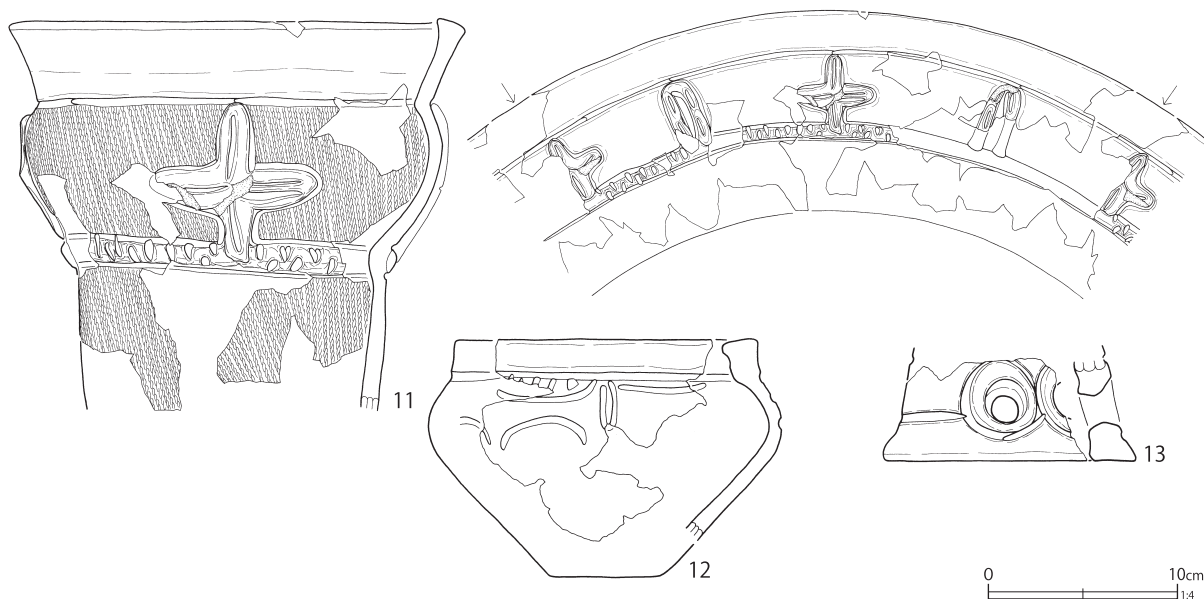


0 10cm
1:4

第392図 第52号住居跡出土遺物(2)



第393图 第52号住居跡出土遺物（3）



第394図 第52号住居跡出土遺物（4）

第165表 第52号住居跡出土復元土器観察表（第391～394図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
391-1	[14.4]	9.8	-	-	60%	393-8	[23.6]	(21.2)	-	-	40%
2	[25.9]	13.8	-	-	70%	9	[12.5]	(15.2)	-	-	30%
3	[27.7]	(30.0)	-	-	30%	10	[17.3]	(16.2)	-	11.4	40%
4	[42.5]	(31.4)	-	-	50%	394-11	[20.6]	24.1	-	-	50%
392-5	78.5	(53.2)	-	16.0	60%	12	[10.5]	(15.9)	-	(5.5)	30%
393-6	43.6	22.8	-	10.2	完形	13	[5.4]	-	-	(13.2)	30%
7	[23.4]	20.4	-	-	50%						

た、文様帯には蛇頭を2箇所に表示しており、裏面側の垂下する蛇体と合わせると、蛇体3体が絡むモチーフを描いているようである。モチーフの余白には沈線文のみの充填文を施文している。

7は口縁部から垂下する幅広で低平な隆帯で蛇体2体を表現しているようである。頭の部分が文様帯内にあることから、口縁部には蛇尾が巻き上がる構成をとるものと思われる。胴部地文は0段多条RLの縦位施文である。

8は口縁の無文部のみを区画する深鉢で、口唇部内端が突出する。胴部には0段多条RLを縦位施文する。

9は内湾する無文の口縁部が開き、括れる頸部以下に単節LR縄文を横位施文する。

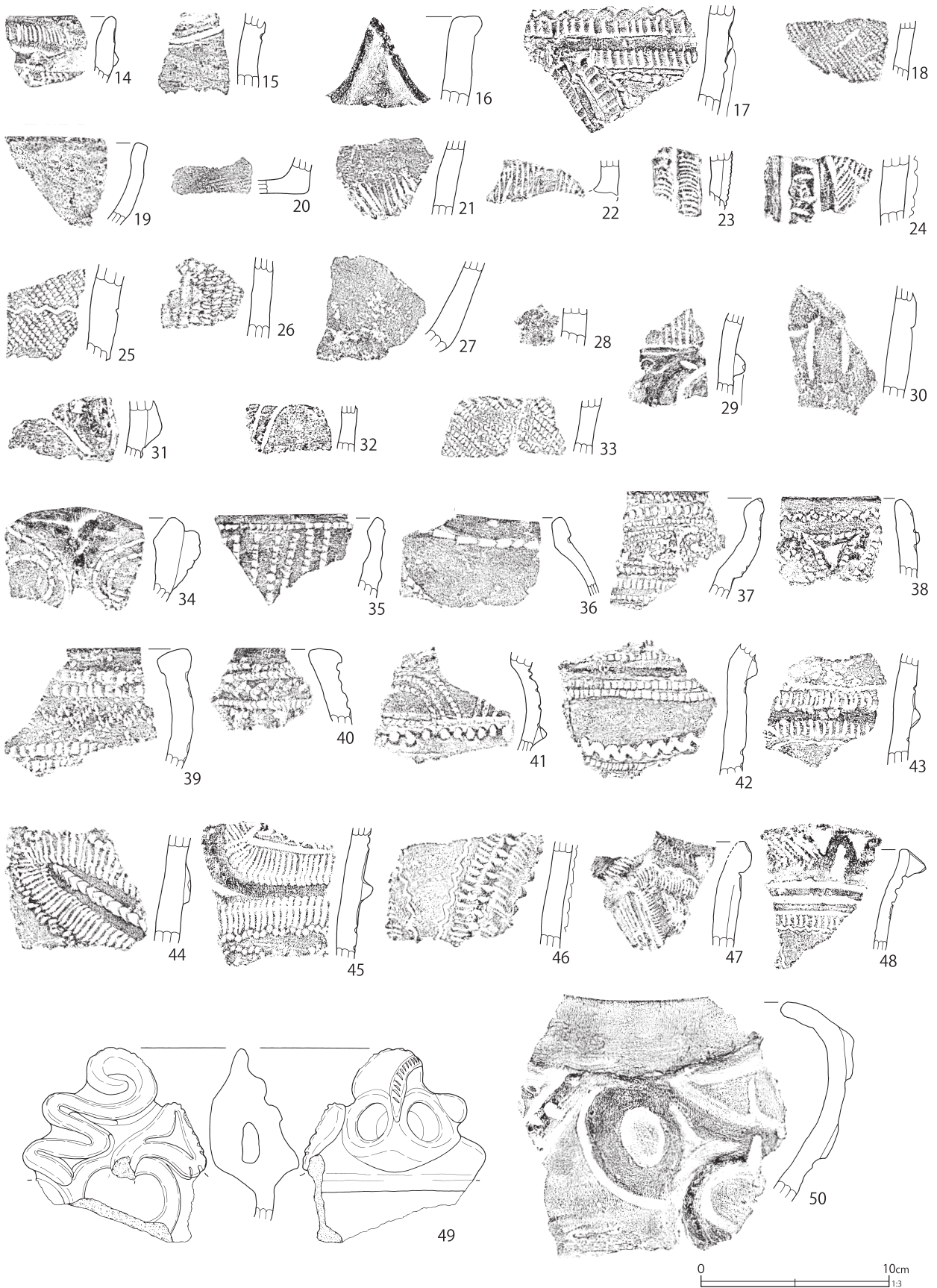
10は細かな0段多条の撚糸文Lを施文する底部である。

11はキャリパー形土器で、口縁に幅広の無文部を有する口縁部が開き、交互刺突を施す隆帯で、括れる頸部を区画している。口縁部には背割状の隆帯で表現する「十」字状文と逆「U」字状文を交互の4単位に施文している。

12は鉢状の浅鉢で、口縁部が内湾しながら立つ。胴部には2本沈線の縦位区画文間に、上下対弧の沈線文を施文している。

13は台形土器で、2連の円孔が空く。

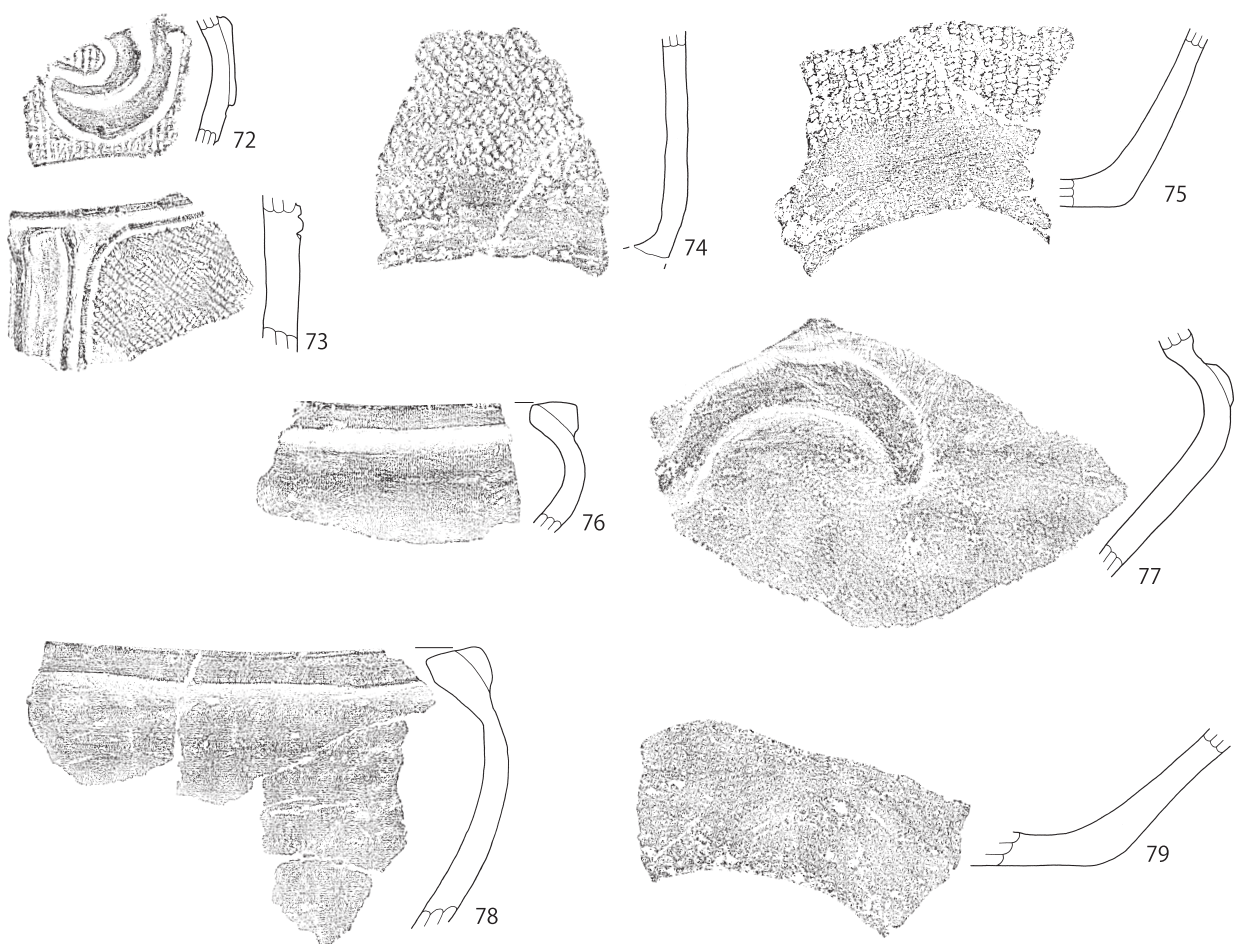
破片では、34～45は角押文や三角押文でモチーフを描く勝坂式古段階の土器群であり、37、38は印刻状の三叉文、39、40は三角押文で小鋸歯状文を施文している。また、44、45はキャタピラ文の脇に三角押文の小鋸歯状文を施文する。34、36、41は阿玉台Ⅱ式並行期に、他は新道式期に比定されよう。57は胎土に雲母を含み、半



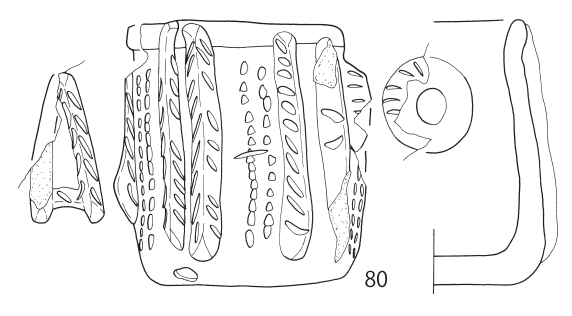
第395图 第52号住居跡出土遺物 (5)



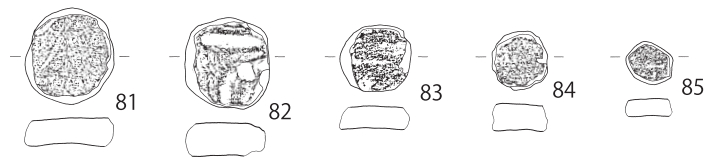
第396図 第52号住居跡出土遺物(6)



0 10cm
1:3



0 5cm
1:2



0 10cm
1:3

第397图 第52号住居跡出土遺物（7）



第398図 第52号住居跡出土遺物(8)

第166表 第52号住居跡出土石器観察表 (第398図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
398 - 86	石鏃	I 2①	チャート	2.1	1.8	0.3	0.6	
87	石鏃	I 2②	チャート	2.6	[1.9]	0.5	2.2	
88	石鏃	I 2②	チャート	[1.4]	1.5	0.4	0.6	
89	石鏃	III ②	チャート	[2.4]	1.5	0.5	1.9	
90	スクレイパー	I 1①	砂岩	8.9	10.0	1.5	107.0	
91	スクレイパー	I 1②	ホルンフェルス	[8.3]	7.8	2.2	131.3	
92	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	12.6	4.2	2.5	185.5	
93	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	10.4	5.0	1.8	114.3	
94	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	11.1	5.7	2.7	170.6	
95	打製石斧	III 2②イ	砂岩	9.5	5.6	1.4	70.0	
96	打製石斧	①ア	砂岩	5.4	10.6	2.1	126.3	
97	礫器	II 2②イ	ホルンフェルス	[7.7]	4.5	1.6	75.7	
98	磨石	I 1-2①ア	安山岩	11.6	11.3	4.3	835.4	表裏面一部赤色化

截竹管状工具の平行沈線で施文しており、阿玉台Ⅲ式に比定されようか。

46～48は爪形文の脇に小繋ぎ状の波状沈線を施文するもので、勝坂式中段階の藤内式期に比定されよう。49は口縁部に眼鏡状把手が付き、左側に流れる蛇体の蛇行隆帯を施文する。55は内湾して開く口縁部に、細かな押引爪形文を口縁部に施文し、方形の区画文で口縁部を区画している。円形文を施文する方形区画文は67にも施文されており、藤内式の新しい段階に比定されるものと思われる。73は半隆帯の区画に沿って細かな刻みを施すもので、地文に単節LR縄文を縦位施文する。藤内式であろう。

50～54、56、58～70は勝坂式新段階から終末段階の土器群で、大半は終末段階であろう。50は多喜窪タイプの器形を呈し、幅広の無文部が内湾し、口縁部に低平な隆帯でモチーフを描き、隆帯には交互刺突を施している。60、61も同様な器形の口縁部である。58、59は無文の口縁部が開き、頸部で括れる器形である。

62、63は多喜窪タイプの張り出した底部で、交互刺突を施す隆帯や、背割隆帯で楕形状の区画文を施す。64は胴部破片で、地文に細密な撚糸文Lを施文し、押圧を施した隆帯を垂下する。

65、66、68～70は円筒形土器での胴部破片

である。65は口唇部から蛇体状の隆帯を垂下させる。66は平行沈線で規矩形のモチーフを描く。68～70は刻みや押圧を施した隆帯でモチーフを描いている。68の地文は0段多条RLの縦走縄文である。

71は4単位の波状口縁で頸部が括れ、胴部が張る深鉢である。口縁部に交互刺突を施す隆帯を波状に巡らし、地文に撚糸文Lを施文する。

72は加曽利E式の隆帯渦巻文である。地文に撚糸文Lを施文する。加曽利E I式であろう。

74、75は底部破片で、74は単節RLの横位施文、75は0段多条RLの縦走縄文である。

76～79は口縁部の内湾する浅鉢で、78は鉢に近い。77は胴部に低平な隆帯のモチーフを有する。

土製品は80～85で、80はミニチュア土器である。「ハ」字状刻みを有する隆帯で縦位区画と円形文、三角形文を施文する。縦位区画隆帯の間には、押引刺突文を2列垂下する。

81～85は土器片を利用した土製円盤である。

石器は86～98が出土した。

86～88は石鏃である。87は先端及び脚部が幅広く、未成品の可能性はある。正面左脚部が欠けたことにより、製作途中で廃棄されたのであろうか。88は両側縁が鋸歯状で、先端が欠損している。89は石鏃の未成品である。先端と下部の欠損によ

り廃棄されたと思われる。

90、91は粗粒の石材を用いたスクレイパーである。ともに両側縁に抉りを有する。特に91は抉りが深く、大形粗製石匙の可能性もある。

92～96は打製石斧である。92は両刃で短冊形を呈する。93～95が撥形を呈し、刃部は93、95が両刃、94が片刃である。96が分銅形を呈し、刃部は両刃である。

97は礫器である。

98は磨石で、周縁には整形が施されている。

第53号住居跡（第399図～第419図）

I・J-21・22区に位置する。西側で第54号住居跡と一部重複するが、本住居跡の方が新しい。また、第56号集石土壇、第57号集石土壇、第58号集石土壇の3基は、本住居跡の覆土中に構築されている。

住居跡の平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈し、規模は長径6.0m、短径5.5m、深さ0.6mを測る。

壁溝は検出されず、壁は床面から皿状に緩く立ち上がる。壁の立ち上がりに沿って、小さなピットが巡る。

柱穴は壁際の小ピットを含めて32基検出された。支柱穴と思われる柱穴は、重複や集中しておよそ6箇所に分かれて存在していることから、何度かの建て替えが行われ、ほぼ北方向に主軸を有する6本支柱の住居跡であることが想定される。

柱穴は重複関係や覆土、配置などから、少なくとも2組のまとまりが想定される。

最後の住居跡である最新の住居跡の柱穴は、P10、11、1、3、4、9の6基で、6本支柱の住居跡が想定される。

さらにこれらの柱穴と重複する柱穴として、古い段階の柱穴を抽出すると、P32、12、2、3、5、8が相当する。ただし、P3が新しい住居跡と兼ねていることを前提とする。やはり6本支柱の住

居跡が想定される。

新旧の柱穴群は大きくずれることなく建て替えが行われているものと思われるが、まだ組み合わない柱穴もあるため、少なくとも1回以上の建て替えがあり、2軒以上の住居跡が構築されていたと判断される。

支柱穴の深さは、P1=66cm、P2=64cm、P3=87cm、P4=60cm、P5=61cm、P8=50cm、P9=66cm、P10=67cm、P11=80cm、P12=70cm、P32=60cmである。

炉跡は住居跡中央部に、重複しながら3基が検出された。いずれも地床炉であるが、最も新しい炉1は、入り口方向に推定される南側に横長の大きな礫を設置していた。勝坂式期のやや古い時期に特有な炉の形態であろうか。本遺跡の中で類例が多い。

炉の規模は、炉1が長径54cm、短径47cm、深さ11cmの隅丸形状である。炉2は長径45cm、短径32cm、深さ10cmの楕円形である。炉3は長径40cm、短径34cm、深さ9cmのほぼ円形である。

埋甕は検出されなかった。

遺物は覆土中層から上層にかけて、復元される土器群が、いわゆる吹上パターン状態で多量に出土した。

住居跡付属の土器がないため時期を決めかねるが、本住居跡は覆土中の土器群から勝坂式の中段階期から新段階期にかけての所産と推定される。

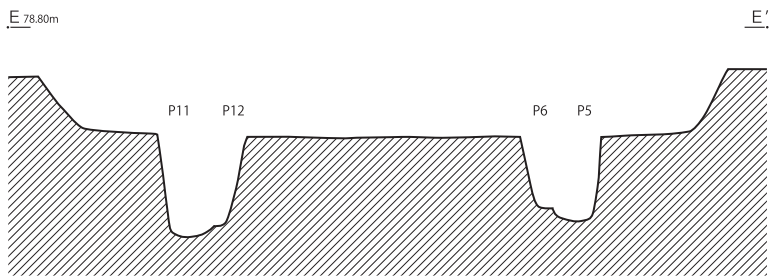
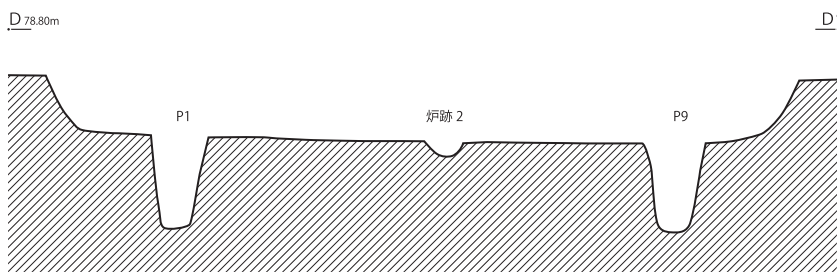
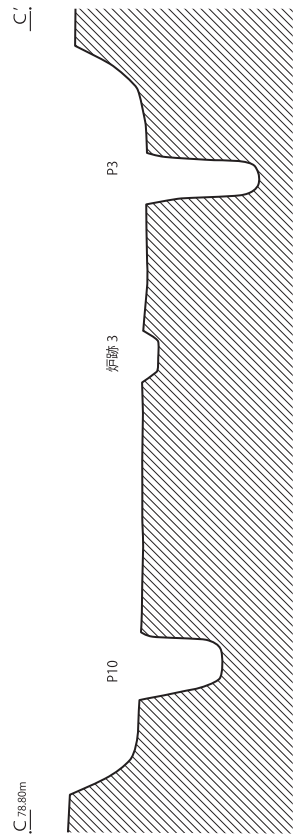
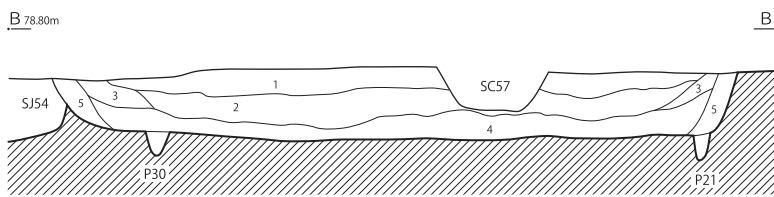
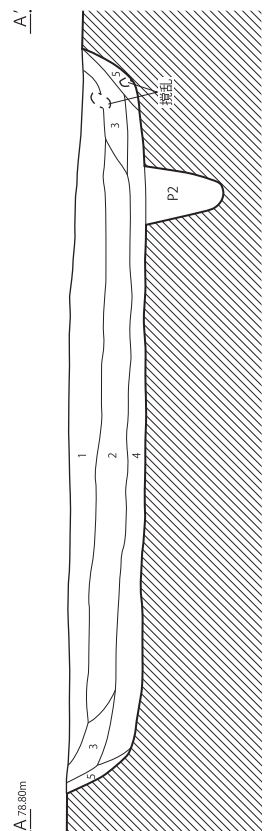
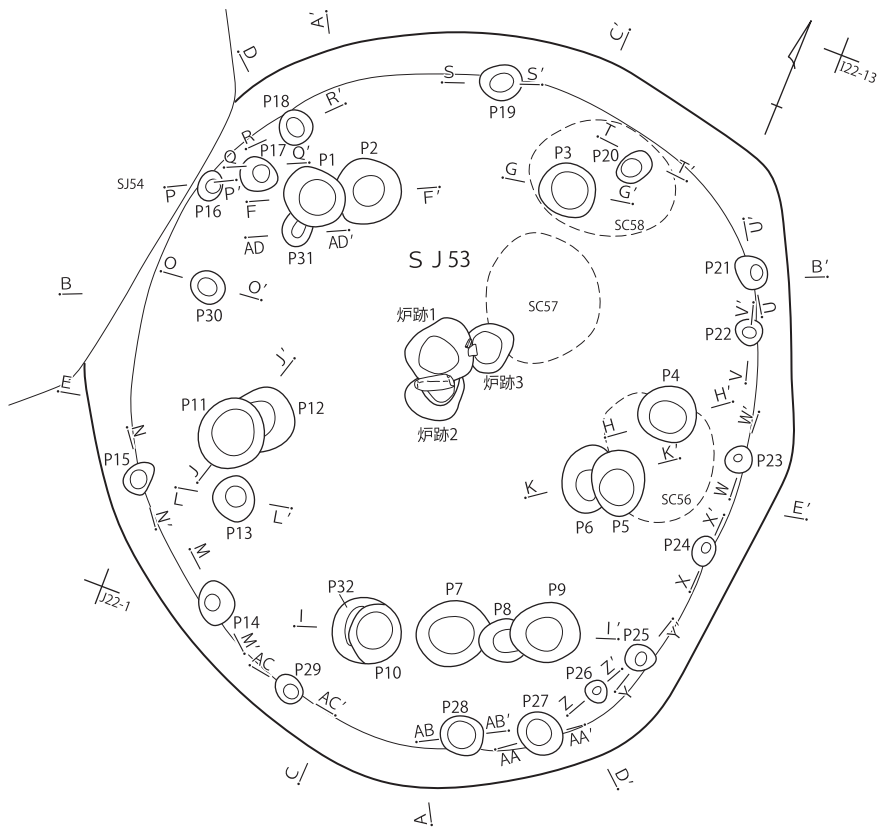
遺物は第406図1～第419図115の土器類、石器類が出土した。

土器は1～83である。

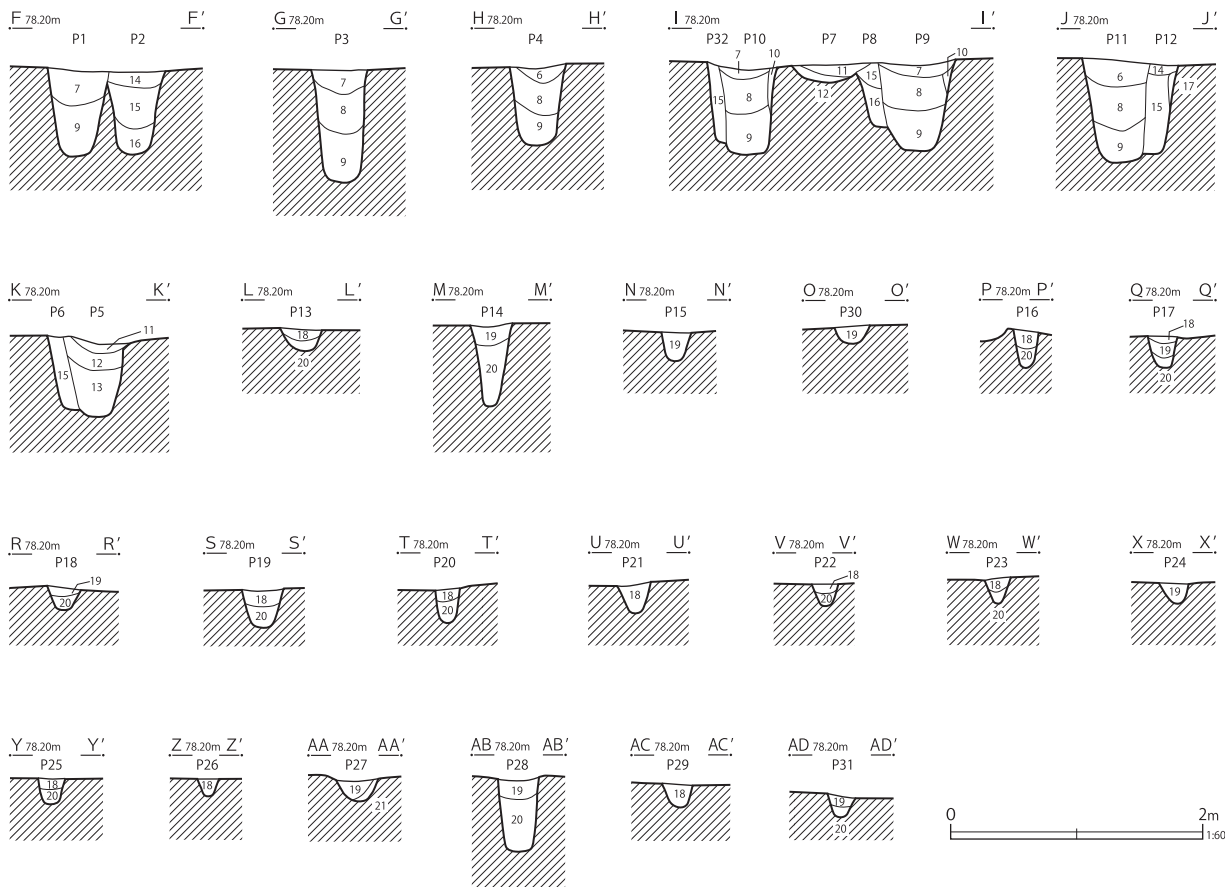
破片では、45、46はP1、47はP3、48はP4、49はP6、50はP8、51、52はP12、53はP13、54はP17、55はP28から出土した。

1～6は内湾する口縁部が開き、頸部で括れるキャリパー形深鉢土器で、口縁部文様帯を有する土器群である。

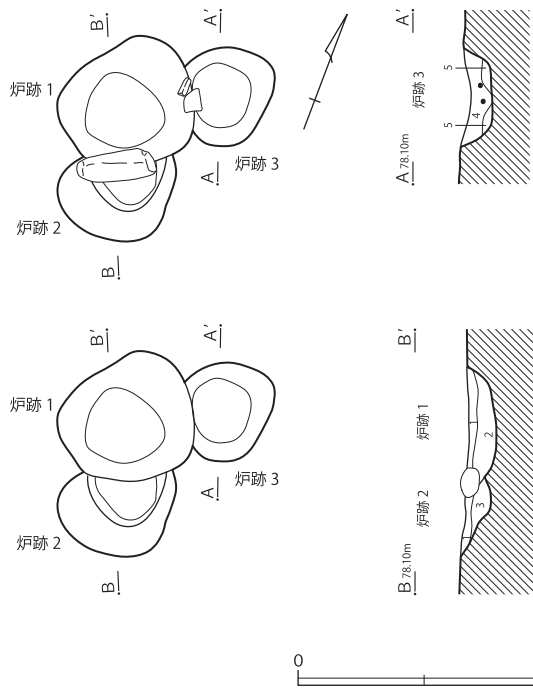
1は口唇部に大きな山形の眼鏡状把手を有し、



第399图 第53号住居迹 (1)

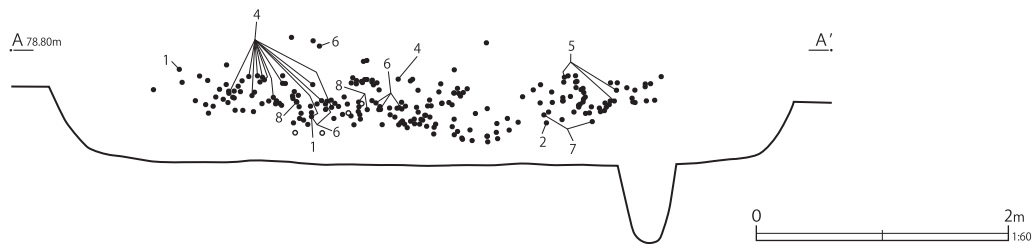
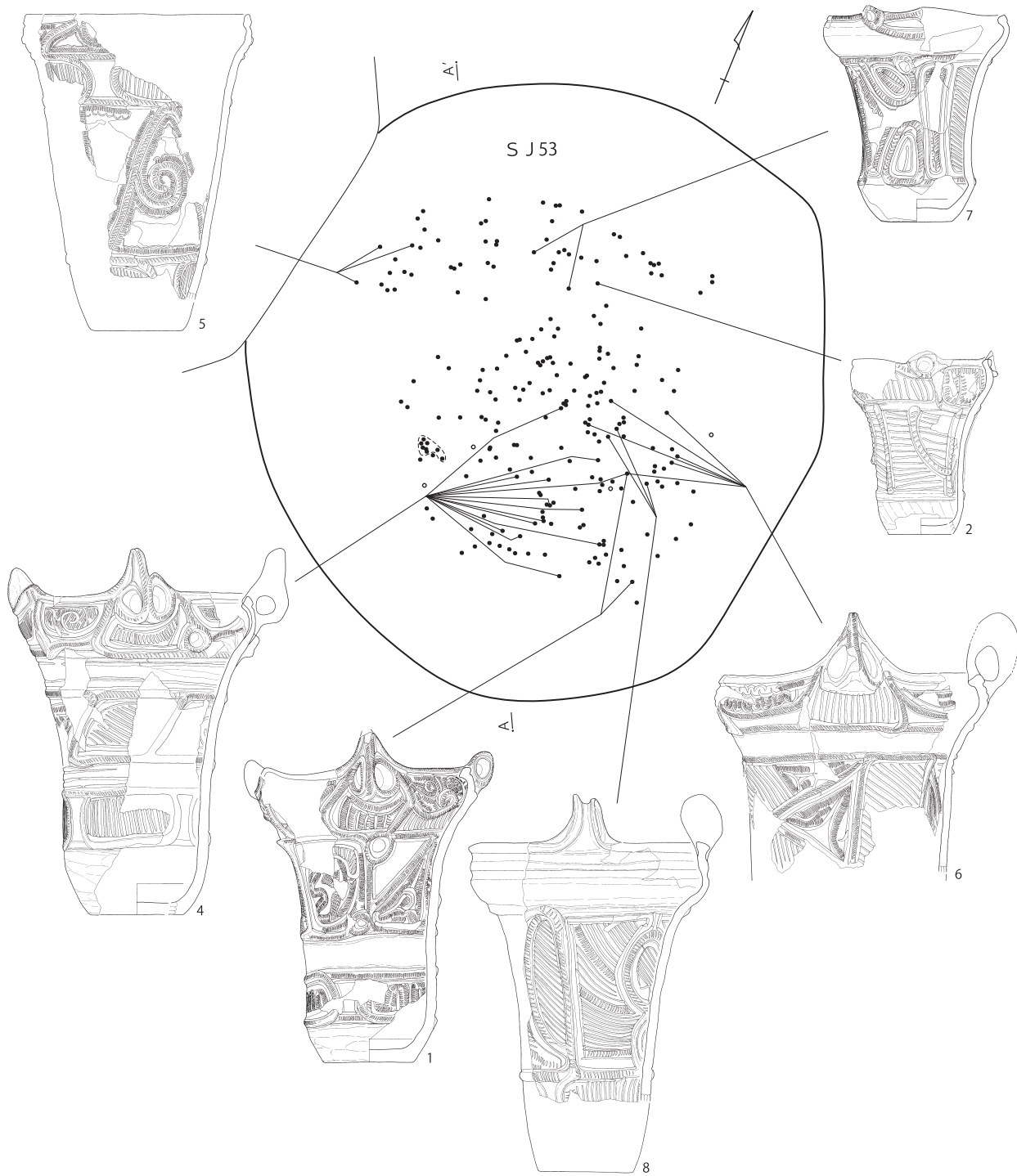


炉跡 1 ~ 3

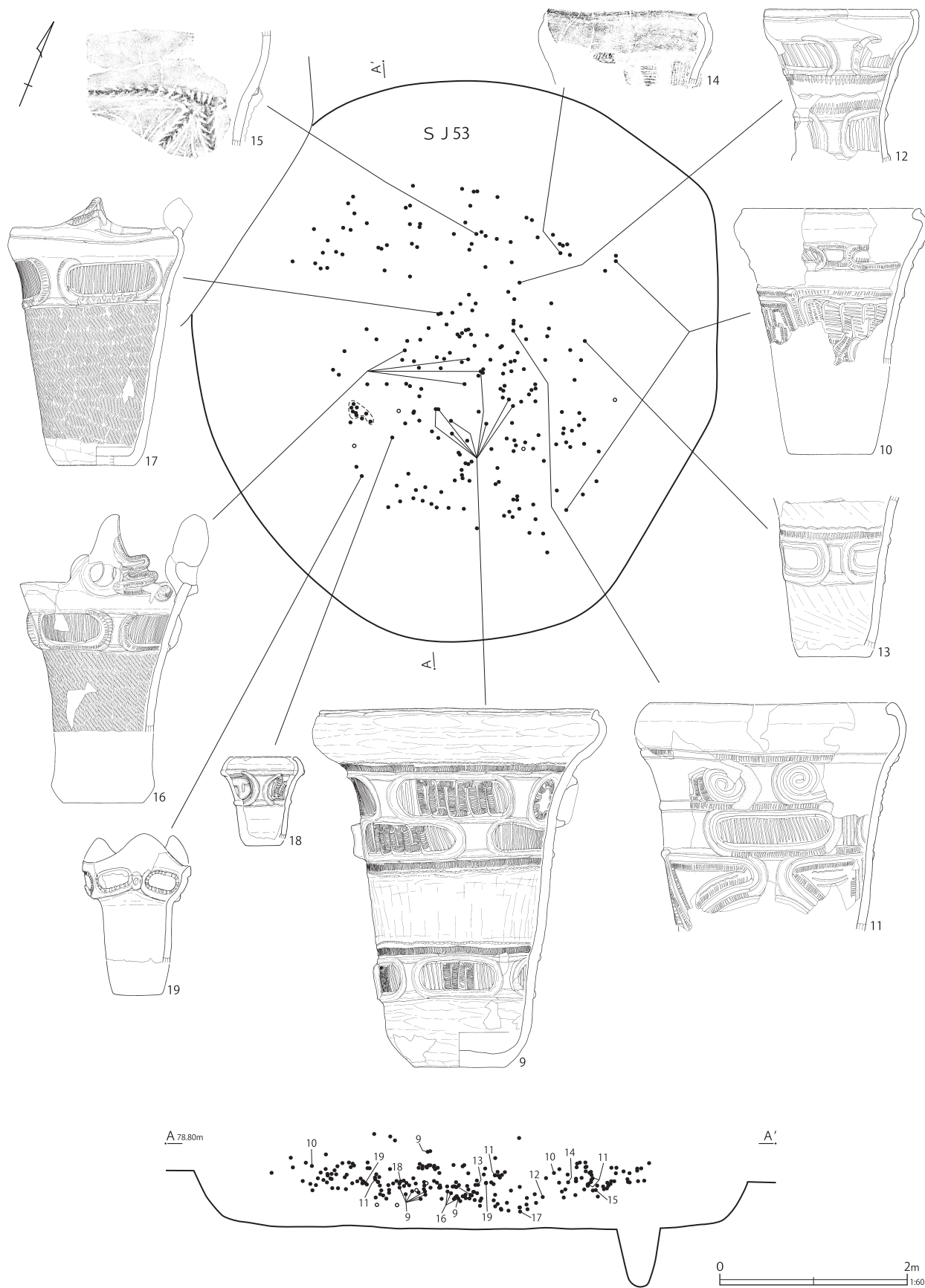


- S J 53
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 焼土粒子微量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 炭化物少量 焼土粒子微量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 焼土粒子微量
 - 5 褐色土 ローム小ブロック微量 ソフトローム多量
- S J 53 ビット
- 6 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少量 焼土粒子微量
ブロック状の暗褐色土少量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック微量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量
 - 9 暗褐色土 ローム粒子多量 粘性あり
 - 10 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量
 - 11 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック・炭化物微量
 - 12 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量 (埋戻し)
 - 13 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ソフトローム多量 (埋戻し)
 - 14 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
ローム小ブロック少量 炭化物微量
 - 15 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック・炭化物微量
 - 16 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 粘性あり
 - 17 暗黄褐色土 ローム粒子・小ブロック多量
 - 18 暗褐色土 ローム粒子多量 ローム小ブロック少量
 - 19 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
 - 20 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 - 21 褐色土 ソフトローム主体 ローム粒子多量 炭化物少量
- S J 53 炉跡
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物微量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量
 - 4 暗褐色土 被熱したロームブロックを充填している
 - 5 黄褐色土 被熱したロームブロックを多く含む

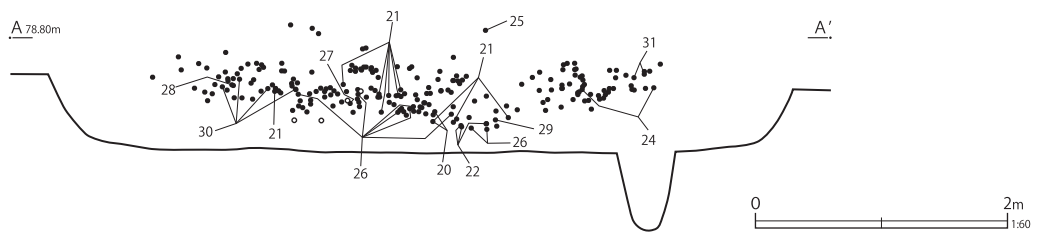
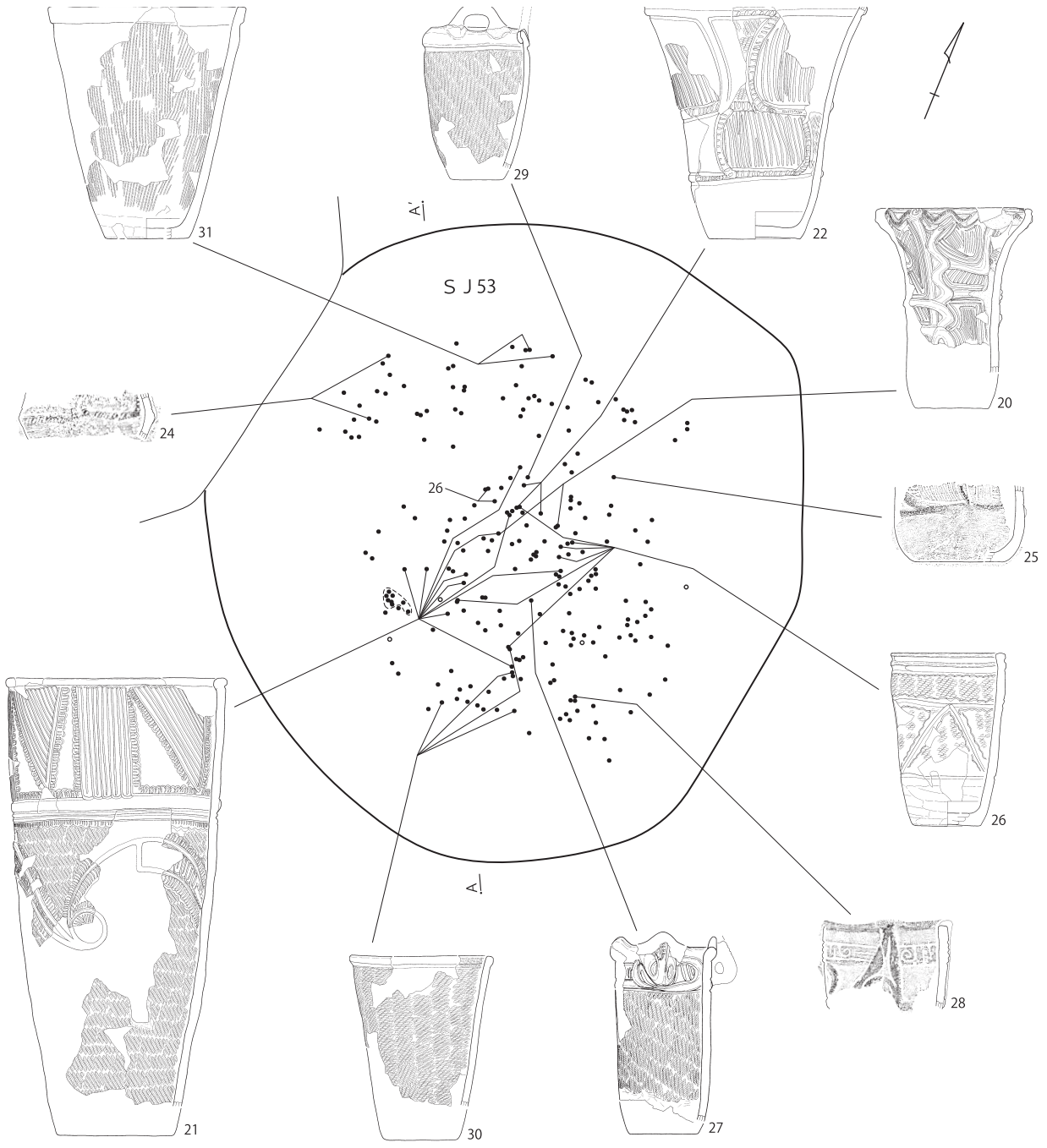
第400図 第53号住居跡 (2)



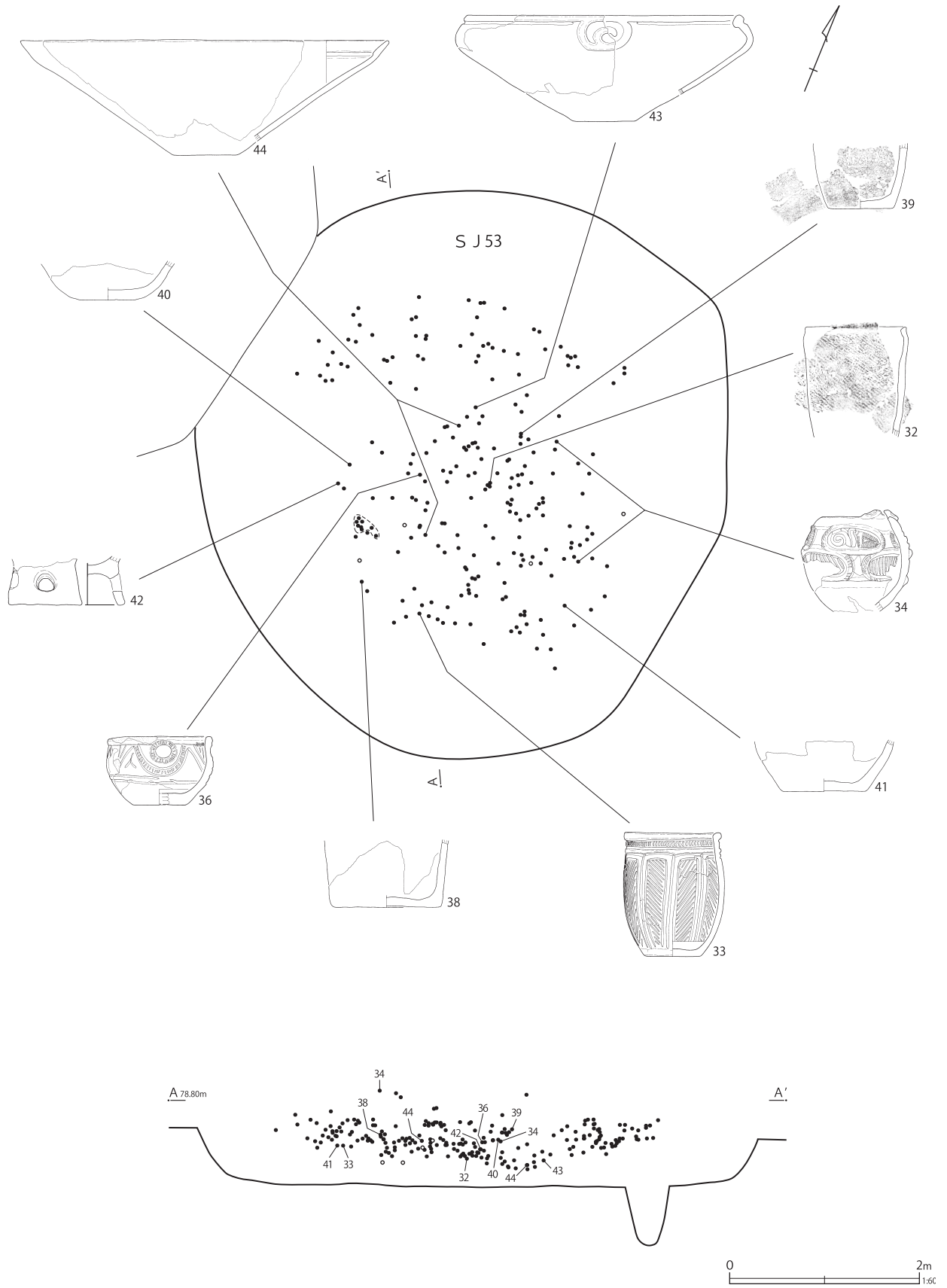
第401图 第53号住居跡遺物出土状況 (1)



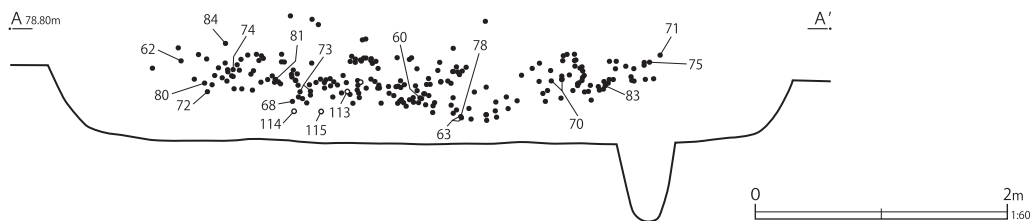
第402図 第53号住居跡遺物出土状況（2）



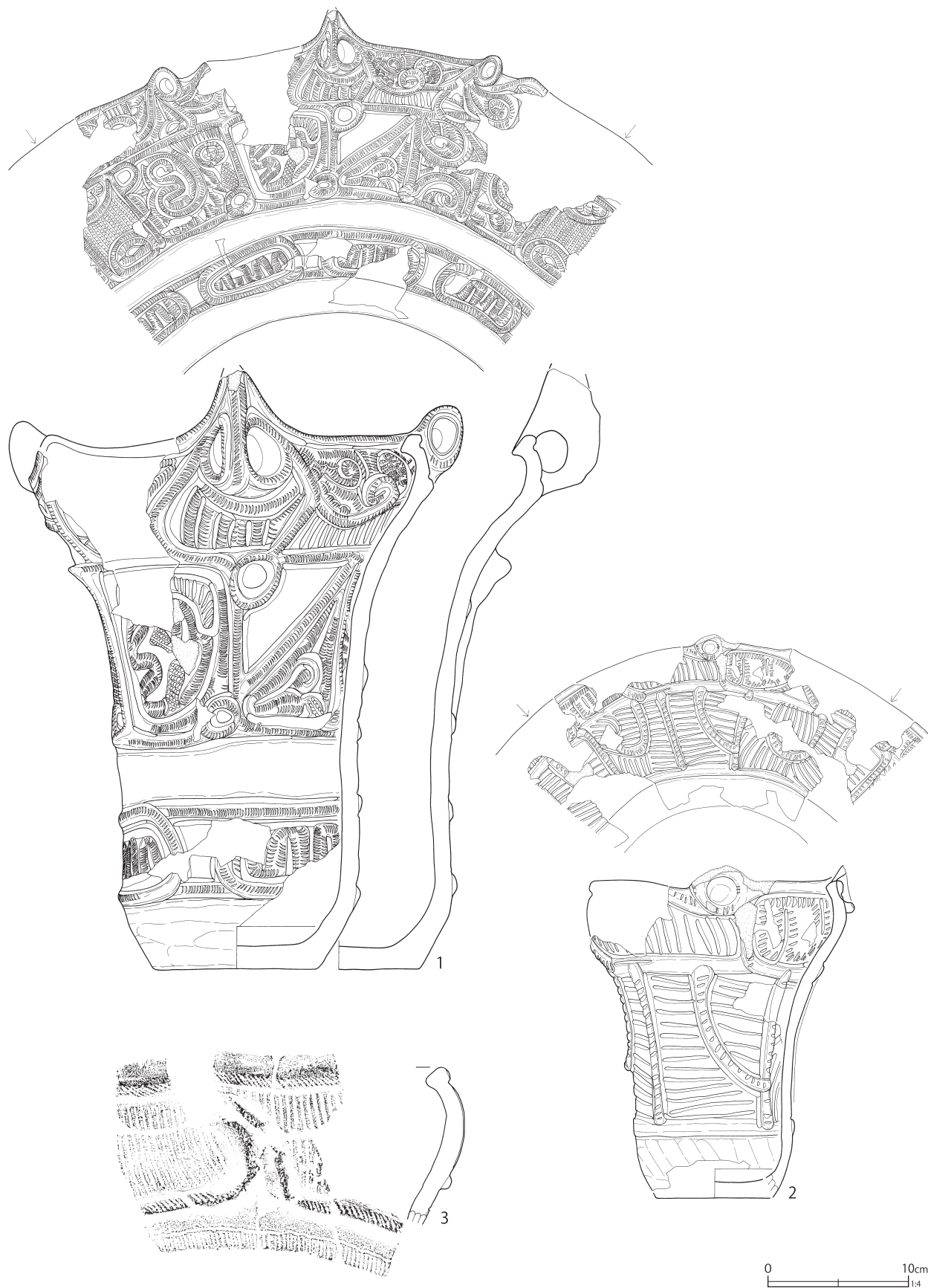
第403图 第53号住居跡遺物出土状況(3)



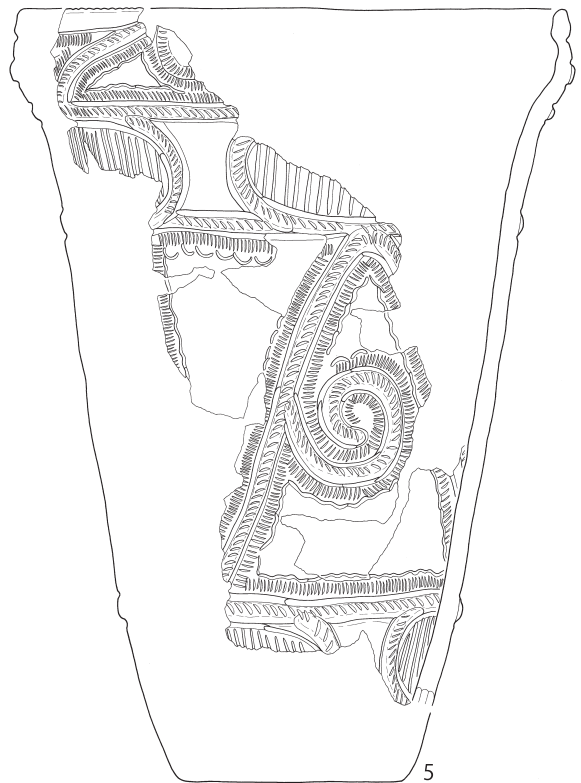
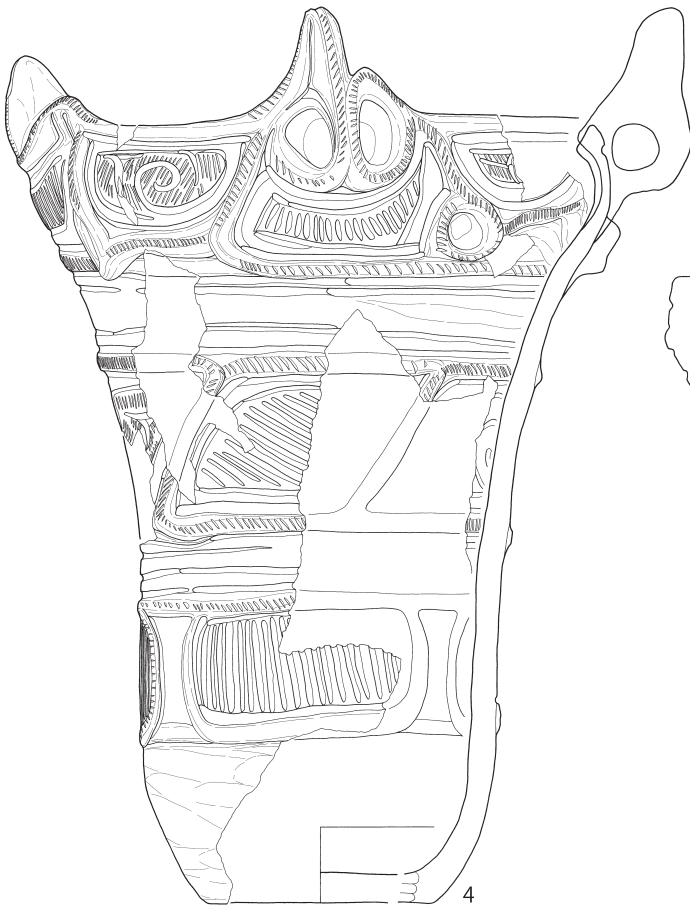
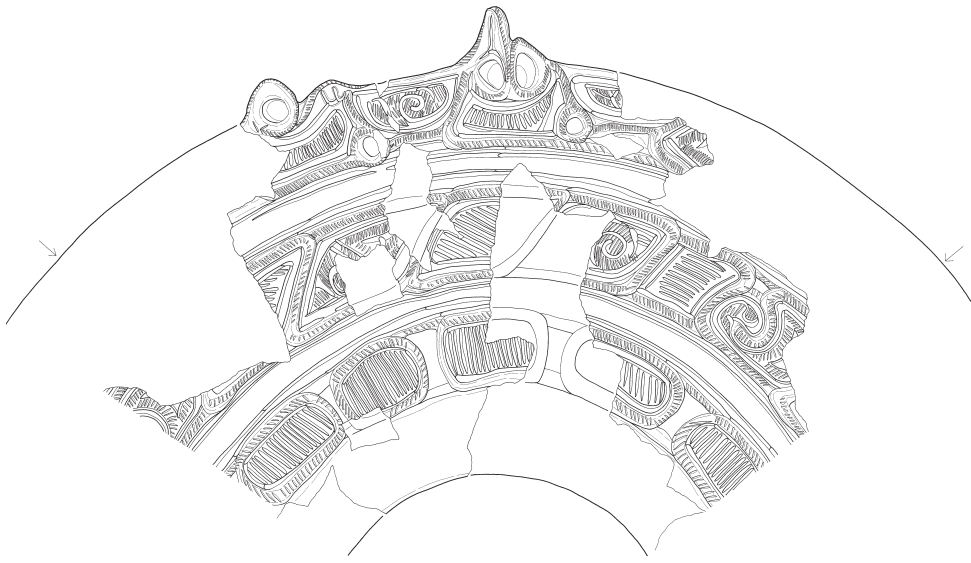
第404図 第53号住居跡遺物出土状況（4）



第405图 第53号住居跡遺物出土状況 (5)

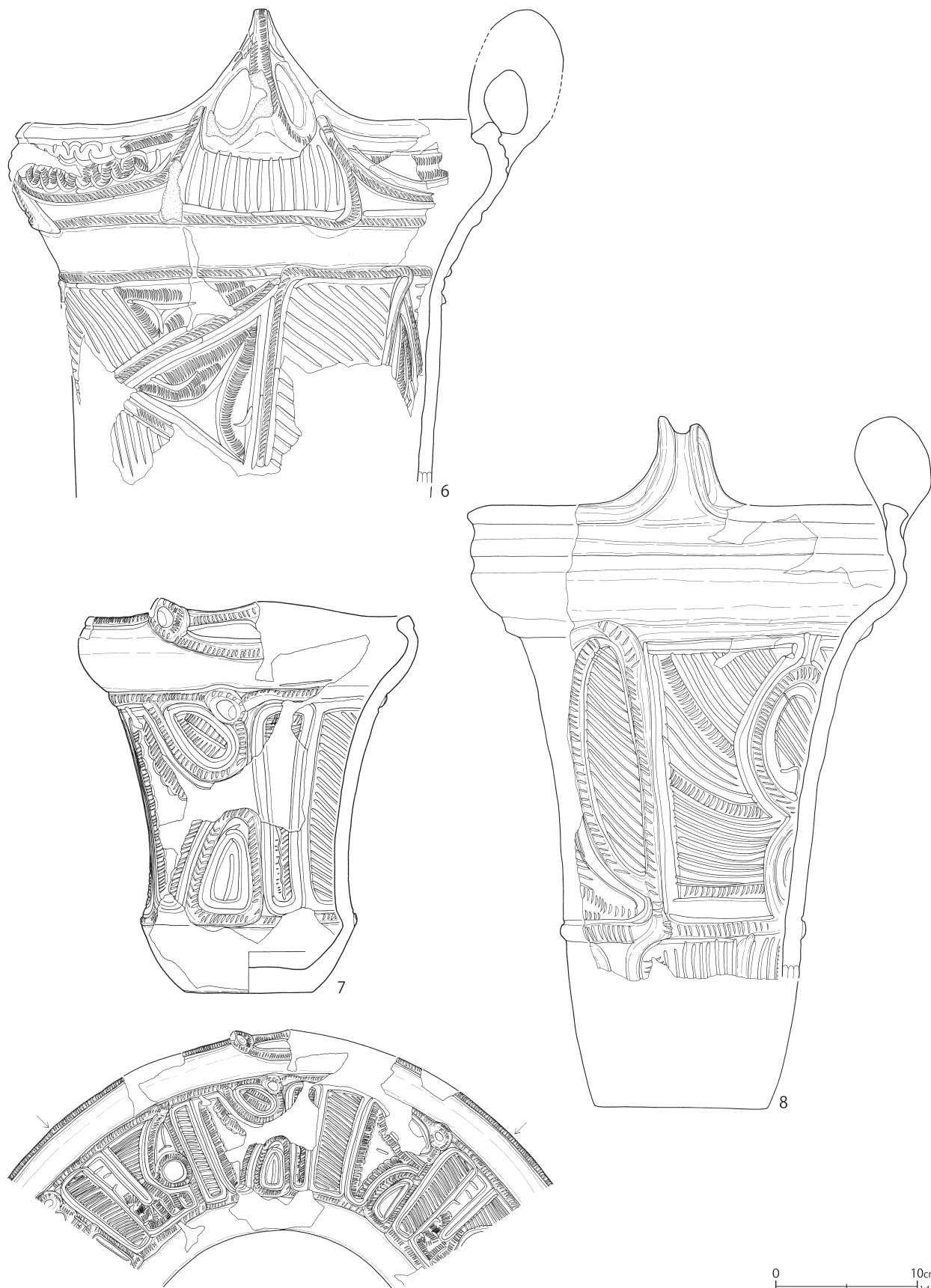


第406図 第53号住居跡出土遺物（1）

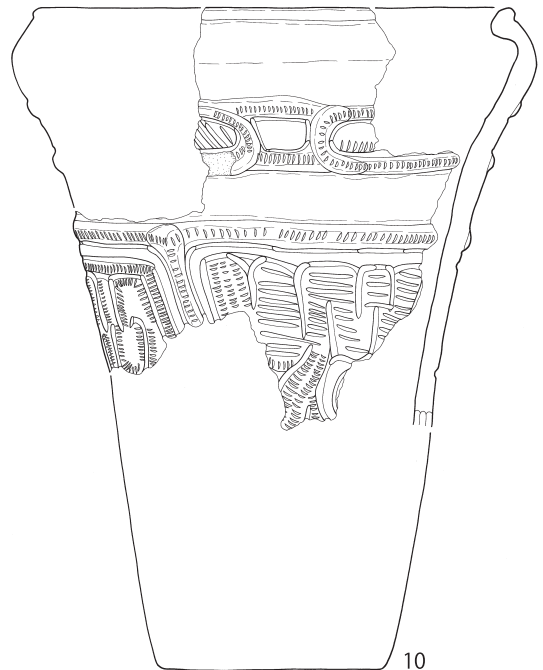
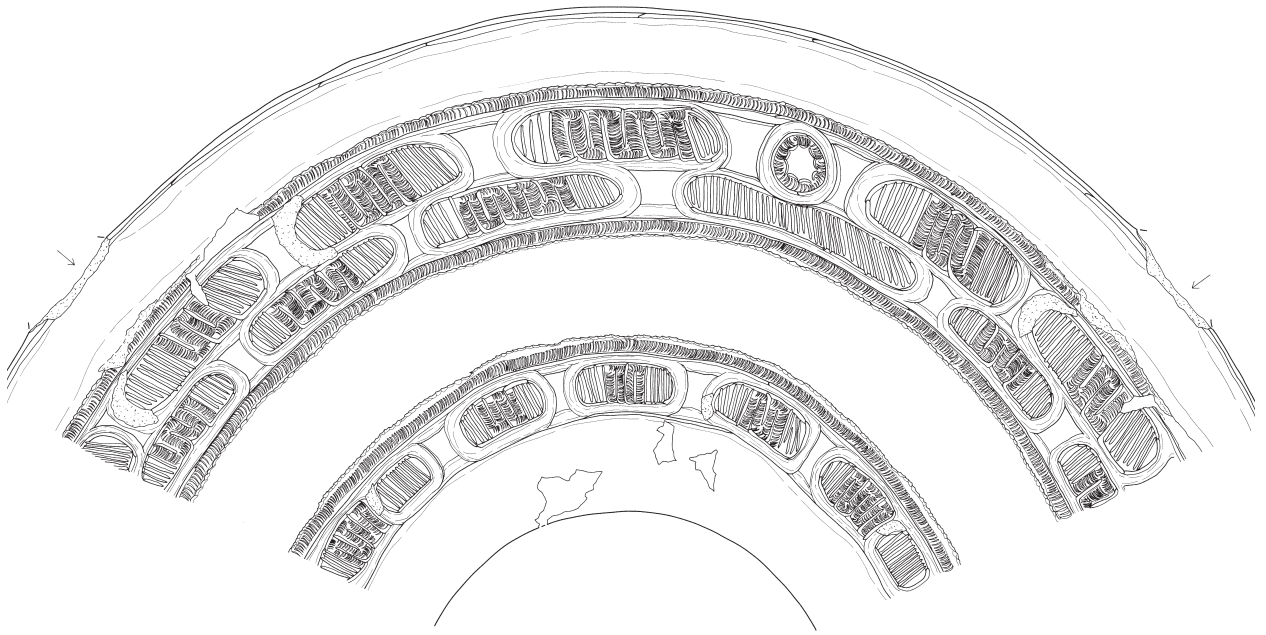


0 10cm
1:4

第407図 第53号住居跡出土遺物（2）

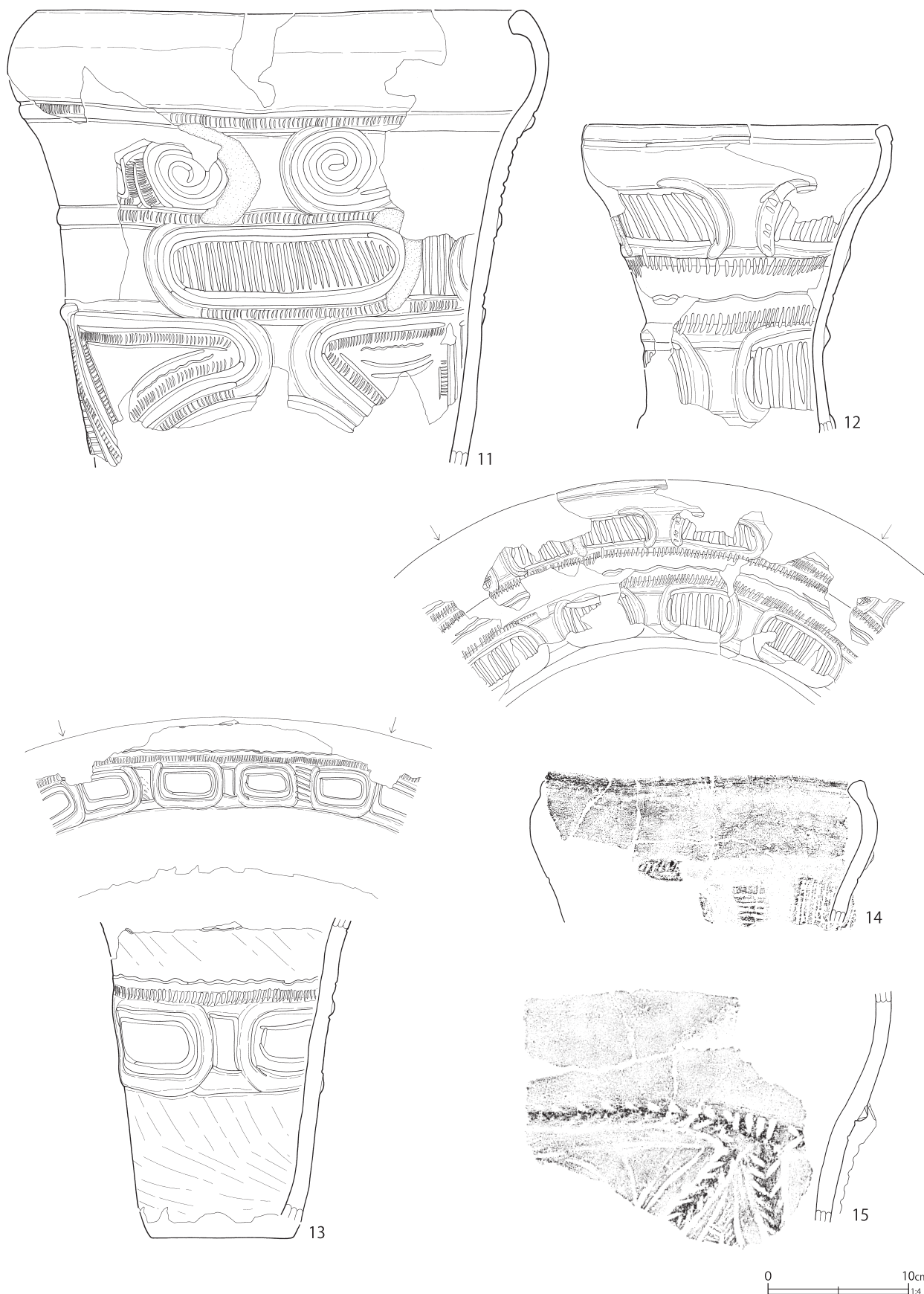


第408図 第53号住居跡出土遺物(3)



0 10cm
1:4

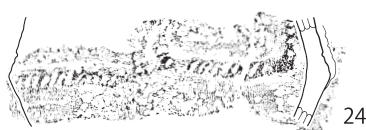
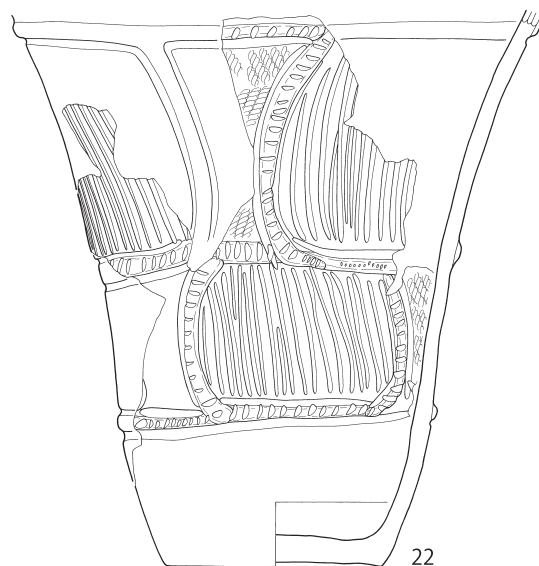
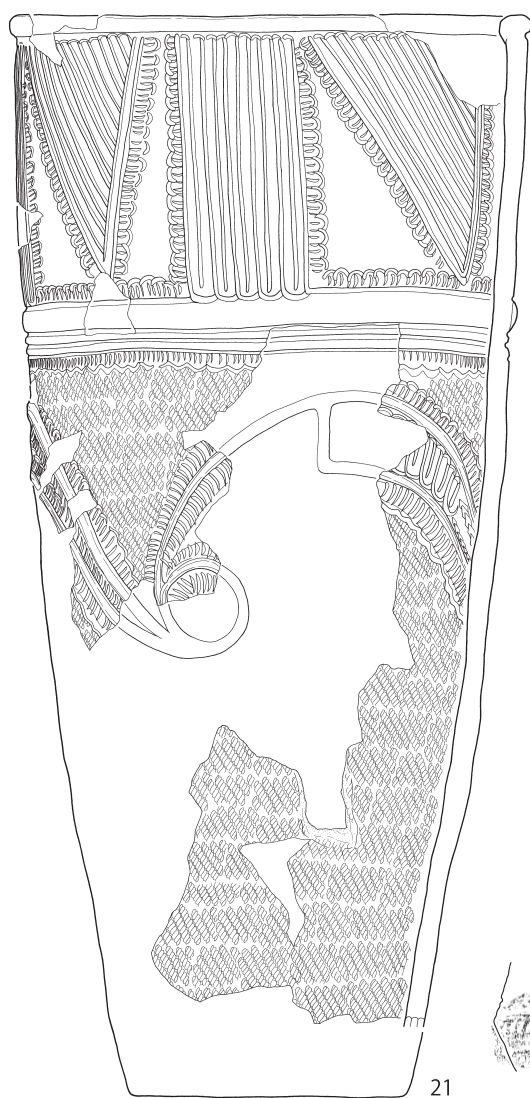
第409图 第53号住居跡出土遺物(4)



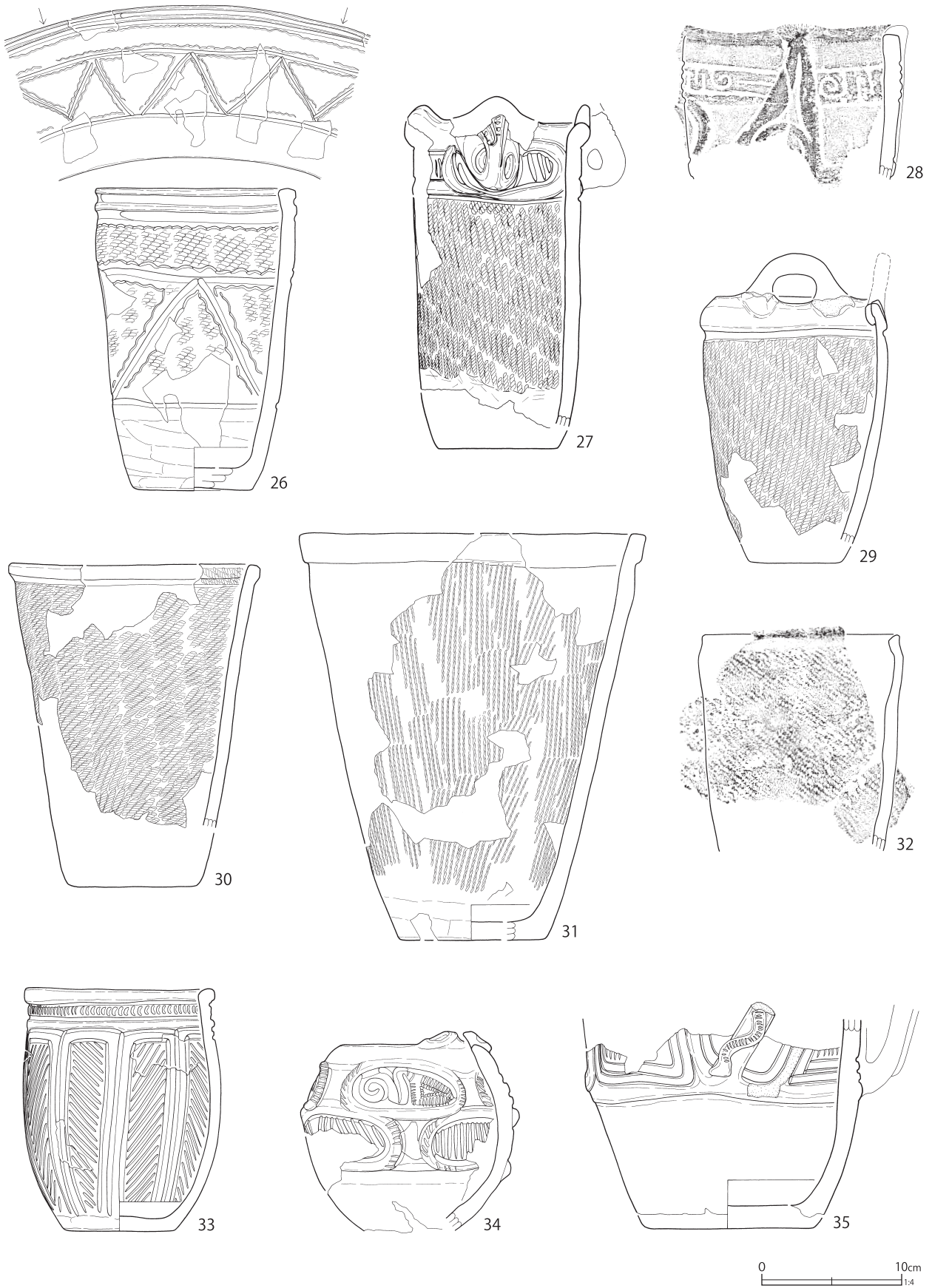
第410図 第53号住居跡出土遺物（5）



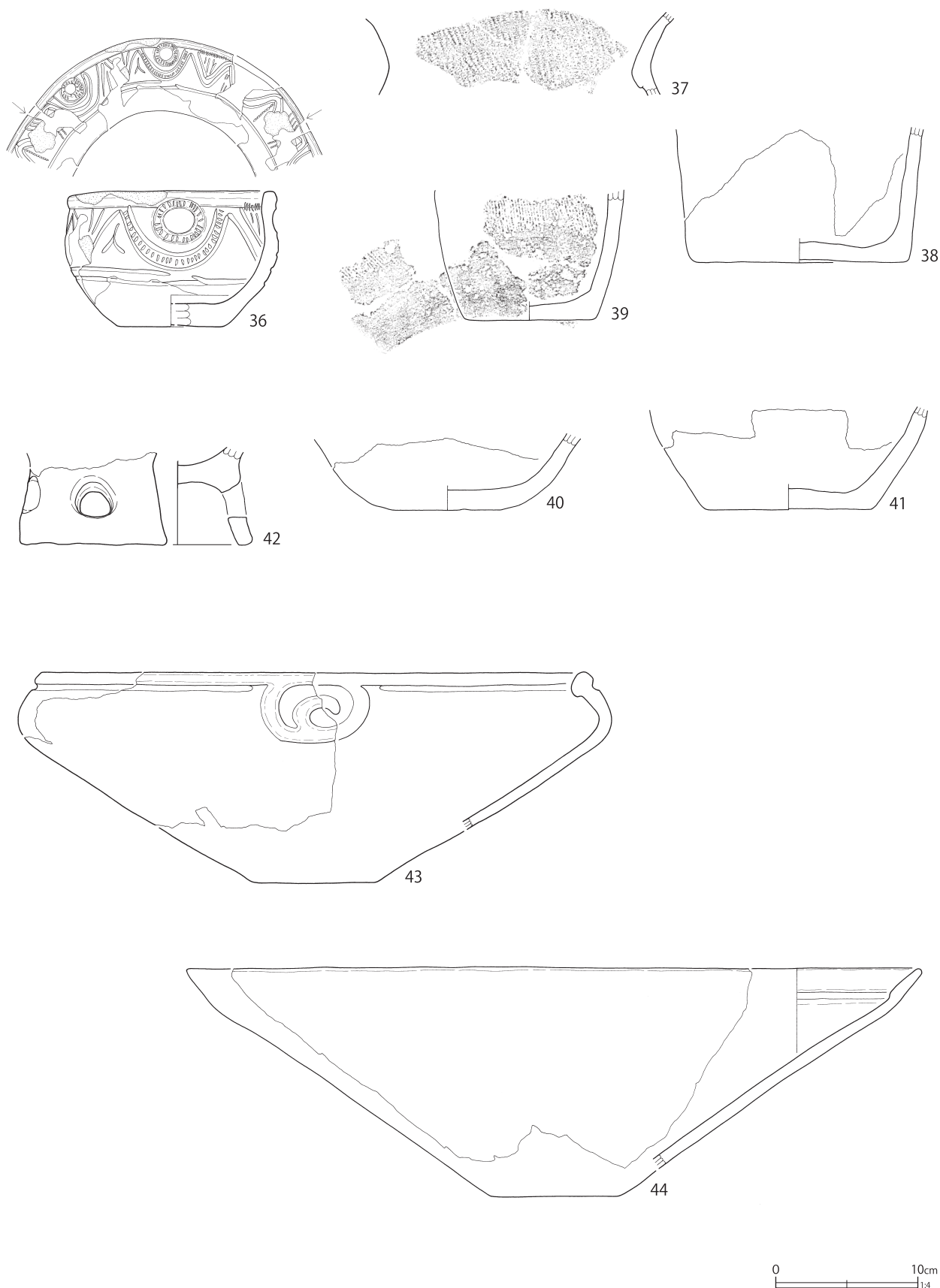
第411图 第53号住居跡出土遺物(6)



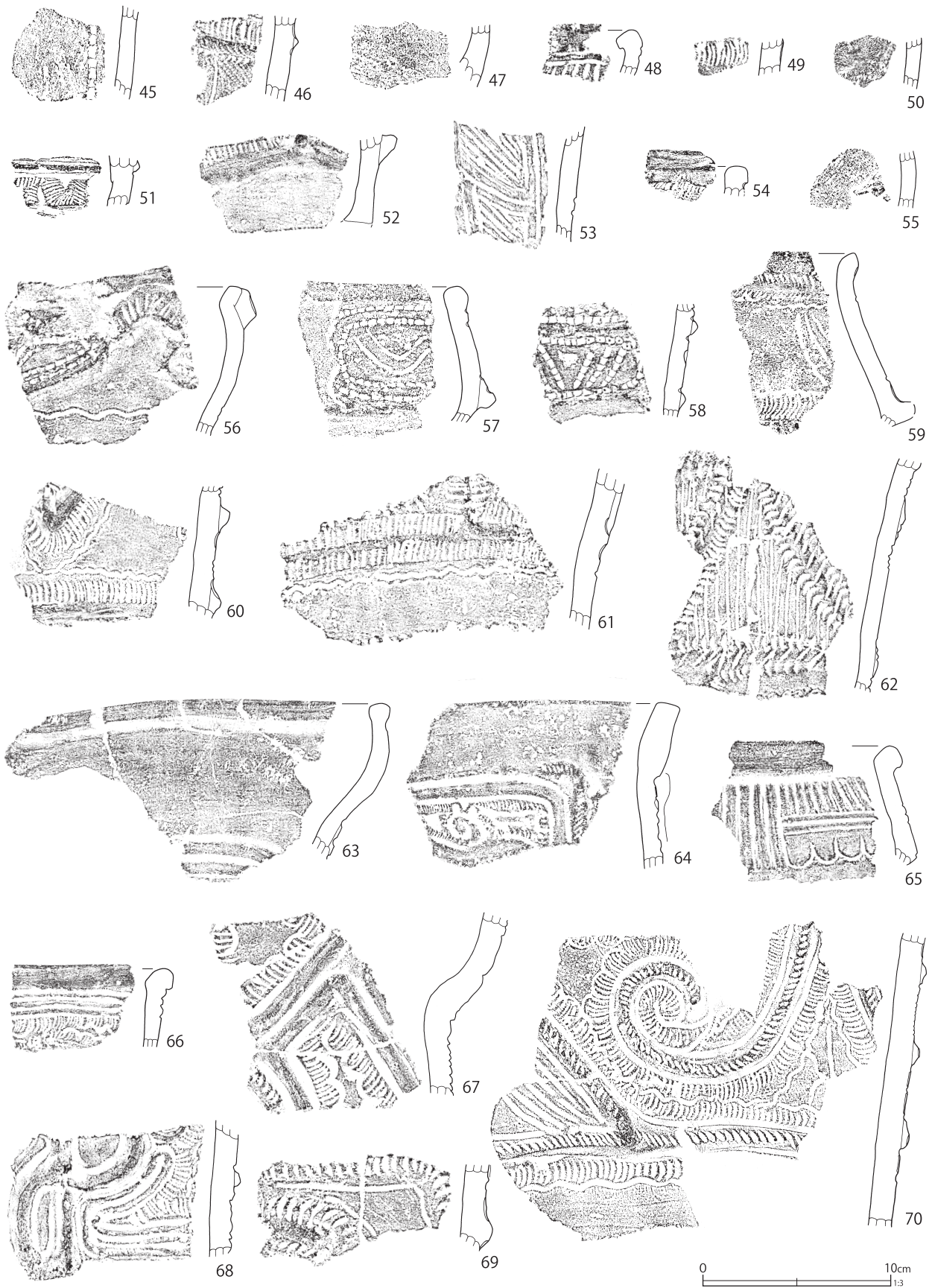
第412図 第53号住居跡出土遺物（7）



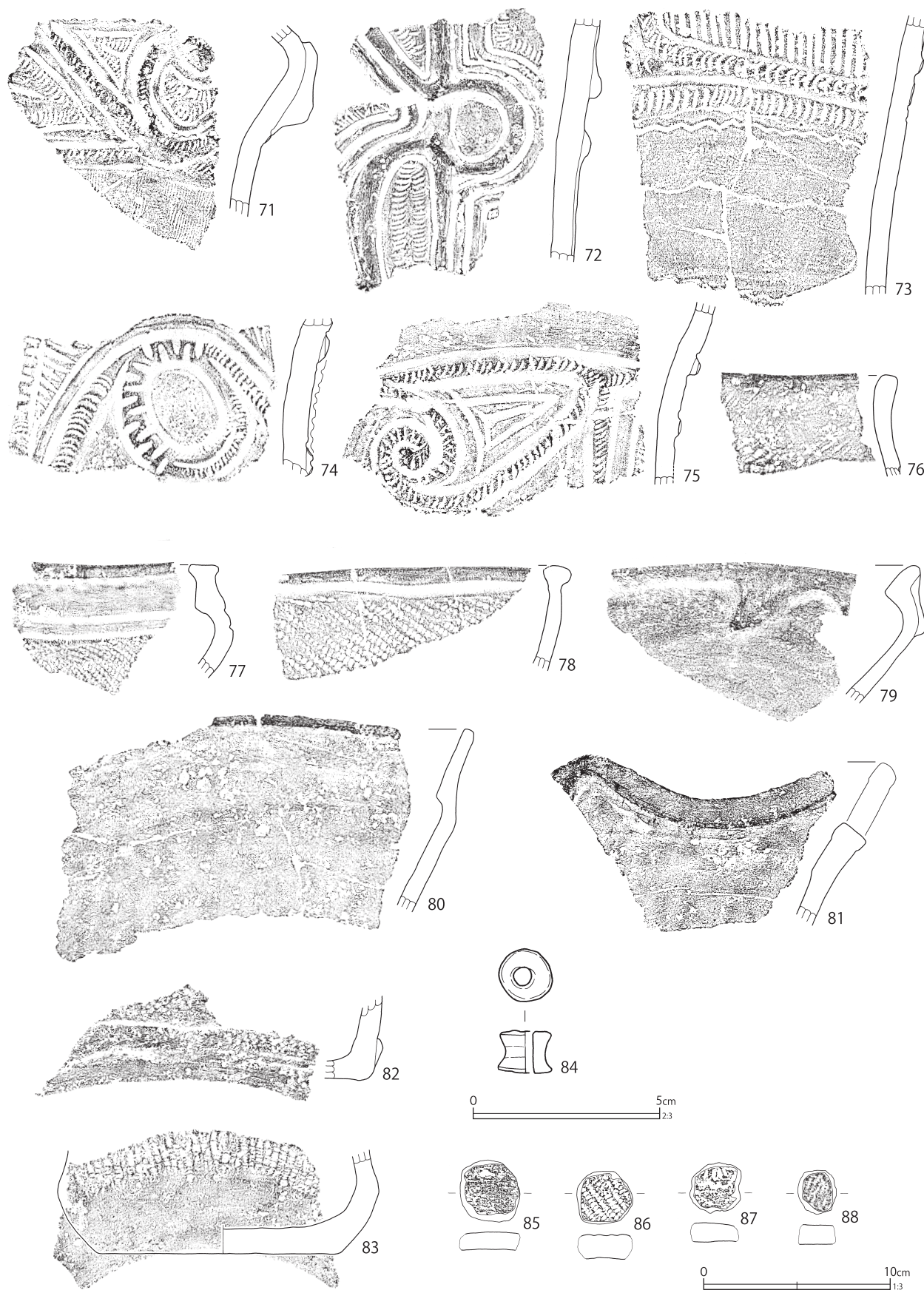
第413图 第53号住居跡出土遺物(8)



第414図 第53号住居跡出土遺物(9)



第415图 第53号住居跡出土遺物 (10)



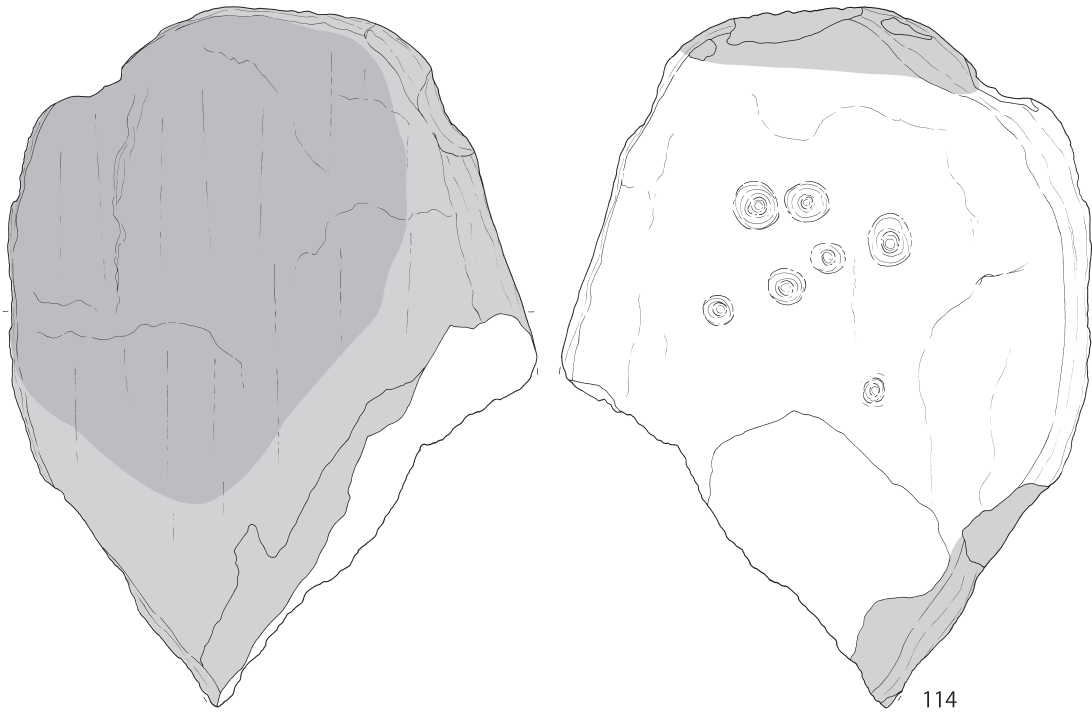
第416図 第53号住居跡出土遺物 (11)



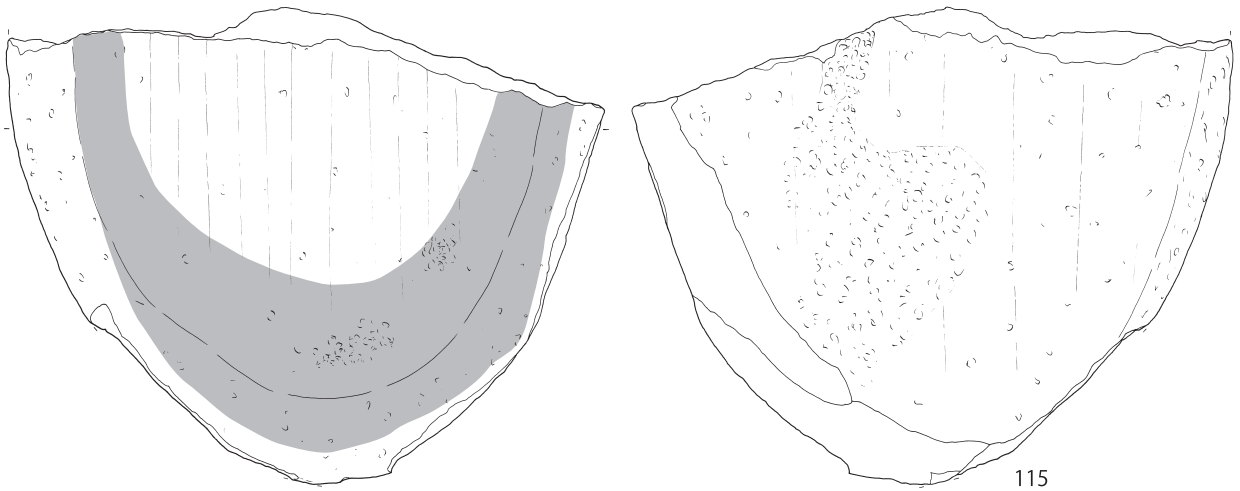
第417图 第53号住居跡出土遺物 (12)



第418図 第53号住居跡出土遺物 (13)



114



115

赤色化 黑色化

0 10cm
1/3

第419図 第53号住居跡出土遺物 (14)

第167表 第53号住居跡柱穴計測表 (第399・400図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)
P 1	50.0	66.0	P 2	52.0	64.0	P 3	45.0	87.0	P 4	46.0	60.0	P 5	52.0	61.0
P 6	53.0	56.0	P 7	60.0	14.0	P 8	34.0	50.0	P 9	62.0	66.0	P 10	48.0	67.0
P 11	55.0	80.0	P 12	50.0	70.0	P 13	35.0	16.0	P 14	33.0	62.0	P 15	27.0	21.0
P 16	24.0	29.0	P 17	31.0	25.0	P 18	27.0	15.0	P 19	33.0	29.0	P 20	29.0	27.0
P 21	27.0	22.0	P 22	21.0	17.0	P 23	24.0	20.0	P 24	20.0	15.0	P 25	24.0	19.0
P 26	18.0	13.0	P 27	38.0	15.0	P 28	33.0	55.0	P 29	24.0	17.0	P 30	27.0	14.0
P 31	28.0	17.0	P 32	52.0	60.0									

第168表 第53号住居跡出土復元土器観察表 (第406～414図)

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考	番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
406-1	42.5	26.8	-	11.4	70%	412-23	[5.5]	-	(20.9)	-	10%
2	[22.5]	(16.0)	-	(8.4)	70%	24	[5.8]	-	(17.0)	-	10%
3	[11.1]	-	-	-	20%	25	[9.4]	(15.9)	-	(10.9)	20%
407-4	47.3	(28.4)	-	11.8	60%	413-26	21.6	14.2	-	8.4	90%
5	[36.7]	(28.6)	(29.2)	-	40%	27	22.9	(13.2)	-	-	70%
408-6	[33.5]	(33.0)	(35.4)	-	40%	28	[10.9]	(15.4)	-	-	10%
7	27.9	22.6	-	7.8	80%	29	[17.8]	11.6	-	-	80%
8	[39.8]	(31.0)	-	-	70%	30	[18.7]	(17.9)	-	-	70%
409-9	51.0	38.4	-	12.8	完形	31	29.1	(24.7)	-	10.4	40%
10	[22.3]	(24.8)	(27.6)	-	30%	32	[15.5]	(13.8)	-	-	20%
410-11	[32.4]	(34.6)	-	-	30%	33	17.3	13.4	-	7.8	50%
12	[21.6]	(21.4)	-	-	60%	34	[14.4]	(9.4)	-	-	50%
13	[21.4]	-	17.8	-	50%	35	[15.1]	-	(19.6)	(11.8)	40%
14	[10.1]	(22.4)	-	-	20%	414-36	9.5	14.6	-	7.4	80%
15	[15.8]	-	-	-	20%	37	[5.8]	-	(21.7)	-	10%
411-16	[28.2]	24.2	-	-	60%	38	[9.5]	(17.3)	-	(15.2)	20%
17	38.1	23.6	-	10.8	完形	39	[9.1]	(13.2)	-	(9.0)	20%
18	[11.6]	(9.2)	(11.6)	-	40%	40	[5.3]	(18.6)	-	(7.6)	10%
19	[15.7]	(15.2)	-	-	60%	41	[7.0]	(19.5)	-	(11.6)	20%
20	[17.4]	(19.4)	-	-	50%	42	[6.8]	-	-	-	30%
412-21	[53.3]	(27.4)	-	-	50%	43	[11.1]	(37.8)	-	-	30%
22	[29.0]	-	(27.9)	11.2	40%	44	[16.0]	(51.6)	-	(9.0)	70%

両横に「α」状の非対称の突起を付けているが、後面にどのような把手が付くかは不明である。口縁部文様帯、胴部文様帯、胴部無文帯、底部文様帯の4帯構成の文様帯を有する。口縁部文様帯には、山形把手下に台形状の区画を施し、把手や突起から派生して垂下する渦巻文を横位に連ねるモチーフを刻み隆帯で4単位構成に描いている。モチーフの余白には爪形文を伴う三叉文や集合沈線文、渦巻文等を充填施文する。胴部文様帯は幅広と幅狭合わせて6単位に分割し、渦巻文を中心としてそれぞれ異なった文様を充填している。底部文様帯は4単位の楕円区画文を配し、区画内には

蛇行する爪形文を施文する。

2は欠損部が多く、口縁部の文様構成を把握しきれないが、楕円区画文と爪形文を伴う区画文を4単位に配するものと思われる。胴部は垂下隆帯で4単位に区画し、「U」字状や斜行する隆帯を施文しており、区画内には横位、縦位の集合沈線を施文する。比較的簡素な文様構成である。

3は口縁部に楕円区画文を配し、半截竹管状工具の平行沈線を充填施文する。頸部は小波状沈線文を伴う幅広の爪形文で区画している。口縁部や区画隆帯に細かな刻みを施している。

4は1と類似しているが、頸部に幅狭な無文帯

が加わっている。口縁部は山形の眼鏡状把手1箇所と、「α」状突起を対に施文し、台形状と半円形の区画文を連ねる構成と思われる。胴部文様帯は菱形の区画を中心として6単位に区画し、渦巻文と集合沈線文を交互に施文しているようである。

5は口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯、底部文様帯の4文様帯構成で、無文帯を挟まない構成である。口縁部文様帯は幅狭に区画して渦巻文を繋ぐモチーフを構成すると思われる、頸部文様帯には楕円区画文を配している。胴部文様帯は幅広に区画し、刻み隆帯の鋸歯状区画を施している。この鋸歯状区画隆帯の中央部から隆帯渦巻文を派生させている。サンショウウオ文の胴部文様の構成に通じるものがある。描出隆帯には波状沈線を伴う爪形文が沿う。底部文様帯には楕円区画文を配している。底部を欠損する。

6は頸部無文帯を有するキャリパー形土器で、山形の眼鏡状把手を有し、把手を中心として下部に台形区画、両脇に半弧状の区画文を施している。区画内には列状の爪形文や、コンパス文状の爪形文を施文する。胴部には刻み隆帯で縦位区画を施し、矩形や三角形の区画文を施文する。区画内には集合沈線や、爪形文を伴う三叉文を施文する。胴下半部を欠損する。

7～17は無文の内湾する口縁部が開くキャリパー形深鉢で、口唇部に把手を付けるものが多い。

7は欠損部が多く不明な点があるものの、口縁部の大把手から続く「α」状突起を付け、胴部にパネル文状区画を施しているものと思われる。パネル文状区画は刻み隆帯と並行沈線で施文しており、蓮華状文が伴う区画もある。区画隆帯には部分的に「ハ」字状刻みを施している。

8は下膨れ状を呈する口縁部無文帯に山形状の眼鏡状把手を付け、胴部に楕円形状や「B」字状を呈する大柄な区画文を構成し、底部文様帯に楕円区画文を配している。充填文は全て集合沈線である。底部を欠損する。

9はほぼ完形品である。無文の口縁部が強く開き、筒状の胴部へと移行するキャリパー形深鉢である。口縁部無文帯、頸部文様帯、胴部無文帯、底部文様帯の4帯構成で、頸部文様帯を2帯に分割している。それぞれの文様帯は小波状沈線を伴う爪形文を沿わせる隆帯で区画しており、波状沈線は小繫状を呈する。文様帯は上下で半分ずらず楕円区画文帯であり、頸部文様帯は幅狭な2帯の楕円区画文帯に分かれている。上段は横長の楕円区画文4単位、円形区画文1単位の計5単位構成である。下段は横長の楕円区画文3単位、さらに長い長楕円区画文1単位の計4単位構成である。それぞれの楕円区画文は半分ずれる構成になっており、上段で5単位目となる円形区画文の下部に、下段の長楕円区画文を配しており、単位数と重なりバランスをとっているようである。また、底部文様帯は独立の楕円区画3単位と、2区画の融合した長楕円区画文1単位の計4単位で構成しており、融合区画を2単位とすれば、合計5単位構成となる。いずれも、4単位の中に5単位の性が隠れており、偶数と奇数の調整をはかりつつも、対称性構造を崩していることが理解される。なお、頸部文様帯としたものは、実際は胴部上半の文様帯であるが、頸部文様帯と胴部文様帯が融合した文様帯でもある。楕円区画内には蛇行する爪形文列や集合沈線文を充填施文するが、頸部の円形区画文のみ蓮華状文を施文している。正面観を示しているのであろうか。

10は頸部の括れが弱く、5に類似する器形で、頸部に無文帯を有する。この無文帯の位置は、9の頸部文様帯の下段部分に相当するものと思われるが、文様帯の有様が多彩である。頸部の文様帯には幅狭な楕円区画文を配し、胴部の幅広の文様帯には交互に入り組む沈線文のモチーフを描いている。沈線文には爪形文を沿わせている。

11は胴部上半部の文様帯を2帯に分割し、上段に渦巻文を中心としたモチーフを、下段に楕円区

第169表 第53号住居跡出土石器観察表 (第417～419図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
417 - 89	石鏃	I 2①	黒曜石	2.0	1.8	0.4	0.9	
90	石鏃	I 2①	チャート	2.9	1.9	0.5	2.1	
91	石鏃	I 2①	チャート	[3.9]	[1.6]	0.4	1.6	
92	石鏃	I 2②	黒曜石	2.7	[1.9]	0.4	1.2	
93	石鏃	I 2②	チャート	3.2	[1.8]	0.6	2.0	
94	大形粗製石匙	I 1②ア	ホルンフェルス	[7.0]	8.6	2.7	118.3	
95	スクレイパー	II 2①ア	砂岩	8.2	4.7	1.3	53.2	
96	スクレイパー	II 1①イ	砂岩	6.8	9.6	2.0	136.8	
97	磨製石斧	I ②ア	砂岩	[7.8]	4.0	3.3	149.8	
98	打製石斧	I ①イ	ホルンフェルス	10.2	3.4	1.9	85.0	
99	打製石斧	I 2②イ	緑色岩	[9.7]	3.0	1.4	51.4	
100	打製石斧	II 2①イ	ホルンフェルス	11.6	4.5	3.0	161.4	
101	打製石斧	II 2①ア	頁岩	10.7	4.1	1.1	51.6	
102	打製石斧	II 2②イ	頁岩	8.5	4.1	2.1	81.6	
418 - 103	打製石斧	III 2①ア	ホルンフェルス	12.5	6.0	2.3	206.8	
104	打製石斧	III 2①イ	砂岩	10.8	4.5	1.9	127.4	
105	打製石斧	III 1①ア	頁岩	11.3	6.7	2.8	227.5	
106	打製石斧	III 2①ア	頁岩	8.4	4.2	1.8	64.5	
107	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	8.9	5.8	2.1	92.8	
108	打製石斧	III 1②ア	砂岩	[10.4]	5.9	2.7	206.8	
109	打製石斧	II 2②ア	ホルンフェルス	[9.1]	4.6	2.4	113.4	
110	敲石	IV 1-3①イ	砂岩	10.1	5.1	2.9	190.1	
111	磨石	I 1-3②ア	砂岩	[5.8]	[4.2]	[5.0]	142.1	
112	磨石	II 1-3①イ	閃緑岩	13.5	7.5	3.5	620.1	
113	石皿	III 2②ア	緑泥片岩	[13.5]	[8.2]	[3.6]	526.8	
419 - 114	石皿	III 2②ア	緑泥片岩	[27.6]	[21.0]	4.6	3287.8	
115	石皿	II 2②ア	閃緑岩	[18.8]	[23.8]	10.0	5586.4	表面一部黒色化

画文を配する構成をとり、胴部の幅広文様帯には円形文を中心としたモチーフを描くものと思われる。

12は括れる頸部と底部に楕円区画文帯を有し、胴部を無文帯とする。胴部無文帯の区画隆帯には刻み状の爪形文を施文する。楕円区画内には集合沈線を施文する。口縁部文様帯は4単位に分割できる変形の3単位、底部には3単位に区画文を配する構成である。

13は口縁部と底部を欠損するが、胴部に隆帯で4単位の楕円区画文を施文する。文様帯の区画には波状沈線の沿う爪形文を施文している。

14は口縁部の、15は胴部の破片である。

16は無文の口縁部が開く器形で、口唇部に大きな山形眼鏡状把手1個を有し、把手右側に蛇体を表す蛇行隆帯文が垂下する。頸部には4単位で構

成する楕円区画文帯を設け、胴部に単節RL縄文を横位施文する。

17は口縁部が内湾する器形であるが、16と同様の文様帯構成で、頸部に4単位の楕円文を配する。区画隆帯の一部には、交互刺突文を施している。胴部は単節RL縄文の横位施文である。

18は小形の深鉢で、口縁部が内折する器形である。頸部に幅広1段の楕円区画文帯を巡らす。

19は3単位の波状口縁を呈する阿玉台式系の器形で、波頂部を中心に対向する楕円区画文を施文する。阿玉台Ⅲ式に比定されようか。

20は若干内湾する口縁部が開く器形で、口縁部に鋸歯状の隆帯文を巡らせ、肥厚する垂下隆帯の頭に渦巻文を施文する。隆帯で区画される胴部は、蛇行状やクランク状のモチーフを組み合わせ

て、複雑な文様を展開している。区画内の地文に条線文を施文する。

21は大形の細長い円筒形土器であり、半截竹管状工具の平行沈線で口縁部に「M」字状区画を施し、蓮華状文を沿わせる。胴部には横位の単節R L縄文上に幅広の爪形文でサンショウウオ文を3単位に連ねるモチーフ構成をとる。

22は胴部に2段の楕円区画文帯を設けるもので、区画文の間には単節R L縄文を充填施文する。

23は底部付近であるが、縦位のパネル状区画文を施文している。24、25も底部破片である。

26は円筒形土器で、地文に単節R L縄文を縦位施文し、幅広沈線で鋸歯状区画文を施文する。区画沈線には小波状沈線を沿わせている。

27はほぼ筒形の器形で、口縁部に眼鏡状把手を付ける。口縁部は幅狭の楕円区画帯となっている。胴部地文は0段多条R Lの縦走縄文である。

28は円筒形土器で、低平な隆帯で渦巻文と剣先状文を一体化するモチーフを描いている。

29～32は地文のみの深鉢で、29は口縁部に環状把手が付くようである。地文は0段多条R Lの縦走縄文である。30、31は口縁部が直線的に開く器形で、30は0段多条R Lの縦位施文、31は撚糸文Lである。32は口縁部がやや内湾し、胴部に単節R L縄文を横位施文する。

33は胴部の張る小形の樽形土器で、矩形のパネル状区画文を施している。

34は小形で球形状の壺形土器で、口唇部に突起を付け、胴部に2段の楕円区画文帯を設けている。上段の区画文内には渦巻文と三叉文を組み合わせたモチーフを施文する。

35は器種不明であるが、胴部から蛇行隆帯の付く棒状の把手が付く。胴部は半截竹管状工具による3本平行沈線で区画文を施文する。

36はキャリパー形土器の底部が独立したような小形の鉢で、波状文間に円形文を配するモチーフを施文する。

37は0段多条R Lの縦走縄文を施文する胴部の括れ部分である。

38～41は底部で、39は撚糸文Lを施文し、他は無文である。

42は台付土器の脚部である。円孔が空く。

43、44は浅鉢である。43は口縁部が内湾する器形で、低平隆帯で渦巻文を施文している。44は直線的に口縁部が開く浅鉢である。口縁内面に稜を有する。

破片では、56、57は雲母を含み、2列の押引文を施文する阿玉台Ⅱ式並行期の土器群で、58は角押文を施文する勝坂式古段階の土器である。

59～62は幅広の爪形文やキャタピラ文の脇に小波状沈線を施文するもので、勝坂式中段階の藤内式段階に比定されよう。63～75は隆帯脇に沈線を施文し、それに沿って爪形文と小波状沈線文を沿わせるものや、蓮華状文を沿わせるものがある。隆帯には刻みや、交互刺突文を施すもの、半隆帯状のものなどがある。

76～78は縄文を施文する深鉢の口縁部破片で、76は無節L、77、78は単節R L縄文を横位施文する。82、83は張り出す底部で、0段多条R Lの縦走縄文を施文する。

79～81は浅鉢で、79は口縁部が内湾し、文様を有するもの、80、81は口縁部の開く浅鉢で、波状口縁を呈するものである。

土製品では、84が小形の耳飾りで、鼓状を呈する。

85～88は土器片を利用した土製円盤である。

石器は89～115が出土した。

89～93は石鏃である。このうち、91は両側縁が鋸歯状で、先端が僅かに欠けている。この他、92、93は正面左脚部が欠損している。

94は粗粒の石材を素材として用いた横型の大型粗製石匙である。

95、96も粗粒の石材を利用しており、摘まみ部がないことから、スクレイパーと判断した。

97は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

98～109は打製石斧である。98～102は短冊形を呈する。刃部は98、100が片刃、99、101、102が両刃である。103～108は撥形を呈する。片刃の103を除いて、すべて刃部が両刃である。109は基部片である。

110は自然礫を用いた敲石である。

111、112が磨石で、111は周縁に整形が施されている。また、正面及び裏面の中央に敲打痕が集中している。

113～115は石皿の破片である。114は裏面に凹痕を有する。

第54号住居跡（第420図～第424図）

I-21区に位置する。東側で第53号住居跡と重複するが、本住居跡の方が古い。また、中央部で第114号土壇と重複し、炉を含めた中央部が大きく壊されている。

住居跡の平面形は北東方向に細長い楕円形で、規模は長径5.8m、短径5.5m、深さ0.7mである。

壁溝は検出されず、壁は皿状に緩く立ち上がる

柱穴は合計23基が検出された。壁際に小ピットが巡り、支柱穴と思われる柱穴は5基検出された。柱穴の規模、深さ、配置などから支柱穴と思われる柱穴はP2、3、4、5、1の5基であることは明らかである。

支柱穴の深さは、P1=83cm、P2=64cm、P3=73cm、P4=90cm、P5=86cmである。

炉跡は不明で、重複する第114号土壇によって壊されているものと思われる。

埋甕は検出されなかった。

住居跡の覆土からは復元されるような個体や大形破片はほとんど出土していない。しかし、重複する第114号土壇からは復元可能な勝坂式中段階の、およそ藤内式に比定される土器群が出土している。したがって、住居跡はほぼ同時期か、それ以前の時期の所産であると推定される。

遺物は第421図1～第424図62の土器類、石器類が出土した。

土器類は1～44である。

第422図6、7はP2から、8はP3から、9はP6から出土した。

1は波頂部から「U」字状隆帯を垂下し、波頂下を相対する杵状文を区画し、複列の結節沈線を施文する。阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

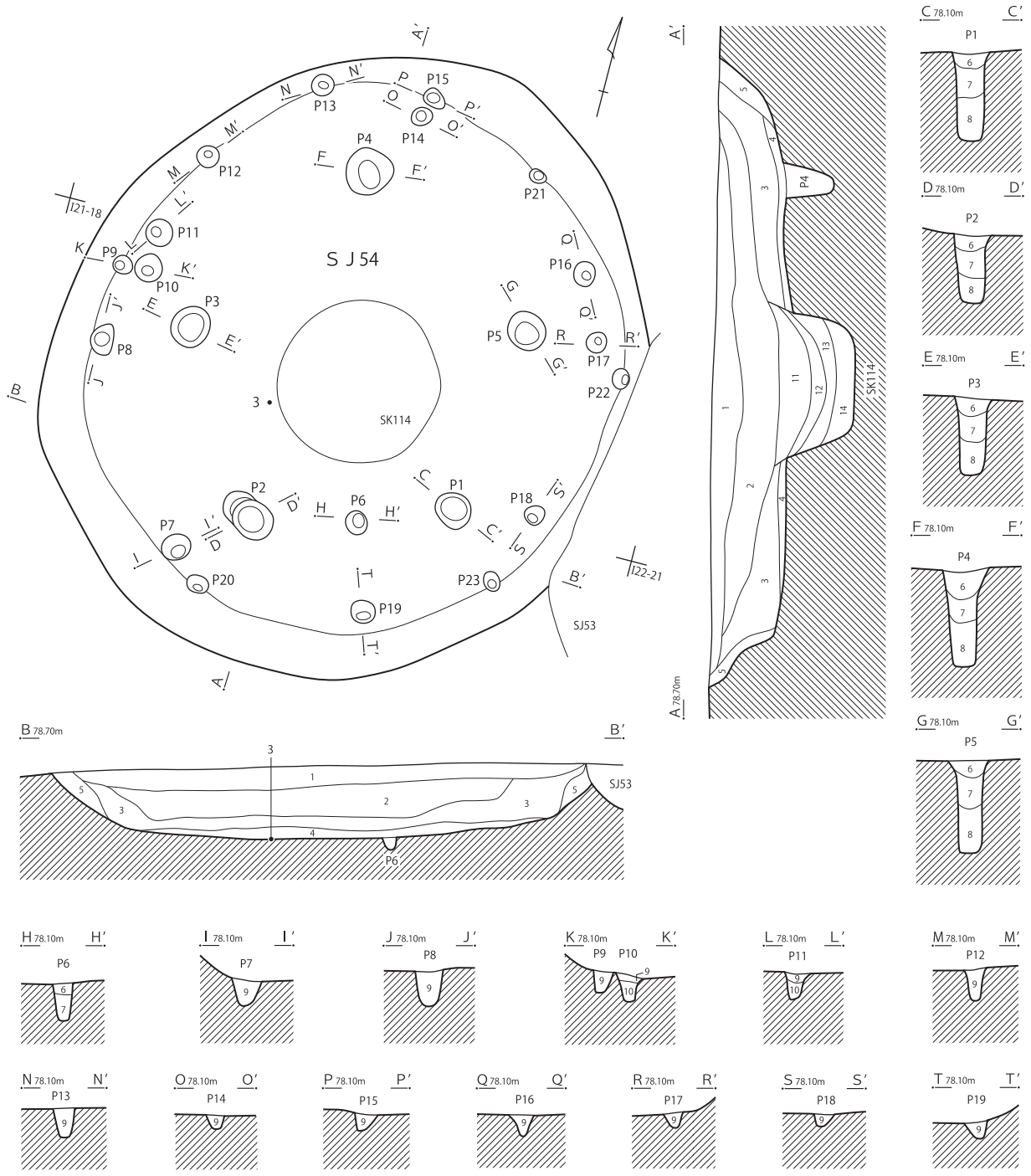
2は下膨れ状の口縁部に多段の幅狭楕円区画文を施文し、キャタピラ文状の押引文を施文する。口唇上から端部で渦を巻く蛇行隆帯を斜めに垂下する。新道式であろうか。

3は頸部で括れ、口縁部が開く器形で、口縁部にキャタピラ文で三角形区画文を連ねるものである。区画内は抉りの入る三叉文を施文する。頸部から胴部にかけては、半截竹管状工具による平行沈線で長形状のパネル区画文を施文し、頸部では区画内に三叉文、区画の縁辺に刻みを施している。胴部では区画文に沿ってキャタピラ文を施文し、区画内に集合結節沈線を施文する。新道式新段階から藤内式古段階にかけての段階であろう。

4は円筒形土器で、口縁部から円形文を繋ぐ隆帯を斜位に垂下する。胴部のパネル区画文内には単節RL縄文を横位施文し、区画の縁辺に刻みを施している。

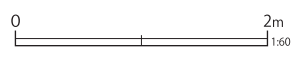
5は頸部から胴部にかけて3段の括れを有する瓢形土器で、外反する短い口縁部に斜位の結節沈線、1段目の膨らみに単節RL縄文、2段目の膨らみに三角押文の鋸歯状区画を施している。括れ部の区画は細かなペン先状工具の三角押文で行っている。新道式の新段階から藤内式古段階に比定されよう。

10～25は平行する角押文を施文する土器群で、大半は阿玉台Ⅱ式並行期の土器群である。11は波状口縁、10、12～15は平口縁である。11は波頂部下で相対する楕円状の区画文を長く押し引く2列の押引文で施文する。12、13は口縁部の楕

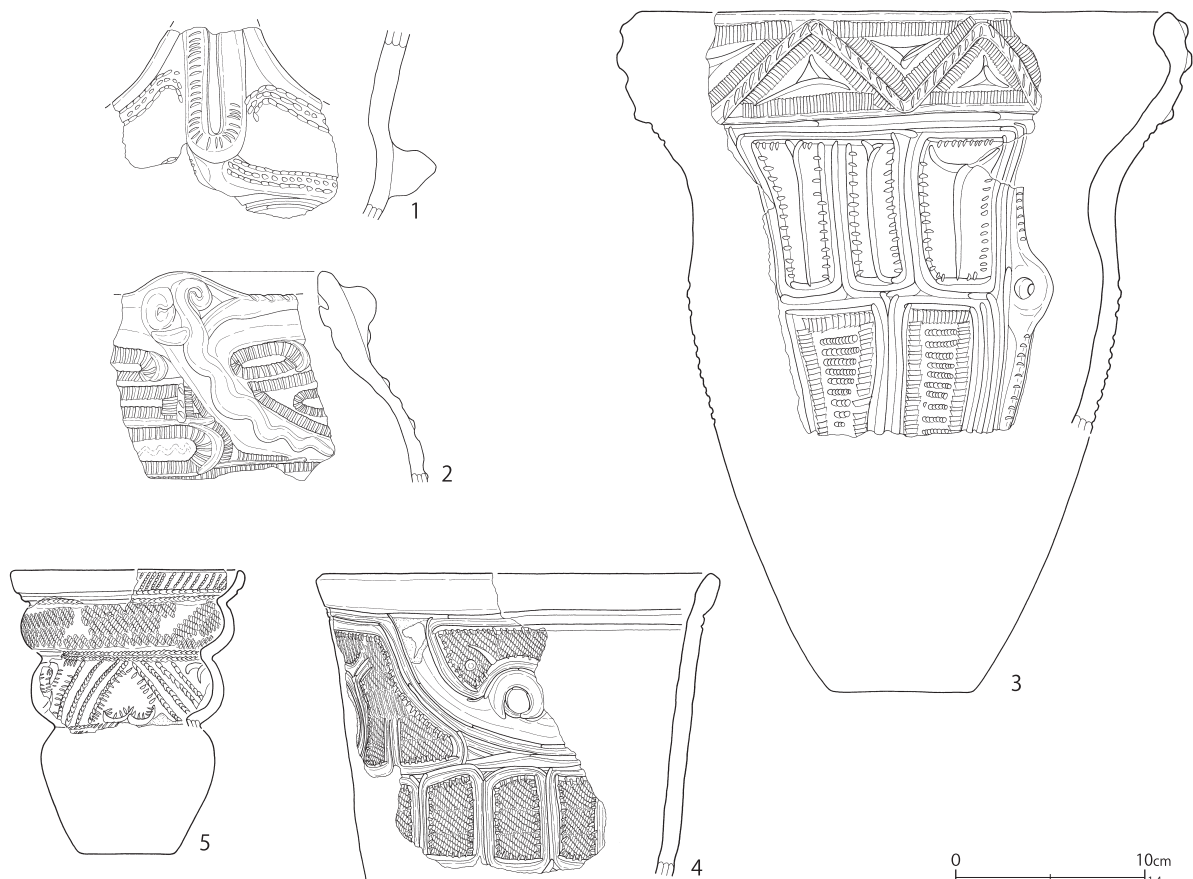


- S J 54
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 焼土粒子微量 遺物が多量に出土 しまり良い
 - 3 褐色土 ローム粒子多量 炭化物・ローム小ブロック微量 しまり良い
 - 4 褐色土 ローム粒子多量 炭化物・ローム小ブロック少量 しまり良い
 - 5 褐色土 ソフトローム主体 ローム粒子多量 炭化物微量
- S J 54 ビット
- 6 褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 ローム小ブロック微量
 - 7 褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 粘性あり
 - 9 褐色土 ローム粒子多量 炭化物・ローム小ブロック微量
 - 10 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量

- S K 114
- 11 暗褐色土 ローム粒子・炭化物多量 焼土粒子少量 ローム小ブロック微量
 - 12 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・ローム小ブロック少量 焼土粒子微量
 - 13 褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 ローム小ブロック少量 炭化物微量
 - 14 鈍黄褐色土 ソフトロームとローム小ブロックで構成される ローム粒子・ローム小ブロック多量 炭化物微量



第420図 第54号住居跡



第421図 第54号住居跡出土遺物（1）

第170表 第54号住居跡柱穴計測表（第420図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	35.0	83.0	P 2	52.0	64.0	P 3	38.0	73.0	P 4	45.0	90.0	P 5	40.0	86.0
P 6	22.0	35.0	P 7	30.0	25.0	P 8	30.0	33.0	P 9	20.0	23.0	P 10	27.0	25.0
P 11	25.0	25.0	P 12	22.0	30.0	P 13	23.0	28.0	P 14	20.0	12.0	P 15	22.0	13.0
P 16	25.0	20.0	P 17	20.0	15.0	P 18	20.0	11.0	P 19	24.0	15.0	P 20	22.0	40.0
P 21	18.0	35.0	P 22	20.0	35.0	P 23	20.0	15.0						

第171表 第54号住居跡出土復元土器観察表（第421図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
421-1	[10.1]	-	-	-	10%	421-4	[15.6]	(19.8)	-	-	30%
2	[11.0]	-	-	-	20%	5	[8.7]	(12.4)	-	-	30%
3	[22.5]	(27.7)	-	-	40%						

円区画に沿って2列の角押文を施文し、10、14、15は口縁部区画に施文する。14は2種類の角押文で区画し、地文に無節縄文Lを縦位施文しているようである。15は角頭状の幅広い口唇部を有し、口縁部裏面に2列の平行角押文を施文する。

16～25は断面三角形の隆帯で区画及びモチーフを描き、平行角押文を施文するものである。

大半が雲母を含むが、16、22は含まない。20には粗い襷状整形痕が残る。

26は胴部に爪形文状の刻みを施すもので、襷状整形痕を模したような施文である。

27は環状把手の付く山形状の波状口縁である。環状把手から蛇行隆帯が垂下する。雲母を含んでいる。



第422图 第54号住居跡出土遺物(2)